

も私にはあの人は要らないわ。』

三九二

『そりやさうだともねえ。』とコラブレエワは自分の袋の中に何か探しながら、如何にも何か全く別な事を考へてゐるらしい様子で、出し抜けにさう賛成した。『さあ、やらうでねえか、プランを飲まうや。』

『私は飲まないわ。』とマスロオワは答へた。『お前さん達だけでお飲み。』

## 第二編

二週間経つと元老院で再審があるといふ事になつたので、その時にはネクリュウドフは彼得斯堡に行つてゐようと思つた、そして其再審の結果が不成功だつたら、辯護士の云つたやうに其の書いて呉れた愁訴狀を皇帝陛下に奉らうと思つた。併しそれも駄目だつたら、又それも辯護士の言ふ通りに控訴理由が薄弱だから駄目になるものと思つてゐなければならぬといとすれば、マスロオワの組の囚徒は六月の初旬に西比利亞へ向けて送られる事になつてゐるのであつた。それでマスロオワの行く處へ従いて行くと固く決心してゐるネクリュウドフは、今は取敢へず所有の地所を見廻はつてそれぞれ處置をつけておかねばならないのであつた。

先づ第一に彼は一番近い一番廣い豊饒なクスミンスコエに行つた。そこは彼が幼年時代と成年時代を過ごした處で、又中年になつてからも行つてみた事が二度あつたのである。一度は母の頼みで獨逸人の管理者を備うて其處に連れて行き、其の男と一緒に土地一切の經營を

監理した事があつて、その爲めに彼は其地所其物の状況も、百姓連と地所管理方との關係も其時から既に知つてゐた。その關係は即ち百姓は地主に絶對的に從屬してゐるといふ關係であつた。その事は彼は既に大學生時代にヘンリイ・デオヂの說に推服してゐた頃から知つてゐて、父より譲り受けた土地を百姓達に分けてやつたのも畢竟デオヂの說を行つたのであつた。けれども其後毎年二萬ルウブルの金を浪費するやうな生活に慣れてからは、そんな學說の影響も力も悉く失はれて行つた。もう彼はそんな事は一切忘れてしまつた、そして母に貰ふ金は何處から來るかを一度も考へてみた事がなかつた、むしろそんな考は彼自ら追ひ拂ふ事をつとめた。

しかし母が死んで、其遺産相続の手續をせねばならないのと、其遺産たる土地を自分が支配せねばならない必要とから、土地私有に對する彼の疑問は再び頭を擡げて來た。それでも一ヶ月前までは彼もまだ、自分には現状を變更する能力がない、又自分が直接に支配してゐるのではないと獨りで云ひ譯けをして可なりに平靜に安穩に居られたのである、そして自分は所有地より遠く離れてたゞ其處から収入の金だけを取り寄せて可なり平氣で暮らして行く事が出來たのである。が、今は彼はもはや其儘にしては置けないと思つた、西比利亞行きが目前に迫つてゐる、又自分は今込み入つた困難な監獄事件を持つてゐる、そして其ために

は社會的の高い地位と殊に多くの金とが必要でもある、併し自分の損にならうとも、もう此上今までの土地制度を繼續させておくわけには行かないと思つた。

それで彼は今後土地を自分で經營する事をやめ、低廉な料金で百姓達に貸しつけ、百姓達が地主に隷屬しない獨立なものに成れるやうにしてやる事に決心した。以前にも屢々彼は地主の立場を思ふ毎によく奴隷所有者のそれを聯想した、彼等は其所有してゐる奴隷の百姓等の勞役を免除して其代りに金を納めさせてゐた事が往々あつたのである。素より其位の事が問題の解決でないのは云ふ迄もなかつた、しかし解決の爲めの第一歩である事は否まれなかつた。ひどい奴隷制度から幾らか緩和された制度へ進んだものであることは疑ふ迄もなかつた。ネクリュウドフもそれと同一な第一歩を踏み出すべく決心したのである。

ネクリュウドフは正午頃クスミンスコエに着いた。そして彼は今後何事にも簡單な生活をしようと思つてゐるので、電報など打つのも止して、たゞ停車場で二頭立の小さい馬車を雇つた。御者は若い男で、帯から下が襪になつてゐる袖無しひだりの南京上衣を着て、馭者臺の上に跨るやうに腰をかけたが、過度にこき使はれて跛びつこを引いてゐる右手の馬と瘦せかけて、どきどき息を切らしてゐる左手の馬とが歩き出すと、いつも自分達の好きな話を客にしかけるのであつた。

三九六  
馭者は自分がクスミンスコエの地主を乗せてゐるとは知らないで、しきりと其處の管理人の話をした。

『どうもあの獨逸の野郎、食へねえ奴でござえやしてなあ』と馭者は半ば身をひねつて客の方へ向くやうにしながら云つた。『三頭立の馬車なんかで女房と相乗りと洒落れやがつてからに、己の行きてえ處へ行つたりしやすだからね。この冬のクリスマスがあの大けえ家であつた時なんかも、その時手前もお客を乗せて行きやしたがなあ、何でも彼でも飾り付けの見事な事、此の界限で又とあござえやしねえだよ。それに彼奴が金を盗んでやがるなあ、ちつとやそつとちやねえでがす。だて、出来ねえ事ねえでがすだもの。何でも彼奴の思ふ通りでさ。あんでも見事な地所も買込みやがつたちふ評判もござえやす。』

ネクリュウドフはかねて其の獨逸人の管理人がどんな管理をしてゐるのだの、又どんなにして私腹を肥やしてゐるのだのと聞いても、全く平氣であり得る積りであつた、併し今現にさう馭者に話されてみると、決して快い氣持はしなかつた。『彼は朗らかな今日の日を悦んでゐた、時たまに太陽を隠す濃い黒雲をも娛しんでゐた、野より雲雀が上つたり、その其處彼處が耕されたりしてゐるのも、又森や林にはや新緑の艶が出かゝつてゐるのも、それ等を見るのは皆嬉しい氣持であつた、——それにも拘らず彼は何となく自分の心に不愉快な雲のかゝ

つてゐるのを知らぬ振りする事は出来なかつた、そして其不愉快が何であるかを自分の心に問うてみると、それはクスミンスコエの地所に件の管理人が馭者の言葉通りの管理をしてゐるといふ事であつた。

しかし愈々クスミンスコエの事務所に着いて、早速仕事に取りかゝつてみると、彼の其の不愉快の感じは直ぐ消え去つた。

諸帳簿を調べたり、管理人と話をしたり、そして其管理人が地主の利益を計るには出来るだけ百姓達に何も所有させない事にして絶対に地主に従屬させておく方がいゝと、露骨に眞面目くさつて説くのを聞いたりすると、ネクリュウドフは却つて愈々自分の決心の臍を固め、自分の土地經營をやめて百姓達に賃貸しようと思つた。それから彼は尙ほ諸帳簿や管理人の話によつて、最良耕地の三分の二は此方で直接に僱つてゐる労働者に完全な農具を使用させて耕させ、三分の一だけを一デシエティンに就き五ルウブルの約束で百姓達に請負はしてある事を知つた。即ち百姓は五ルウブルの爲めに三度耕し三度肥を入れ、種蒔き、刈り入れ、束ねて穀倉に運ばねばならないので、それは尋常に雇人に報酬をやつて働かせれば安く見ても一デシエティンにつき十ルウブルは拂はねばならない仕事なのであつた。それから又百姓達は土地のものなどを使ふと、その高い代價を拂はねばならないのであるが、彼等はそれ

を労働で支拂ふので牧場に自分等の馬を放しても、森から薪を取つても、馬鈴薯の葉っぱを使つて、その償ひに働いてゐた、そしてそれでも殆ど皆が皆まだまだ事務所に負債をもつてゐるのであつた。そんなわけであるから彼等はめいめい當てがはれてゐる地面の一デシエティンに就き、其收穫の價の五分の利に比べれば四倍にも當る賃借料を拂つてゐる理であつた。

そんな事のすべてをネクリュウドフは以前にも知つてゐた、併し今それを聞いてみると不思議でならなかつた、自分は云ふ迄もなく、自分と同じ地位にある凡ての人が、さういふ經營法の不當非理な所以をどうして今迄見のがしてゐたか、まるで分らなかつた。管理人は若しネクリュウドフが地所を百姓等に貸す事にするならば、諸道具一式早速不用になるのであるが、賣るとしても原價の四分の一にもならないといふ事、又土地は百姓等にまかされるならば散散に荒らされるといふ事、結局萬事につけどれだけネクリュウドフの損になるか知れないといふ事を説いたが、それはたゞネクリュウドフをして其所存を遂行する意志を強めしめるに過ぎなかつた。自分の収入の大部分が減らうとも、それは素より覺悟の前で、土地を百姓に貸しつけて、それで善い行爲をしたいといふのが彼の心であつた。それで彼は早速取りかかる事にきめ、自分の滞在中に事を済してしまはうと思つた。現在の作物を取り入れたり

賣つたり、牛馬や諸道具や其他不用な建物などを賣拂つたりする事は、彼が行つた後で管理人にしてもらつてもいゝので、彼は今は管理人にたゞ所有地内三ヶ村の百姓達を明日呼び寄せて貰ふことにした。彼は自分の考を百姓達一同に告げて、土地の賃賃を協定しようといふのである。

彼は管理人が様々に説き立てたにも拘らず自分の考を確乎と持つて動かかなかつた事、百姓達の爲めに犠牲を拂つてやるべく既に其準備をしてゐる事を愉快に意識しつゝ、事務所を出て行つた。そして明日の事を思ひつゞけながら彼は其邊を少し散歩した。家を廻つて花壇の間を行つてみたが、今年ほどの花壇にも丸つきり手入れがしてなく、管理人の住ひの前だけきちんとしてゐる許りで、あとは皆荒れ放題になつてゐた。それから色々な灌木の蓬々と生えてゐるテニス場を通り過ぎた彼は、嘗てよく葉巻を吹かしながら散歩した事のある菩提樹の並木道に來てみた。其處では三年前に彼の母を訪ねて來たキリモワといふ女といちやつき合つた事があつた。

彼は明日百姓達に何と云はうかとそれを考へながら又管理人の許に來て、從來の經營全部をやめる方法について茶を飲みながら管理人と話を交へた。それから自分が百姓達に對して爲さうと企ててゐる善行に自ら愉快を覺えながら、その大きい家の内で自分の室ときめられ

た、何時も客用に使はれる室に行つた。

1000

掃除のよく行届いた小さい其室にはゴニスの風景畫が二三枚壁にかけてあり、二つの窓の間には鏡をはめてあつた。据ゑてある寢臺も彈條入りで綺麗であり、その傍の小さい卓には水の入つた硝子壺と燐寸と消燈器がのせてあつた。鏡の前の大きい卓の上には彼の鞆が載つてゐて、一緒に持つて來た四五冊の本や化粧品入の匣などが、其開いた口から覗き出してゐた。本は皆犯罪に關するもので、露西亞文で書いたのも獨逸文や英文のもあつた。彼は村々を馬車で行つたりする時、閑々に讀まうと思つて持つて來たのであつたが、今はそれどころではなかつた。全く違つた別な用に彼は没頭せねばならないのであつた。

室の一隅には彫物の飾のある古風なマホガニイの臂掛椅子があつたが、それはいつもネクリュウドフの母の寢室にあつたものである。ふとそれに目の止つた彼は、全く思ひがけもなく或る不思議な氣持を覺えた。此の家もやがて朽ち果ててしまふであらう、此處の庭も間もなく荒れ放題になるであらう、森も林も多分伐り倒される事であらう、と思ふとそれが急に傷ましくなつた。家畜の運動場も、其小屋も、諸道具を入れてある納屋も、入つてゐる諸道具も、馬も牛もそれ等は成る程自分が買入れたり備へ付けたりしたものでこそなかつたが、兎に角一通りならぬ勞力や注意によつて設定され維持され養はれ來つたものであるのに、と思

ふと彼は何となく悲しかつた。今まではそんなもの一切を棄てるのは何の雜作もない事に思つてゐた。だのに今は急にそれが惜しくなつた、と思ふと土地を分配してやる事も収入が減する事も惜しまれて來た。殊に今の彼には金が必要なのであつた。土地を百姓にやつたり今後の經營をやめたりするには及ばないではないか、そんな事をするのは、無分別といふものだ、といふやうな考量や打算も出て來た。

「おれは土地を私有してはいけない。そして土地を持たないとすれば今迄の經營も出來ない筈である、それに又おれは西比利亞へ行かねばならないのだから、家や土地の必要はない。」と彼の心の方で云ふ聲があつた。すると又他の聲が云ふには、「土地の私有は悪くはない、第一お前は西比利亞で一生を送るのぢやあるまい。第二にはお前が結婚をすれば子供を持つに相違ないが、地所家屋はお前が親に譲り受けた通り、又矢張り其通りきちんとして子供に傳へなければならぬ。土地其物に對しても義務がある。それを呉れてやつたり荒れ放題にまかせたりする事は雜作もないが、新たに作り設ける事は一通りの困難ではない。だから先づお前は何よりもお前の今後の生涯をどうする積りか夫れを篤と考へて、それに順應してお前の所有物の處置をしなければならぬ。」

それから又「お前がこれから爲うと思つてゐる事は、實際お前の個有の良心に従つてす

ることと思つてゐるのか、他の多くの者の賞讃を得たい爲めにするのではないのか。」とネクリュウドフは自分に尋ねてもみた。すると衆の賞讃を期待する心が今度の決心にも與へて力があつた事をも自ら否定するわけには行かなかつた。そしてそれを思へば思ふほど尙ほ様々の多くの考が頭を擡げて來た、そして後には何が何やら分らなくなるのであつた。それで彼はそんな考を振り棄てて疲れた頭を安めるために、新しい麻布を敷いてある寢臺に横はつて睡らうと思つた、そして明朝よく休まつた清新な頭で其日の問題に臨まうと思つた。

けれども大分長いこと彼は睡れなかつた。あけ放しておいた窓からは新鮮な空氣や月の光と一緒に、蛙の聲が流れ込んで來た。庭の遠くの方では鶯の聲もした、その一つだけは窓の直ぐ前の花さかりの紫丁香花にとまつてゐた。ネクリュウドフは蛙の聲と鶯の歌に耳を貸してゐる間に、何時となく典獄の娘のピアノの音を思出した、それから典獄其人を思ひ出した。マスロオワを思ひ出した、唇を慄はして「私は構はずに、そつとして置いて下さいまし。」と答へたのが思ひ出された。それから管理人の獨逸人が現はれて、蛙の鳴いてゐる方へ下りて行くので、それを止めたが、管理人は頓着なくずんずん行つて、行つた許りか何時の間にかマスロオワに變つて、ネクリュウドフに意地悪く「私は懲役女でございます、あなたは公爵様ですわ。」と毒づくのであつた。——「いや、私は考を翻しはしない。」と彼は彼女に抗つて

云つた、と思ふと其時幽かに目が覺めた。「おれの爲ることは善いのか悪いのか、おれには分らない、明日になれば分るんだ。」それから彼自身も管理人やマスロオワの消えて行つた方へ沈んで行つて、健康な安らかな睡りに落ちた。

## 二

翌朝ネクリュウドフは九時になつてやつと目を覺ました。彼に附けられた事務所の年若い下役は、彼が起きる氣はひを聞くと、今迄になかつた位ぬびかびかと磨き立てた彼の長靴と井戸より汲み立ての清冽な水を持つて入つて來た、そして百姓はもう今集つてゐる由を告げた。ネクリュウドフは少し何か考へる風をしたが、直ぐ飛び起きた。土地を分けてやつて今迄の經營をやめるのを惜しいと思つた昨日の心持は、何處へ消え失せたのか痕跡もなくなくなつてゐた。彼は急いで服を着けながら、その變りやうを餘りの事に不思議に思ひつゝも、はや既に目前に差迫つて來てゐる事を仕遂げる愉快にいそいそして、漫ろに夫れに得々たる満足感をさへ感じた。大半草蓬々となつてゐるテニス場を彼は其處の窓から眺めやつた、其處に百姓達は管理人の指揮に従つて集つてゐるのであつた。

前夜蛙がしきりに鳴いたのは徒らでなく、今日は天氣がどんよりしてゐた。早朝から煙の

やうな細い濛い雨は靜かに降つて、風も無い草木の葉や枝には雨粒が懸つてゐた。窓からは瑞々しい新緑の香も流れ込み、雨を慕ふ大地の匂も漂ひ入つた。ネクリュウドフは服を着ける傍ら、百姓達の集つて来るのを幾度も窓から見やつた。百姓達は三々五々やつて来て、互ひに挨拶などしながら、環を作つて、杖にもたれて何やら話などし合つた。筋骨の逞しい太つた管理人は大きい卸のついた詰襟の襟の青い短い上衣を着て、百姓等がはや集合して待つてゐる由をネクリュウドフに告げに來た。そして百姓等に會ふ前に珈琲か茶か飲むやうに、その支度も出來てゐるからと云つた。

「いや、私は直ぐ百姓達に會ひませう。」とネクリュウドフは云つた、そして愈々百姓達に話をするのでと思ふと、全く思ひがけなかつた妙な一種のきまり悪さが急に感じられた。

彼は百姓達が自身で考へる事も敢てしてゐなかつた願を、叶へてやらうとしてゐるのである、つまり百姓達に或る良い事をしてやらうとしてゐるのである。それでありながら彼は何となく彼等に對して濟まないやうな氣持を覺えた。集つてゐる百姓達の前に出て行つて、彼等に帽を脱いで禮をされると、彼はどぎまぎして暫くの間は何とも云ふ事が出來ずに、たゞ緒ら顔の百姓達のプロンドな、禿げた、又は胡麻鹽の頭などを見てゐた。煙のやうな雨は矢張り降つてゐて、百姓達の髪や髭や長い服を濡らしてゐた。百姓等は何を云はれるのかと地主

の顔を見ながら待つたが、地主はまだ自分の心の狼狽を鎮める事が出來ないのであつた。すると平素より露西亞の農民通を以て自ら許してゐる、冷靜な自意識の勝つた獨逸人の管理人が、先づ立派な露西亞語でネクリュウドフの不安定な沈黙を破つてやつた。肉付きのいゝ丈夫さうな營養佳良の彼はネクリュウドフと共に、頬も削げて皺の多い顔や、服の下にも瘦せて骨張つた様の想像される肩を持つ百姓等に對して著しい對照であつた。

「さ、皆聞くがいゝ、公爵がお前達に良い事をして下さるのだ。お前達にそれだけの手柄があつたのではないけれど、公爵はお前達に土地を分けて下さるのだ。」と獨逸人は云つた。

「どうして手柄がねえんでござえやす、ワッシリイ・カアルキ・チュ様。手前どもみんなお前さんの指圖通りにせつせと働えたちやござえやせんかね。お亡くなりになつた母御様にやあ、手前どもみんな良うく懐いて居りましただよ。あゝあ、どうかあの御方様が御安心なせえますやうに祈るだあ。若殿様だて手前どもをお見捨てにやなりましねえやなあ。そだから手前共も有難い思ふとりやするだ。」と茶褐色の髪をもつた喋り好きの百姓は云つた。

「手前ども何にも旦那様方に反對はしましねえだ、たゞどうにも暮し難うなりやしてなあ。」と顔の中の廣い髪の多い一人の百姓が云つた。「あんともはや暮して行くのが六ヶ敷うなりやしてなあ。」

「それだから私はお前達みんなに此處に集つて貰つたんです。私はお前達が望むなら、私の所有地全部をおまかせしようと思つてゐます。」とネクリウッドは云つた。

百姓達は彼の云つたのが分らないのか、又は本當と思はないのか、黙つてゐた。

「と云はしやるのあ、どういふ筋合でまかせて下せえまするだあね。」と袖無しの上衣を着た中年の百姓が尋ねた。

「お前達がそれを自分達に役立てるやうに、地代を受取つて貸してあげようと思つてゐる、やすい地代で貸して上げる積りをしてゐます。」

「そいつあ良え事があす。」と年の老つた一人が云つた。

「地代を手前どもが拂へ出来ねえやうにせえして貰はねあなあ。」といふ者もあつた。

「土地が貸して貰へるなら、借りねえでどうしますだい。」

「土地を耕して暮して行くのあ手前共の得手でござえやすからなあ。」

「旦那様方にしても、其方が都合好へ事<sup>ごう</sup>でござえするしなあ、金だけせえお取りになれなああ。そしてもう今後は争ひ事はねえやうになりやすだ。」

「争ひ事はいつもお前達の方から始まつてゐた事さ。」と獨逸人は云つた。「お前達がよく働いて、秩序を守つてゐさへすれば何も面倒はなかつた筈だ。」

「そりやあ、ワッシリイ・カアルキッチュさん、手前共にあ無理な御注文でござえやすだよ。」と鼻の尖つた瘦せた老人は云つた。「作物の畑さ馬を何故ひつ放したかとお前様は云はしやつたけどな、誰がひつ放すもんで。毎日々々、年が年中、手前は鎌を打振つたり何かして働き通しちやござえやせんかな、夜番の時に、いちよつくら睡込んだで、何も不思議たあ云へましねえさ。だもんで馬の野郎がお前さんの燕麥の畑さ入りましただあね、何もお前さんみてえに御自分の都合の好え事べえ云はねえがえゝやなあ。」

「お前達は秩序を保つてさへ居れば、外に云ふ事はない筈ではないか。」

「お前さんは秩序々々つて云ふけど、手前共もさうは手が届きましねえや。」と髪黒くて多い丈の高い若い男が答へた。

「だから私はお前達に、垣をすがるがよいと云つたぢやないか。」

「そんなら材木をお呉んなせえ。」と極く身窄らしい小男が後ろの方から言葉を挟んだ。「そいで手前は去年の夏垣をせう思つて樹を伐りましたでさあ、しるとお前さん手前を取つ捕まへて三月が間も押し籠めといたぢやござえやせんか、人を蝨の餌にしてさ。垣なんてしよう思や其様な事になつちまふだもの。」

「あの男の云ふのは、あれは何事なんです？」とネクリウッドは管理人に尋ねた。



「Der erste Dieb im Dorf (村で一番の泥棒です)」と管理人は獨逸語で答へた。「Yedes Jahr wird erert-  
appt (毎年捕まる奴)——お前は他人の所有は他人の所有として大切に思ふ心がなくてはなら  
ないよ。」

「手前共がお前さんを大切にしていゐねえんがすかえ。」と一人の老人は云つた。「手前共は  
お前さんを大切にするより外ねえぢやありやせんかな、何ちふてもお前さんの手の中だも  
の。お前さんは手前共を仕度え思ふまゝにどうにでもしなざる事出来るだもの。手前どもを  
繩にして縊らう思やあ纏る事も出来るぢやねえかな。」

「おい、おい、爺さん、お前達が悪い事さへしななければ、どうしてお前達をさうひどい目な  
んかに矢鱈に逢はせられるものかね。」

「手前共が悪い事したとえ？　ぢやあお前様はしねえて云はしやるかえ。去年はお前さん手  
前の面あ打擲つたでねえかな、この通り傷痕が残つてますだよ。それでもなあ、貧乏人は訴  
へたて金持にやあ勝てはしねえだから。」

「お前は規則をよく守る心を持たなくちやいけない。」

そんな調子で何方からも畢竟言葉の争をしてゐるに過ぎなかつた、そして争つてゐる者み  
な、今日そこに集つたのが何の爲めであつたかをも、はや覺えつかすにゐた。それでネクリ

ウドフは皆を話の本筋に立歸らせるべく、そして地代と其支拂期限を協定すべく促した。  
「それでだ、此土地の事だがね、お前達はどう思ふ、借り度いと思ふのかね。借りられると  
すれば地代は何程にしたらいゝだらう。」

「旦那の土地でござえやせんかな、旦那の方できめて下せえまし。」

でネクリウドフは其値を云つてみた。すると夫れは他所で百姓達の借りて拂つてゐる値  
よりはすつと廉かつたけれども、それでも例によつて百姓達は高いと云つて、頻りと値切つ  
た。ネクリウドフは自分の云ひ出す事は非常な歓迎を受けるだらうと期してゐたのに、悦  
びの影さへ見せて貰はなかつた。ただ、彼の云ひ出した事を百姓等が自分達の利益だと思つ  
てゐる事は、誰が此土地を貸して貰へるか、百姓全部残らずか、若しくは個々でかといふ話  
になつた時、地代支拂ひ能力の覺束ない者はいけないと云ふ百姓等と、さう除外される百姓  
等との間に激しい論争が始まつたので、成程さうかとやつと首肯されたのである。最後に管  
理人の仲介によつて地代も其支拂期限もきめられた。それから百姓等は高い聲で何のかのと  
話し合ひながら、其處から引き取つて村の方へ行つた。ネクリウドフは管理人と相談し  
て貸地の規定を作るために事務所に行つた。

一切萬事ネクリウドフの思ひ通りに規定が出来た。そして百姓等は他所よりも三割廉い

地代で其村の土地を借りる事が出来るやうになつたのである。其地よりのネクリュウドフの収入は殆ど半分に減じた、しかし夫れでも彼の入用には十分であつた、殊に森を賣つた代や牛馬や農具などをこれから賣つて受取る代金を算入すれば十二分であつた。さういふ具合で一切萬事が思ひ通りに巧く運んだやうであつた。それであるのにネクリュウドフは何となく気が鬱いだ、不愉快であつた、そして、きまりが悪いやうにさへあつた。彼に禮を述べた百姓も二三人あつたけれども、それでも百姓等全體としてはまだ不満足に思つて居り、尙ほ欲張つてゐるのが、ネクリュウドフにはよく分つたのである。彼の方では非常な奮發をしてやつたのに、百姓等はそれでも悦ぶ道を知らないのである。

翌日貸地規定の署名も済んだ、ネクリュウドフは其署名の爲めに選ばれた數人の年とつた百姓達に送られて、驛の馭者が云つた「美々」しい三頭立の管理人の馬車に乗つて驛へ行き、そして其百姓等とも分れた。百姓等は昨日からの事がまだ十分腑には落ちないので、不安と不満足の氣持で頭を頻りに振つてゐた。ネクリュウドフ當人も自分の事が不満であつた、そして夫れが何故であるか自分乍ら知らなかつた、たゞ絶えず一種の不愉快と妙な羞恥を覺えるのであつた。

## 三

クスミンスコエからネクリュウドフは、二人の叔母より譲られた地、即ちはじめてカテウウシヤに逢つた土地へと赴いた。そこでも彼は土地をクスミンスコエでのやうに處分する積りであつた。併し其外にも彼は又カテウウシヤに關して何か詳しい事を聞き度い、カテウウシヤと自分の間に生れた子供の事も聞き度いと思つた。「實際子供は死んだのだらうか？ どうして死んだのだらう？」

ネクリュウドフは朝早く其の、パノオヲといふ村に着いた。そして昔の邸に馬車を入れて第一に目に止つたのは、建物といふ建物がどれもこれも、殊に住ひにきめてあつた中心の建物が甚く荒れ放題になつてゐる事であつた。長い間一度も塗り直しもされなかつた鐵の屋根は錆びて赤くなり、その屋根板の數枚は風の爲でもあらう捲り上つてゐた。下見の板は方々が剥けてゐたが、それらは釘が錆びてきかなくなつて、一寸した事にでも容易に除れたのらしかつた。屋外に下りて行く階段は前の方のも家の後ろの方のも、殊に彼に取つて思出の多い後ろの方のは、朽ち果てて崩れてたゞ礎だけが残つてゐた。玻璃の除れた二三の窓には代りに板を打着けてあり、それから管理人の居る附け足しの廂下の間も、料理部屋も馬小屋も、



「あなたの方の都合次第でいゝんです、私は腹が空いてゐないんだから。私は少し村を歩いてみよう。」

「如何です、お住ひの内へお入りになつてみては？ 内部はきちんとして置いてるのですが、御検分になるお氣はございませんか。外は少し……何ですけれど。」

「いや、後の事にしませう。それはさうと、此の地にマトレエナ・ハリイナといふ女がゐますかね。」

それはカテウシヤの叔母なのである。

「え、え、此の村にゐるんでございます。私はどうもあの婆には堪忍が出来ないんですよ。仕様のない女でございましてね、ブランドエの密賣をやつてゐるのでございます。ちやんと私は知つてるんですよ、随分八ヶ間しく云つてもゐますし、又證據を押へてやるのも譯はありませんがね、書付を出させるのも氣の毒なものですから。何しろあの年で孫を養つてゐるのですからね。」と管理人は例の微笑を湛へて云つた。その微笑は主人たるネクリュウドフに愉快に思はれ度いと努めてゐるからのものでもあり、又ネクリュウドフも自分も萬事につけて同一意見を持つてゐて互に信頼し合つてゐるといふ事を、先づ自分の方から見せ度いと思ふからのものでもあつた。

「どこです、その家は？ 私行つてみるから。」

「此の村の端れでございませう、一等端れから三軒目手前のでございませう。左側に粘土小屋があります、その隣りがさうでございませう。私がお供致しませう、其方がよく分りますから。」と管理人は例のこにこしながら云つた。

「いや、有難う、私一人で直ぐ分るでせう。私が行つてゐる間にあなたは百姓達が集合するやうに傳へて下さい、土地の事について私は話をする積りですから。」とネクリュウドフは、此地もクスミンスコエの通りにやらう、そして都合が出来次第では今日中にも済まさうといふ氣でさう云つた。

四

ネクリュウドフは門を出てから、牧場の上を蜿々と向うへ行つてゐる車前草と迷迭香の茂つた路で、先刻見た斑らかな胴着をつけて耳飾りをかけた小娘に逢つた。小娘は先刻は出て行つたが今は歸るところらしく、矢張り跣足で、さつさと歩みながら、左の腕は容赦なく打振り打振り、右の手では赤い羽色の鶏を一羽しかと乳の邊りに抱へてゐた。鶏も其赤い鶏冠はふらふら揺れてゐるが、極く温良しく靜かに抱かれたまゝで、たゞ其黒い肢を時々延ばしたり

縮めたりして娘の胴着に蹴爪でしがみ付くのであつた。小娘はネクリウッドフに近づくと歩みを緩め、直ぐ前に来ると立止つて、頭を一寸上げてから丁寧に身を屈めて彼が通り過ぎて行くまで禮をした。彼が行つてしまふと娘は直ぐ又さつさと急いで、鶏を抱へて事務所の方へ走つた。それからネクリウッドフは井戸のある方へ下りて行くと、其處で彼は水の一ぱい入つた重さうな桶を前屈みになつて背負つてゐる老婆に逢つた。地の粗い黒い胴衣を着た其老婆は其水桶を用心してそつと下におろし、そしてこれも亦矢張り丁寧にネクリウッドフに禮をした。

井戸から向うが村になつてゐた。よく照りつける暑い日であつた。午前の十時頃にはもう蒸々と暑く、湧いて来る雲は時々太陽を隠した。眞直ぐに向うへ通つてゐる道を挽いて行く肥料車と、殊にネクリウッドフが前を通る入口を開け放してある百姓家の肥料溜の掻き混ぜられてゐるのだから、ぶんと烈しく鼻を突いて来る臭氣は、其通り一ぱい何處でも臭はせてゐた。汚物の汁のついた胴着やズボンを着けて車の後に従いて向うへ行つてゐる跣足の百姓等は、丈の高い恰幅のいゝ紳士が鼠色の帽子の絹の平紐を日に輝かしながら一步隔きに柄の頭のびかびか光つてゐる滑つこい洋杖で地を突きつゝ、自分達の村の中に入つて来たのを振り返り振り返り見た。野良歸りの百姓等は自分達の空車の上にひどく揺られながら、例にな

く立派な紳士が村の通りをやつて来るのを怪しみ見やりつゝ帽子を取つた。女どもは木戸口の前に出て来て、ネクリウッドフを指し示し合ひながら、彼が行き過ぎた後ろからも見送つたりした。

ネクリウッドフは四つ目の木戸口の前に来かゝると、その内から急に肥料車ががらがらと高い音を立てて走つて出て来たので、一寸立止らねばならなかつた。その車には、平たく固めた肥料が高くうんと積まれて、その上に乗り手の腰かけるために狭い席が一枚敷いてあつた。六歳位の男の子が其車の後から従いて来た。木皮の靴を穿いた一人の若い百姓は車の横について大股に歩んで来て、馬を木戸口から出した。すると其後から脚の長い葦毛の小馬が續いて飛び出して来たが、ネクリウッドフを見ると驚いて車の傍に身をすりつけた。しかし其輪に脚が觸つたと思ふと又飛び立つて母馬の前をすり抜けた。重い車を木戸から引き出した其母馬もそれに愕いてけたたましく嘶いた。其次に出て来た馬は瘦せぎすな併し丈夫さうな跣足の老人が轡を取つてゐた。縞のあるズボンを穿いて長い汚い胴着を着た其老人は、どつどつと骨張つた肩が其胴着の下にも著しかつた。

馬が表の通りに出てしまふと、老人は木戸口の所に戻つて来て、ネクリウッドフに對つて丁寧に禮をした。

「お前様はあの、手前どもの御主人様の甥御様ぢやござえませんか。」  
「え、さうです。」

四二八

「まあ、ようおいでになりやしただ。ぢやあ、あの、手前どもを訪ねて來なさりやしたかねえ？」と話し好きの老人は尙ほ云ひ繼いだ。

「え、さうです。」ネクリュウドフは別に何と云ふべきかを知らないでさう云つた。「どうです、お前達の暮し具合は？」

「何だとえ、暮し向きでござえやすかな。そりや酷えもんでござえやすだよ。」  
「だつて、どうしてそんなに酷いんです？」

「何せえ家の者が十二人でやすからなあ。」と云つて老人は、頭かけの布を引滑らして額に汗を出しながら、肥料のまだすつかり除れないでゐる段の上に熊手を持つて立つてゐる二人の女を指した。二人の女は着物の裾もまくり上げて脹脛の半分ほどは肥料で汚してゐた。「月にお前さん六ブウド(一ブウド)、(四)買三百八十匁餘の麵包粉を買はなきやなりやせんぢやねえか。何處から其金が來やすだあね。」

「お前の畑で獲れるんでは足りないのですか。」

「手前の畑だとね？」と老人は、冗談は云つて貰ひますまいとでもいふやうな調子で、「手前

の田畑は三人分きやねえでがすよ、去年は八堆獲れたつきりでな、クリスマスまでも支たねえやうな始末でさ。」

「それでは其後はどうするんです。」

「どうにも斯うにもやつて行ける通りにする外はござえましねえさ。一人の餓鬼はお前様の事務所の下働きにして貰えやしただ、だけど其稼ぎ賃も精進祭前に前借りをしてやすんなあ、税金もまだ納めねえでがすだよ。」

「税は幾らです。」

「手前の所ぢやあ四月に十七ルウブルでさ。あゝあゝ、何ちふ暮しだか。これぢやあどうしてやつて行けるだか、分りましねえのさ。」

「お前の家に行つてみていゝんですか。」と云ひ乍らはやネクリュウドフは、其處の木戸口から内へ入つて、少し掃除の出來てゐる所から熊手をまだ入れてない黄色いふんと鼻をつく臭氣の強い肥料の層の方へ行つた。

「何で悪い事ござえますだ。さ、さ、どうぞ。」と云つて老人は急ぎ足にやつて來て、その跣足の足の指の又から肥料をにゆつと食み出しながら、ネクリュウドフの前になつて自分の小屋の入口の扉をあけてやつた。

女達は愕いて後へ退りながら、頭の布をきちんと直したり裾を下ろしたりして、金のカフス釦をつけた立派な紳士が小屋へ入つて行くのをしげしげと見やつた。

小屋の内からは胴着だけを着た小娘が二人飛んで出て来た。ネクリュウドフは頭がつかへないやうに帽子を取つて前屈みになつて、上框の低い取付きの土間に入り、それから矢張天井の低いむさくろしい室に入つた、そこには物の體えるやうな臭ひが一ぱい漲つてゐて、機が二臺据ゑてあつた。煖爐の傍には袖をまくり上げて、筋張つた日に焼けた腕を出してゐる老婆が立つてゐた。

「旦那様が來なすつただ。おらの家へお客に來なすつただ。」と爺は云つた。

「まあ、これは、ようおいで下せえましただ。」と老婆は親しげに云つて袖をおろした。

「お前方の暮してる様子を見に來ました。」とネクリュウドフは云つた。

「それはまあ、御覽なせえます通りでさ、この通り暮して居りますだよ。此の小屋も倒れやしねえかと思ひますだけんどね、さうしると人間は潰れて死にますだよ。だけんどねえ、爺さんはまだ大丈夫だ云ひますだ。それだによつて、私ども大名様みてえな暮しをしますだよ。」と老婆は洒落混りに云つた。「私これから稼ぎ人どもに晝飯を出してやんなきやなりましねえだ。」

「お前方は晝食にどんな物を食べます？」

「私ども何食べるかて？ そりや好え物食べますだよ。一番目が蜜汁をつけた麴麴で、二番目が麴麴につけた蜜汁。」と老婆は抜けて粗く透いた齒を削き出しながら洒落れた。

「いや、冗談はよしてさ、お前達の今日晝に食べるものを見せて呉れませんか。」

「晝飯ちふてもなあ、と爺さんは笑ひながら、「手前どもの食ふ物は知れたもんでがすよ。婆さん、見せて上げるがえ、だ。」

婆さんは頭を振つた。

「お前様が百姓の食ふ物を見てえ云はしやるかね。よつぽどお前様は物好きと見えますだあね。なあ、もし、さうでねえぢやるか。何でも此の旦那知りてえ思はつしやるわなあ。ぢやあお知りになるがえ、だ、私今さき云ひやしたのし、麴麴に蜜汁だて。加之菜の汁がありますだ、女どもが昨日菜つばを取つて來やしたでな、そいで菜の汁がありますだよ、その次に馬鈴薯でさあ。」

「それつきり？」

「その外に何がありますもんで、お前さん。たゞ菜汁にはちつとべえ牛乳を入れます位えのもんでさあ。」と云つて婆さんは笑ひながら戸口の方を見た。

戸口が開いて、土間に大勢の者が押しかけて来た。子供や娘や、乳飲兒を抱いてゐる女などが、どやどやと戸口に薙めきながら、百姓の食べ物を見度いと云つてゐる珍らしい紳士を見に来たのである。それで婆さんは自分がそんな立派な紳士と交際つたりしてゐる所を見られてるやうな氣持で得意さうであつた。

「なあ、旦那様、手前どもの暮しは斯様に惨めなものでござえますだよ。どう云ふたらよかんべえ、斯様に、はあ、惨めでなあ。」と云つてから爺さんは戸口の方へ向いて、「何しに入つて来ただ。」と集つて来てゐる者どもに怒鳴りつけた。

「それでは、お暇しよう、さよなら。」とネクリウッドフは云つた。又もや彼は或る妙な不愉快ときまり悪さを覺えたのである、それは何故であるかは彼自身辨へる事が出来なかつた。

「どうも、はあ、有難うござえやした、こねえな汚え家においで下せえやして、はあ。」と爺さんは禮を述べた。

土間に集つてゐた女子供等は片方に詰め寄つて、ネクリウッドフの出て行く道をあけてやつた。彼は表に出て又通りを向うへ歩んで行つた。すると今の小屋の土間から跣足の二人の男の子が出て彼の後に従いて歩いた。その中の年上のは元は白かつたが今は大變汚くよごれた胴衣をつけて居り、年下のは桃色の襦袢めた着ぶるした胴衣を着てゐた。ネクリウッドフは

二人を見返つた。

「旦那様どこへ行くだあね。」と年上のが尋ねた。

「マトレエナ・ハリイナの家へ行くんだよ。お前達その家知つてるか。」

桃色の胴着を着た年下の子は笑つた。年上のは併し又眞面目に問ひ返した。

「どのマトレエナだかね？ 婆さんの方だかね？」

「さうだ、婆さんだよ。」

「お、そんちやあセミオニハの婆さんだあ。村の出端れでござえやすだ。おい等が連れてつてやりますだあね。——來ねえな、フェエドカ、旦那を連れてつてやらうぢやねえかな。」

「だて、馬はどうしてるだあね。」

「何ねえ、直きでねえか、大丈夫だよ。」

フェエドカと云はれた年下の子も直ぐ賛成して一緒に行つた、で三人は村の其通りを尙ほ向うへと歩いて行つた。

## 五

ネクリウッドフは大人に案内して貰ふよりも子供に連れられて行くのが氣樂でよかつた、



そして其二人にいろいろ話しかけた。桃色の胴衣を着た年下の子も今は笑ふのをやめて、年上の子と同様に分別ありげに答へなどした。

「お前達の村で一番貧乏な人は誰だね。」とネクリウッドフは尋ねた。

「一番貧乏な者かね、ミハイラは貧乏だね、セミオン・マカロフも。だがマルタが一番貧乏だね。」

「だけどアニッシャがそれより貧乏だよ。アニッシャは牝牛一つも持たねえだもの、物貰えして歩いとるだから。」と小さいフェドカが云つた。

「牝牛は持たねえけど、アニッシャの家は三人きりぢやねえか。マルタの家は五人居らあな。」と年上のは云つた。

「だけんどアニッシャは寡婦でねえか。」と年下のは寡婦だからアニッシャの方に肩を持つらしかつた。

「汝あアニッシャあ寡婦だ云ふけど、マルタだて寡婦みてえなもんぢやねえか。」と年上のは又對抗した。「寡婦と同じだあ、亭主が家に居ねえだからなあ。」

「では其亭主は何處に行つてるんだね？」とネクリウッドフは尋ねた。

「牢屋に打ち込まれてますだよ、そして蝨い沸かしてやすだあ。」と年上の子は著しい方言で

答へた。

「去年の夏ねえ、旦那様の森の樺の木を二本伐り倒しやしたでなあ。」と小さい方の薔薇色の胴着の子が慌てゝ説明し出した。「牢に打ち込まれやしただよ、もう半年になりやすだ。そんなで喉は乞食して歩いてやすだあ、家にや子が二人と婆やんが居りやすよ。」とその子は詳しくはなしつゞけた。

「何處だね、その家は？」とネクリウッドフは尋ねた。

「あすこだよ。」と子供は答へて、直ぐ先きにある一軒の小屋を指した。その小屋の前には髪のプロンドな小さい男の子が出て、膝の著しく外へ彎曲つた足で、辛うじてからだを支へながら、覺束なげにふらふらしつゝ、ネクリウッドフの來かかつた通りに當つてつつ立つてゐた。

「ワスカ、何處さ行せやあがるだ、この我鬼め。」と怒鳴つて其の小屋から走り出して來たのは、灰みtainなものの撒りかゝつた汚い鼠色の胴着を着た女で、ネクリウッドフを見るとさも愕いた様子で、その子に何か害でも加へられはしないかと心配するらしく急いで其子を抱へ取つて内へ引込んだ。

それが今子供の話したネクリウッドフ所有の森の樹を伐つて牢に打ち込まれた男の女房な

のであつた。

「それから、マトレエナも貧乏かね。」とネクリュウドフはマトレエナの家近く來かゝつて又尋ねた。

「何でマトレエナが貧乏なもんかね。ブランデエ賣つてるだもの。」と桃色の服を着た年下の子は屹とした調子で答へた。

ネクリュウドフはマトレエナの小屋の前に来ると、二人の子供を待たしておいて入口から小舎に入つた。小舎の内は漸く六アルシン位しかない長さで、其處の煖爐の彼方に据ゑてある寢臺に大きい人間が寝ると自由に手足も伸べられなさうであつた。

「この寢臺の上で、」とネクリュウドフは思つた。「カテウシヤが赤んぼを生んだのだな。産後の肥立ちが悪くつて寝てゐたんだな。」それから小舎一ぱいに場を取つて一臺の機が据ゑてあつて、ネクリュウドフが低い鴨居に頭を打ちながら内へ入つた時、丁度マトレエナの老婆年長の孫娘と二人で緯糸を揃へてゐるところであつた。なほ又二人の孫がネクはリュウドフの後からついて來て、怪訝な顔をして入口の鴨居につかまり乍ら立つてゐた。

「何の用があたりだあね。」と老婆は突慳貪に口を尖らした。彼女は絲がなか／＼うまく揃はないので機嫌が悪かつたのである、それに又知らない人が出し抜けにやつて來たので自分の

ブランデエ密賣を取調べられるのぢやないかと氣遣つたのである。

「私は地主ですが、少しお前さんと話がしたいので來ました。」

老婆は黙つてネクリュウドフをぢつと一心に見つめてゐたが急に別人のやうになつた。

「まあ、これは、これは、さやうでござえやしたか。この著碌の私でござえますもんで、お前様を見分けえましねえで、へえ。私、旅のお方でもあらう思えまして、へえ。」と彼女は猫撫聲で云つた。「どうぞ、お前様、御勘辨してお呉んなせえまし、へえ。」

「私はお前さんと少し内々でお話がしたいのだが。」と云つてネクリュウドフは戸口の方へ一瞥を投げた。戸口には子供等と、その後ろには又襤褸で出來た帽を被せられてゐる青白い乳飲兒の營養不良らしい、併しそれでも何やら少し笑つてゐるのを抱いた瘦せ細つた女とが立つてゐた。

「何を見てやがるだ。喰はしてやるだぞ。棒は何處だけと？」とマトレエナは戸口の方へ怒鳴りやつた。「戸を閉めねえか、さつさとしくさろ。」

それで子供達は行つてしまひ、乳飲兒を抱いた女は其戸口を閉めて行つた。

「私、誰が來ただろ、何處の誰が來ただか、とさう思ふとりやしただあ、へえ、しると夫れがお前様だもの、殿様だあもの、なあもし、旦那様だあ、御主人様だあ、一番好えお方だあ。」

と老婆は云つた。『ようまあ此様な所さ来て下さりやしたただ、斯様な汚え所さ、まあ。大名様、どうぞお掛け下せえまし、殿様、一番偉えお方様。さあ、どうぞ此の椅子に。』と云つて老婆は自分の前垂で其椅子を拭いて勧めた。——『私また、何處の馬の骨が入つて来たか思ふとりやしただ、へえ、しると夫れが殿様だあもの、大地主様御本人だあもの、お慈悲深えお方様だあもの。どうぞ許してお呉んなせえまし、この耄碌婆めに、へえ、もう目が見えねえやうなりましたで、へえ。』

ネクリウッドは腰かけた。老婆は彼の前に立つた儘で、顎を右手で支へ、その骨張つた臂を左の掌に受けながら、抑揚頓挫の綾艶をつけた聲で話した。

『あなた様もお年召しましただなあ、なあもし殿様。昔やあ玉蕪みてえに見事なお殿様でござえやしたになあ、今ちやあ大分お變りなりやしただ——。何でござえますかね、あなた様にも心配でもござえやすかなあ。』

『私は少しお前さんに尋ね度い事があつて来たのだが。お前さんはあのカテウシヤ・マスロオワの事は覚えてゐるでせうね。』

『あのカトリイナでござえやすかな。えゝえゝ、あの娘は私の姪でござえやすだもの、何で私あの娘を忘れやせうかな。何様に私あの娘の爲め泣きやしたか知れましねえだ。何でもか

んでも私よう知つとりやすだよ。そりや、ねえ、殿様、誰が神様だの天子様だの、前に出て罪の無えものがありますだあ。あの娘とお前様と、あの時分はまだお若うてなあ、お茶や珈琲もお二人一緒に飲んだりしておいでただものなあ、それからとうとう彼様な事になりやしただなあ。だけんどそりや仕様がねえ事でござえやすだよ、へえ。それもあんな様がああ娘をたゞでお見捨てにでもなりやしたら何だけんど、その手當はちやあんとして下すつただもの、百ルウブルの大金をやつて下すつただもの。そんだにあの娘のやり方が悪うござえしてなあ、分別のついた事ちよつともしねえぢやござえやせんか、へえ。あの娘が私の云ふ事きいとりや、ようく世が渡つて行けやしただに、ふんとに私、姪ではありやすけんど碌で無し奴ときや云へましねえだよ。後でも私好え口を探し出してやりやしたんだに、剛情べえ張り通りやしてなあ、旦那でも何でも我鳴りつけるぢやござえやせんかな。旦那に我鳴りつけるぢふ法が、お前さん、何處にありやすだあね。そんでな、直き追ん出されやしただとも、へえ。その後も山林官様の家に居りやえゝだに、そこにも尻が据りましねえでなあ。』

『私は子供の事を尋ね度いと思つてゐますがね。お前さんの家で分娩したといふではありませんか。何處にその子供はやつたんです？』

『子供でやすかな。あれにも私たんと心配しやしただよ。母親は肥立ちが悪うて枕も上らね

えやうな有様でやせう、私はもう助からねえものと思ひやしたただよ。それで生れた娘の子には規定通りちやあんと洗禮させやしてな、それから育兒院さ送つてやりましただ。だて母親が死んだらお前様、子供が可哀さうでござえやすだものなあ。世間にやよう子供にや乳も飲ませねえで死ぬまで放棄つとく者がありやすけんど、私はそりや良くねえ思ひやすだよ。それよか育兒院さやる方が良えだからねえ、私さうしてやりましただよ。金がありやすだ、そんで連れてつて貰えやすだよ、へえ。」

「それでも子供の番號はお前さん方に知らせが來たらうぢやあるまいか。」

「え、え、そりや來やしたがな、子供はそれから直き死にやしただ。あの人云ひやしただ、向うさ届けるちふと、はやもう死んぢよつただて。」

「あの人といふのは誰です。」

「それあね、スコロドナ村で其様な事を渡世にしてをつた女で、メラアニヤと云ひましただ。もう死んでますだが、氣の利いた人でござえやしただ。いつもなあ子供を受取るちふと、三四人になるまでは自分の所に置いて育てて、それから一時に育兒院さ遣り居りましただ。さうして其の仕方が何でもかんでも氣の利いた巧えもんでのうし。大人の二人位え寝られる寢臺みてえな子守籠を拵えやしてな、ちやんと柄もついてやすだよ、へえ。その内え子供を四人

なら四人と四隅に入れやしてさ、足べえ皆一緒になるやうにして、喧嘩しねえやうに頭を外さ向けさしてな、それで育兒院さ送るでござえやしただ。子供の口にや砂糖袋の吸口を含ませときやすだよ、しると子供はおとなしうしてますだよ、へえ。」

「それで、それからカテウシヤの子供はどうなりました？」

「そんでな、カタリイナの赤ん坊も其人にやりましただ。そして其人が二週間許え自分の家に置きやしただよ、しると赤ん坊は其時から病氣になりやしてなあ。」

「可愛い子供だつたでせうか。」

「そりや、お前様、あなた様、又と此世に無え位え見事な赤ん坊でござえやしただ、あなた様に生寫しでなあ。」と老婆は目を細くして媚びた。

「どうして病氣になつたのだらう。營養が悪かつたかも知れないなあ。」

「滋養が悪かつたかなあもし。どうも、はあ、そりや申譯だけの食ひ物でござえやすでな、何しろメラアニヤの自分の子ぢやねえからなあ。それでも育兒院さやるまで丈夫だと好かつたが、メラアニヤが云ひやしたには、モスカウに着いてみるちふと、はや赤ん坊は直き死んだちふ事でござえやしただ、へえ。死んだちふ書附も貰うて來やしただよ、規則通りになあ。そりや氣の利いた女でござえやしたから。」

ネクリュウドフが其子供に就いて聞き知る事の出来たのは夫れで一切であつた。

六

土間の後先の鴨居で又もや頭を打ち乍らネクリュウドフは其處を出て往來に來た。汚れた地の白い胴衣を着た子供と桃色のを着たのとはネクリュウドフを表で待つてゐたが、尙ほ同じ位の仲間の子供も二三人加はつてゐた。乳飲兒を抱いた女も二三見えた。その中にはネクリュウドフがマトレエナの小屋の入口で見たあの瘦せ細つた女も、襪の帽子を被つた血の氣の見えない先刻の子供を輕さうに抱きながら混つてゐた。その子供は又絶えず一種不思議な笑ひを、老人のやうに衰へた其顔に出してゐた。ネクリュウドフは夫れは苦惱の笑ひだと思つた。その女は誰であるかと彼は二人の道案内の男の子に尋ねた。

『これが先刻に乃公の云ひやしたアニッサだあよ。』と年上の子供は答へた。  
ネクリュウドフはアニッサに向つた。

『お前は どうして暮してゐるんだね。』と彼は尋ねた。

『どうしてだて、そりや、私、貰つて歩いとりやすだあ。』と答へてアニッサは急に泣き出した。

老人のやうな顔をした子供は笑ひ崩れて、細い兩足を長い蟲のやうに振り振りした。

ネクリュウドフは紙入を出して中から十ルウブルを取つて女にやつた。それからまだ彼が二歩とも行かない中に、矢張り乳飲兒を抱いた別な女が彼を呼び止めた、それから又老婆と又一人の女とがやつて來た。皆自分達の貧乏を訴へて彼の情けに縋るのであつた。ネクリュウドフは紙入から持つてゐただけの六十ルウブルを出して分けてやつた、そして何とも云へない悲痛な思に胸も裂けさうな感じを覺えながら家へ歸つた、管理人の住つてゐる附け足しの廂下の室へと歸つた。管理人は笑ひながら彼を出迎へて、百姓等は夕方集る事にした由を告げた。ネクリュウドフは有り難うと禮を云つてから、内へは入らないで庭に行つた。そして白い林檎の花の一ぱい散り敷いてゐる庭の小徑を散歩しながら、今日目撃した一切の事を十分篤と考へてみようと思つた。

民衆は衰滅しつゝあるのだ、そしてそれに慣れてしまつてゐるのだ、だから子供は死に、女どもは過度の勞働をし、食物は誰にも足らず、殊に老人には尙ほ著しくそれが不足といふ斯様な現象が起つてゐるのだ。そして民衆自身もはや其悲惨の悲惨たる所以を知らないやうになりつゝあるのだ、随つてそれを訴へもしないやうになりつゝあるのだ。それで我々はそんな状態を當然な事のやうに、自然な事のやうに思つてゐるのだ。

さういふ分りきつた事を世人はどうして氣付かずにおたのか、彼自身またどうして覺えつかずにおたのか、とさう思ふと彼はたゞ愕くばかりではおられなかつた。

子供が死に大人も皆早死をする、それは牛乳がないからではないか、牛乳のないのは牛を飼ふ牧場が無いからではないか、それで穀物も草も取れないのではないか。

それで彼は百姓達に地面を貸しつける事を尙ほ一層切に思つた、そして其地代の利子は、百姓等が其地代を期に後れないで拂ふといふ條件の下に、税金や其他公共の目的の爲めに役立つる金として百姓等の所有にしてやらうと思つた。それは素よりまだ單税制度ではないが現在の實情に於て出来る限り夫れに近いものであつた。それにも一等肝腎な事は彼が土地私有權を利用するといふやうな考を一切放棄する事であつた。

それから彼が家の内に戻ると、管理人はなほ一層、こゝに、こゝして彼に食事を勧めた、そして自分の妻が小娘に手傳はせて拵へた料理が、焼け過ぎたり煮え過ぎたりしてゐないといふがと夫れを非常に氣遣ふらしかつた。

食卓には地の粗いクロスを掛け、刺繡をしたハンカチをナフキン代用に置いてあつて、その前に柄の折れた古い高價な陶器のスウプ皿が載せられた。それは馬鈴薯のスウプで、先刻ネクリュウドフが家を出際に見た黒い脚を延べたり小娘の服にしがみついたりした鶏も今は

小さく切り裂かれて羽毛も十分には抜かれなくて入れてあつた。スウプの次には同じ鶏がこれも羽毛を十分には搥られないで焼肉として料理されたのが運ばれ、それからバターと砂糖をべたべたとつけた乳菓が出た。どれも皆不味い物のみであつたが、ネクリュウドフは何が何やら氣も付かないで食べた。それ程彼は考に氣を奪はれてゐたので、村から戻る時何とも云へない悲痛な氣持がしたのを、出来るだけ早く解決して除かねばならないといふ思で今も胸は一ぱいだつたのである。

小娘が大きい靴を穿きながら皿を持つて行つたりする間に、管理人の妻君は戸の間より此方を見い見いした。管理人自身は自分の女房の料理術を誇るかのやうな調子で始終、こゝに、こゝしてゐた。

食事がすんでからネクリュウドフは、やつとの事に管理人を椅子に着かした。そして自分が熱心に考へてゐる事を告げもし参考になる事情など聞きもし度いと思つて彼は、土地を百姓等に分けてやらうと思つてゐる計畫を云つて聞かせて其意見を徴してみた。すると管理人は自分も疾うからさういふ同じ考を持つてゐたとしても云ひさうな、そして今さう聞いて嬉しいとしても云ひ度さうな顔付をして、こゝに、こゝ笑つた。しかし本當は彼には何も分つてはゐなかつた、それはまだネクリュウドフが十分は、つきりと説明しないからではなく、その計畫の結果

は畢竟ネクリウッドは他人の爲めに自分の収入を放棄するといふ事になるからであつた。人は誰でも、よしや他人のお蔭によつてであらうとも、皆たゞ自分の利益をしか思ふものではないといふ考が、管理人の頭には深く浸み込んでゐるので、ネクリウッドが土地からの取れ目を全部百姓等の共有財産にしてやり度いと云ふのを聞くと、どうも夫れは分りかねると管理人は自分乍ら思はざるを得なかつた。

『よく分つて居りますよ、勿論あなた様は其中から幾割かをお取りになるんでござりませうしねえ。』と管理人は飲み込み顔で云つた。

『いや、さうぢやありません。誤解してはいけませんよ、私は何も取らないですつ、かり百姓等の所有にする積りです。』

『では丸つきり何もお取りにならないんですか。』と管理人は始めて愕いた。その顔の笑は消えた。

『さうです、一切放棄します。』

管理人は深い溜息を洩らした、それから又例の微笑の顔に復つた。彼はネクリウッドを氣が少し變になつてゐるんだなと思つた、そしてネクリウッドが土地所有を放棄する考ならば自分がどうかして甘い汁を吸へるらしいと考へた、放棄される土地を自分が何とか利用

する事が出来さうなものだと思ふのであつた。

けれども尙ほ話を聞いてみるとそんな事は出来ないと思つたので、管理人の顔は曇つた、そしてネクリウッドのそんな計畫は彼に取つて最早少しの興味もないものとなつた。それでも地主に不愉快に思はれてはならないと思ふ心から絶えず笑顔は作つてゐた。ネクリウッドは自分の考が管理人に飲込めないと見ると、もはや管理人を相手とする事をやめて、小刀の切傷の澤山ついたインキで汚れた卓に着き、自分の計畫の概要を、覚えの爲めに紙に控へた。

はや太陽は葉の伸びた菩提樹の彼方に沈み、蚊は室内に呻りを上げてネクリウッドを襲つて來た。彼は覺えを書き終つた。そして野良歸りの牛馬の鳴き聲や、家畜小屋の戸口の開けられる音や、寄り集る百姓等の高い話聲などに、耳を傾けた。それから彼は、管理人の持つて來た茶を大急ぎに飲み干して、はや百姓等の集つてゐる筈の、村の所定の場所へと行つた。

## 七

村の頭株の者の家の前では何やら頻りに云ひ罵る聲がしてゐた。併しネクリウッドが其

處に行くとき直ぐ鎮まつて、百姓一同はクスミンスコエでの通りに帽子を脱つた。此の村の百姓は皆クスミンスコエのよりはすつと貧乏がひどかつた。娘や女等の飾りはたゞ耳飾の布で男は大抵皆木皮の靴を穿き、手織の胴着や長い上衣を着てゐた。中には野良歸りのまゝの跣足で胴着だけしか着てゐないのもあつた。

ネクリウッドフは一寸氣分を繕つてから、土地を一同に分けてやらうと思つてゐる由を告げ知らした。一同は黙つてゐた。そして誰の顔にも少しの變つた表情も出なかつた。

「私の考では、」とネクリウッドフは顔を赤めながら云つた。「人は誰でも土地を使つていゝ筈である。」

「さうでござえやすだとも。そりやさうだとも。其通りで、へえ。違えござえやせん。」と口口に云ふ聲がした。

ネクリウッドフは尙ほ言葉を續けて、土地の收穫は残らず百姓一同に分配されるといふ事、その代りに百姓は皆地代として百姓自身の側で定めた金額を、矢張百姓全體の公共基金として支拂はねばならないといふ事、その基金は公共事業の爲めに役立てられねばならないといふ事を説いて行つた。するとそれはいゝとか賛成だとか云ふ聲も二三はあつた。けれども多くの百姓等の顔は次第に引締まつて来て、それ迄ネクリウッドフを見てゐた彼等の目はだん

だん下へ落ちた、それは彼の云ひ草の底には狡猾な策略が潜んでゐるだらうが、それは誰にも分つてゐるから誰も其手に乗りはしないのであるが、さうと露骨に色に出た目でネクリウッドフを見て恥をかゝせ度くはない、とでも云ひさうな調子であつた。

ネクリウッドフは尙ほ分り易く明かに云ひ聞かせた、そして百姓等とても丸つきり何の理解力もないわけではなかつた、けれども管理人がネクリウッドフを解しえなかつたと同じ理由から彼等も矢張彼の云ふ事を飲み込む事が出来なかつたのである。人間は誰でも自分の利益になる事しか計畫しないものである、それは人間の生れる時からの本性であるとは彼等の深く信じてゐる事であつて、なほ又地主は自分だけの利になる事しかしないとは彼等が代々の親と同じく親しく経験して知つてゐる事だつたのである。

「それでだ、幾らの地代ときめたらいゝだらう、それを皆云つてお呉れ。」とネクリウッドフは尋ねた。

「手前どもに地代をきめる云はしやるかな？ 其様な事は出来やしねえだよ。この地面はお前さまの物ぢやござえやせんかな、お前さまが何様な事もなさる力持つてござるだあ。」と群の中より二三の者が答へた。

「いや、さうぢやないのだ。その金はお前達の組合一同の役に立てねばならないのです。」



「さうは行きましねえやな、組合は組合でさあ、地代とは別でござえやすだあ。」  
 「かういふ事なんだ、よく飲込むがい。」と管理人は其時ネクリウッドの傍にやつて来て  
 むたが、わけを云つて聞かせるといふやうで、こに、こしながら、「殿さまはお前達に地代の代  
 りに地面をやらうと仰しやるんだ、そして其地代もお前達皆の組合同の爲めに役立てるや  
 うにして下さらうといふ譯なんだ。」

「よく分つて居りやすだあ。」と齒の抜けた意地悪さうな老人は目を上げないで、がみ、がみ  
 と云つた。「銀行みてえなわけぢやござえませんか、きちん、きちんと期限内に金を出さにや  
 なんねえてんでござえやせう。其様なこと手前どもあ厭でござえやすだ、そんで無うてせえ  
 暮しが立たねえで苦しい思ひしてやすだに、其様なことになりやしたら、死ばつてしめえや  
 すだあ。」

「其様な事して何になりやすだ、それよか今迄通りで行き度えもんでござえやすだ。」と不平  
 さうな又反抗がましい聲も二三あつた。

それからネクリウッドが規約を取りきめよう、書附を拵へて夫れに地主側と百姓側との  
 署名をしようと云ひ出すと、百姓等は斷乎として拒絶した。

「署名でどうしやすだね。手前どもあ今日日までたゞ働いて來やただけでさあ、この後も

たゞ働いて行く許えでさあ。約定だの書附だの手前どもに用はありましねえやな。手前ども  
 は學問なんちふものありやしねえだよ。」

「手前どもあ承知しましねえだ。其様な聞いた事もねえ變挺な事は御免を蒙りやすだあ。  
 今まで通りがえ、今まで通りにしといて下せえな。たゞ種蒔くだけはやめにしてえもん  
 だ。」と數人の聲が混り合ひ乍ら云つた。

種蒔くのをやめ度いとは、今迄の規定では百姓側から種を出して蒔きつける事になつてゐ  
 たので、それを今後は地主側から出して貰ひ度いといふのであつた。

「それではお前達は私の云ふのには従はないのですね。地面を自分のものにし度いとは思は  
 ないのですか。」とネクリウッドは尋ねて、百姓等の中の一人に直接に其返答を促してみた。  
 中年の其百姓はずたずたに裂けた上衣を着て跣足のまゝで柱のやうに轟と立ち、襦袢になつ  
 た帽子を左の手を曲げて持つてゐるのであるが、その持ち方は丁度士官の號令によつて兵卒  
 が帽を脱いで持つ時のそれであつた。

「さやうであります。」と其百姓は、又兵卒が上官の間に答へる時と同様に答へた。

「それではお前達は土地は十分に持つてゐるんだね？」とネクリウッドは尋ねた。

「いえ、さやうではありません。」と満期で家に歸つた以前の兵卒である其百姓は、矢張兵卒

のやうに無理やりにはきはきした調子を出して答へた、そして襟襷の帽子を大事さうに差出して持つてゐる其様子は、誰かそれを取る者があれば渡さうとでも思つてゐるかのやうであつた。

『だが私の云つた事を、皆でなほよく考へてみるがい。』と云つてネクリュウドフは、彼等の分らないのに愕きながら、なほ一度自分の計畫を繰返して云つて聞かした。

『何も考へる事ありませんねえだ。手前共の考は今さき云ひやした通りでさ。』と陰氣な顔をした齒のない老人は意地悪さうに云つた。

『私は明日も此地に居る事にするから、お前達の考が變つたら、さうと私に知らして貰ひませう。』

百姓等は何とも答へなかつた。

そんな次第でネクリュウドフは所期の計畫を行ふ事が出来なかつた、そして空しく事務所の方へと引上げた。

『どうもねえ、公爵。』と管理人はネクリュウドフと列んで歩みながら、『あんな手合と御相談なさいます事は困難ですよ、どうも頑冥過ぎるんですからね。集會に出たとなると、彼奴等はまだ馬鹿に硬く許りなりましてね、楨でも動きませんよ。何につけても猜疑心ばかり強う

ございましてね。そりや、なあに、あの中にも道理の分るのも居るには居りますよ、今大つびらに反對したあの髪の黒いのか、あの胡麻鹽頭とかはさうなんですよ。ですからあんなのを事務所にも呼んで茶でも出しながら話をしますとですね、さうするとよく聞き分けがあるのです、役人位の持つてる考は持つてゐるのです、何事につけても分つた意見もあるのですよ。併し集會に出たとなると、そりや丸つきり人間が變りましたね、一度云ひ出した事なら、何と説いても嫌しても、聞き入れるものぢやありません。』

『それでは其の物の道理のよく分る幾人かの百姓を事務所に呼んで貰へますまいか。』とネクリュウドフは尋ねた。『その男達に私今一度残らず事をわけて云つて聞かせ度いと思ふ。』

『そりや呼べますとも。』と管理人は、こに、こしながら云つた。

『では明日呼んで下さい。』

『そりや雑作ありません。明日呼びませう。』と管理人は尚ほ一層に、こに、こしながら引受けした。すると二人の女が家の入口の階段の傍に立つてゐるのが彼の目についた。

管理人は二人の女に何か合圖をして、一緒になつて裏の入口の階段の方へ行つた。ネクリュウドフは事務所には入らないで其出口の階段に腰をおろし、なほ自分の計畫の事を考へた。

憤々した女等の聲が、

四四四

管理人の静かな聲を間に挟んで聞えて來た。ネクリウッドフは自然

その方に注意を向けて耳を傾けた。

「私の力ぢやあひましましねえだ、何だてお前さん私を其様に苦しめるだあね。」といふ女の聲

は随分腹を立てゝゐるらしかつた。

「ほんのちよつくら入り込んだ許えぢやねえかな。」といふのは又別の聲であつた。「返して

貰えますだあ、返して貰えますつたらさ。お前さん動物を何でさう苦しめるだあね、子供は

牛乳がねえで、お前さん、どうしちよる思えなさるだ。」

「金をお拂ひ、でなけりや動いて仕事でお拂ひ。」と管理人の聲は冷静であつた。

ネクリウッドフは立上つて、裏の入口の階段の方へ行つてみた。すると其處には二人の女

が立つてゐたが、その中の一人は確かに妊娠してゐるらしい様子であつた。管理人は階段の

上に立つて、両手を外套の隠しに突込んでゐた。ネクリウッドフを見ると二人の女は急に口

を噤んで、頭かけの布の後ろへ滑り落ちてゐたのを直し、管理人は手を隠しより出して又こ

こにこした。

事の仔細は管理人の云ふ所によると、百姓等はその仔牛や、仔牛のみならず又親牛をもネ

クリウッドフ所有の牧場へ故意と追ひ込む事があつて、今度も此の二人の女の家の牝牛が二

頭そこで捕まつて抵當に取られてゐるとの事であつた。それで管理人は其一頭について三十

コペエケン宛の錢を出すか、又は二日間働いて償ひをする様にと女達に云つてゐる所であつ

た。女達は併し其牛はほんのちよつと其牧場に入つた許りであるといふ事、それから自分達

は錢は一文も持たないといふ事を述べた、そして夫れなら二日間働くから今直ぐ牛は返して

呉れ、朝から少しも飼餌をやつてゐないから飢じさを訴へて鳴いてゐたと云ふのであつた。

「だから牛でも馬でもよく氣をつけて番をしなさいと、いつも私はお前達に云つて聞かして

ゐるぢやないか。」と管理人はネクリウッドフをちらと見返つて云つた、それは如何にもネク

リウッドフにも賛成を求めるやうな具合であつた。

「ほんの一寸許え子供を見に行つたでねえかな、その間に牛が出て行つてしめえやしただも

の。」

「だからさ、家畜の番をしてゐる間は、其處を離れてはいけないぢやないかね。」

「夫だら餓鬼の泣くのお誰がすか、して呉れやすだあ。」

「ちよつぱり許え草を食はれたちふて、夫であの牧場が何うなりやすだ、草は又あとから生

えるぢやござえせんかな。」と一人の女は云つた。

「どうも牧場すつかり食はれてしまふんですからね。」と管理人はネクリウッドフに向つて云

つた。「放棄つて置いた日には、私どもの方で枯草一把でも取れないやうになるんですよ。」  
 「まあ、お前さん、ようも其様な出鱈目を云はしやるぢやねえか。」と妊娠の女は叫んだ。「私  
 所の牛は殿様の牧場に入つた事一度だてありやしねえだよ。」

「だつて入つたからこそ、今度つかまつたんぢやないか、だから罰金を出すか仕事をするか  
 しなくちやいけないのさ。」

「そんなだから私仕事しやす云ふとるでねえかえ、牛を返して呉んなせえ。何んで此様に苦  
 しめなさるだあ。」と妊娠の女は身悶えして云つた。「晝だて夜だて、休む間はありやしねえ。  
 お袋たら病気で寝とるだし、亭主は酔つ拂つて許え居るだし、何もかにも一人でせにやなん  
 ねえだし、働えて働えて働き死にをしる事だかのうし。もうもう私にも力が無えだあよ。そ  
 ねえに罰で働け働け云ひなさるけど、お前様も大抵にして呉んなさるがえ、だ。」さう叫  
 んで女は泣き出した。

ネクリウッドは管理人に、今度だけ例外として牛を返してやつて呉れるやうに頼んだ。  
 そして悲痛な思に胸を壓しつけられるやうな氣持を覚えながら家の内に入った。

\* \* \*

「本當に食へねえ人だあ。」黒い髪と一度も櫛など入れた事のない蓬々と生えた髯のある一  
 人の百姓は、肥つた牝馬の上に揺られて行きながら、並んで騎つて行く今一人の瘦せた爺に  
 さう話しかけた。その瘦せた爺の方は襤褸になつた長い上衣を着て、時々數頭の馬の鎖をぢ  
 やらぢやら鳴らした。

二人は大きい通りの兩側に生えてゐる草を馬に食はせに行くのであるが、そつと地主の森  
 に馬を入れる事もあるのである。

「なあ、彼様に草が生えかぶさつとるでねえか、今に休みの日にやあ女どもを刈らせにやら  
 なきやなんねえ事になるだんべえ、なあ、そんだから、」と襤褸の上衣を着た瘦せた爺は云つ  
 た。「で無えと鎌あ折れちまふだよ。」

「署名をせえだどよ、さう云うただなあ。」と髯のもちやもぢやした百姓はネクリウッドの  
 言葉を冷評して、「署名をせえだどよ、へん、其様な術に乗つたら生き乍ら此儘鶉呑みにされ  
 ちまふだあ。」

「違えねえや。」と爺も相槌を打つた。

それから二人は暫く何も云はなかつた。馬の足音だけがぼかぼかと固い道の上に響いた。  
 「お前達に私は土地をたゞでやるからだどよ、それだから署名をするがい、だどよ。へん、

何處まで人を馬鹿にしりやあ氣が済む積りだべえ。なあ、餘り阿呆たらしいぢやねえかな。今日日ぢや乃公等もだんだん目が開あて來ただからなあ。」と云つてから爺は後から來る筈の一頭の逸る小馬に呼びかけた、そして自分の乗つてゐるのを止めて後ろを見返つたが、小馬は最早後ろにはゐなかつた、道から離れてすつと牧場の内へ入り込んでゐた。

「夫だ、見ろ、ちやあんと馬奴が牧場にお馴染になつちよるだあ。」と髪かみの黒い髻男は云つて、外れて行つた小馬が牧場の酸模あかじの中で、ぼりぼりと矢鱈やたらに捲り食つてゐる音に耳を傾けた。「氣の利いた奴だあ、なあ、伶俐な馬だあ。」

## 八

ネクリュウドフは家の内に入ると、彼の寢室にきめられた事務室には、毬毛わたひの入つた枕と二枚の褥むしろを添へた丈高い寢臺が据ゑてあつて、板のやうに固く又ごつごつする位の細かに刺繡しゅういをした掛け布團ふだんを用意してあつた、それはからだに巧く柔らかに被ひかゝる段ではなかつたが、確かに管理人の妻君の嫁入持參の品らしかつた。管理人は何か夜食をと勧めたが、ネクリュウドフは腹が空いてゐないからと斷つた。管理人は何事にも行届かないで嘸ぞ御不自由ごふじゆうと頻りに愛想を云つて出て行つた。そしてネクリュウドフは唯一人になつた。

百姓達に拒絶された事も少しもネクリュウドフの心を焦らしはしなかつた、むしろ彼の心は平靜であり暖かであつた、クスミンスコエでは直ぐ百姓等の賛成を得、感謝をも受けたのに、此處では百姓等が従かないばかりか可成りの敵意をさへ見せてゐる、などといふ事も彼は考へはしなかつた。事務所の内は蒸々じじくとして不潔であつた。ネクリュウドフは外に出た、そして庭に行つてみようと思つたが、昔の事が思ひ出された、あの夜、女中部屋のあの窓、裏玄關先きのあの階段前、と思ふと彼は悪業の爲めに神聖を汚されたそんな場所に行き度くなかつた。それで彼は又事務所の入口の前に戻つて來て其處の階段に腰かけながら、清新な夜の空氣に包まれてゐる若い樺の木かばの温い香を吸つた。次第に暗くなり行く向うの庭を長い間ぢつと見やつてゐたり、水車の音に耳を傾けたりした。鶯ういの鳴く音も聞えた、何だか分らない鳥とりがつい直ぐ近くで單調な音を立ててゐるのもあつた。

管理人の室の内の灯りは間もなく消えた。物置の後ろの東の空が明るくなつたかと思ふと、月が次第に登つて來た。それでも稲光りがちらちらと閃いて、露の置いてゐる花盛りの庭や荒廢に近づいてゐる建物を照らした。それから遠い雷鳴が聞えて、黒い雲が次第に空を蔽うて來た。鶯や又他の鳥の鳴く音もひたと止んだ。水車場の水音の間にまじつて鶯鳥の消魂しょうこんしい鳴聲が聞えた。それから村の方で、續いて管理人の住ひの構ひ内で、鶏が鳴いた。蒸し

暑い嵐模様の夜には時ならずさう早く鳴くのは定りであつた。

四五〇

俚諺に鶏が早鳴きをするのは嬉しい事のある夜の兆だと云つてあつた。その夜はネクリュウドフに取つてはたゞ嬉しいだけでなく何とも云へない愉快な幸福な夜であつた。今彼は再び罪惡を知らない青年として其地で過した昔の數年間の印象を心に感じた、そして當時の自分其物であるやうな氣持を覺えた、ただ其數年のみならず、今迄の生涯中に本當に幸福であつたあらゆる時期の自分を感じるのであつた。そして夫れは單なる思ひ出ではなくて、現に身親しくさう感ずるのであつた。神よ眞理を示し給へと云つて跪いて祈禱をしてゐた十四歳の子供の時の心持が、今さながらに感ぜられた。又母が彼を残して何處かへ一寸出て行く時その膝に取り縋つて、これから決して悪い事は致しません、いつもお母さんのお言葉の通りに温順しくしてゐますと云つて泣いた時の心持が感ぜられた。朋友のニコリンカ・イルテニエフと、いつも互ひに良い事をするやうに助け合はう、人類の幸福を計るやうに勵まし合はうと誓ひを交した頃の心持が、今さながらに感ぜられた。

又彼は今度クスミンスコエで自分の計畫を行ふ時刻が愈々近づいて來た時、土地の經營をも土地其物をも森や林をも放棄するのが惜しくなつて來たあの心持を思ひやつた、そして今はどうしてあの時あんなに惜しい心持になつたのだと自ら問うてみた。あんなに惜しいとい

ふ心持を覺えたのが、今は彼に不思議で仕様がなかつた。それから彼は今日見聞きした一切の事を思つてみた、自分の所有の森で盜伐をやつたために亭主が牢に入れられてゐるといふ數人の子供の母親たる女の事、自分達みたいな紳士には女といふものは身をまかせて爲れるまゝにしてゐなければならぬと思つてゐるマトレエナの心根、思つてゐるのみならず現にさう云つた淺ましい其の心根、それから子供を育児院に遣る事を渡世としてゐたといふ女の其の子供達を取扱ふやり方、そんな事を彼は思つてみた。檻褸の帽子をかぶせられて飢に老人のやうな顔をしながら絶えず笑つてゐた子供の事も思ひ出された。過度の勞働と心配の餘りに精も根も疲れはて、飢ががつてゐる牝牛を十分に見張ることの出來なかつた爲めに、罰の勞働を課せられようとした妊娠の女の事も思ひやられた。

團々な月は高く昇つて皎々と輝き、家の構へ内には建物の影を黒く落した。荒廢に近づいた母家の横の建物の屋根のブリキは月の光を反射してちらちらした。すると疾うに鳴きやんでゐた庭の鶯は、そんな明るい月夜を黙つて過すのは惜しいとでも思ふかのやうに又鳴き出した。

クスミンスコエで今後自分の生活はどうして行かうかと考へた事、今後は何をしようか又どんな方法でしようかと自分に問うてみて、それが餘りに多方面に關係があると思はれたの

で、何ら確とした答へを自分に與へることが出來ず、考が錯雜し混亂してたゞ其儘にしておいた事、それが今又ネクリウッドの頭に浮んで來た。それで又その解決を考へてみねばならなかつたが、今になつてみると彼は一切が餘りに簡單明瞭であるのに愕いた。それは今の彼は自分が今後どうなるかを考へないから、それを考へるのは今は彼には餘りに縁遠い事であるから、それよりは今後自分が何をしなければならぬか、たゞ夫れのみを考へるやうになつたからであつた、それだから簡單明瞭になつてゐるのであつた。そして記憶す可き事には、彼は自分一身のために必要だと思ふ事ならば今は夫れを決定する事は出來ないしかつたが、彼自身がしなければならぬと思ふ事には、もはや彼は何等の狐疑も躊躇も與へはしないのであつた。土地を百姓に譲り渡さなくてはならないといふ事は、彼に取つてはもはや自明の事であつた、カテウシヤを見放してはならない、彼女を救つてやらなければならぬ、彼女に對する自分の罪を償ふためには何事をもしなければならぬ、といふ事は彼にはもはや分明し過ぎた事であつた。自分といふものがどんなものであるかを知らねばならない、究めねばならない、裁判所のやり方にも監獄でのやり方にも、それに關する一切の事を理解しなくてはならない、明瞭にしなくてはならない、何故と云へば自分は他人ひとの見てゐない多くの事を夫れに就いて見てゐるから、是非々々さうしなければならぬ、といふ事は彼

にはもはや明々白々の事であつた。さういふ事一切を行へば其結果が何うなるか、それは彼は知らなかつた、併し彼はたゞ其のどれも是非々々仕遂げねばならない事を知つてゐた、それは何等の疑問をも許さない絶對至高の命令であつた。そしてその確信は彼に大きい信頼の歡喜を與へた。

月は隠れて空には黒い雲が一ぱいに擴がつてゐた、そしてもはや稲光りもしなかつた、ただ時々電光が家の構へ内や荒廢に近づいた建物を照らした。そして雷鳴が始まつた。鳥は皆音をひそめ、たゞ木々の枝葉がざわざわと動いて、風はネクリウッドが腰かけてゐる階段にも颯と來て彼の髪を弄んだ。ぼつりと雨粒が一つ落ちた、それから又一つ落ちた、と思ふ間もなくブリキ屋根にはぼとぼとと太鼓を叩くやうな音がした。電光がびかりと閃いた、それから又續いてびかりびかりとしたかと思ふと、彼の頭上に裂けるやうな雷鳴が起つた、そしてごろごろと轟き廻つた。

ネクリウッドは立上つて内に行つた。

「さうだ。」とネクリウッドは思つた、「我々人類の營みが何であるか、又その意義が何であるか、それは分らない、おれには分らない。何の機縁があつて叔母達は此處に暮してゐたのであらう。おれは生きてゐるのに、あのニコリンカ・イルテニエフは何うして死んだのであらう。

う。カテウシヤといふ娘はどういふ譯で此世に居たのであらう。どうしておれはあんな亂暴な事をしたらう、そして又其後何故あんな放縱無慚な生活をして來たらう。此等の事一切を知ることはおれには出來ない、一切が神意である、おれには神意を理解する力はない、しかしたゞ神が我が良心の奥に銘記させた所の意志を行ふことは、それはおれの力で出来る、その出来る事はおれには最早毫末の疑問でもない。そして此意志を仕遂げる事によつておれは再び本當の安息を得る事が出来るのだ。」

雨はどしや降りになつて、樋を傳つて天水桶に流れ込む音は騒々しい位であつた。電光は次第に間が遠くなり力が弱くなつた。ネクリウッドは室に入つて、服を脱ぎ寢臺に就いた。壁紙がぼろぼろになつて垂れてゐるので、如何にも南京蟲が居りさうで、それには可なり悚然とせずにはゐられなかつた。

「さうだ、主人氣取りをするのはよくない、下男の積りで居る事だ、さうだ。」と彼は思つた、そしてさう思ふ事が愉快であつた。

寢臺に就く時、ぞつとした思ひは當つて、彼が灯りを吹き消すや否や、南京蟲は早速匍ひ寄つて來て彼を襲うた、螫した。

「土地を分けてやる、西比利亞へ行く、蚤、南京蟲、不潔——。いゝわい、何でも構はぬ、

耐へ忍ばねばならないものは、何でも耐へ忍んでみせる。」とは思つてみたが、長くぢつとしてはゐられなかつた。で彼は起き上つて窓傍に行つて腰をかけ、散り行く雲を眺めたり、又現はれた月を仰いだりした。

## 九

やつと明け方近くになつてネクリウッドは眠つた、それで起きたのも亦ずつと遅かつた。管理人より選ばれて呼ばれた七人の百姓は正午頃に果樹園に集つて來た。管理人は林檎の樹の下に杖を打ち込んで其上に卓を据ゑ、その周りに腰掛を取りつけておいた。百姓等は帽子をかぶるやうにそして腰掛につくやうにと頻りに云はれても容易にさうしなかつた。殊に兵隊上りの男は今日は木皮の靴を穿いて足に纏ふ布を着けてゐたが、例の襪襪になつた帽子を軍隊で葬式に臨む時のやうに規則正しく嚴めしく捧げ持つてゐた。

やつと彼等の中の一人の風體のいゝ、日に焼けて褐色になつた額の周りに霜の降つた髪の毛々が多い、ミケランセロのモオゼの像を思はせるやうな縮れて半ば灰色になつた髭を蓄へてゐる肩巾の廣い老人が其の大きい帽をかぶり、手織の新しい長い上衣の襟をつくらつてびくびくもので腰掛の方へ行つて腰をかけたので、始めて餘の六人も引續きそれにならつた。



皆が席に着くとネクリウッドは其向うに腰かけて、計畫の下書きの紙を前にひろげ、それに就いて諄々と説いて行つた。

百姓が僅か七人だつたからでもあらうか、それとも彼が自分の事は少しも考へずにと計畫其事のみを思つてゐたからでもあらうか、今度は彼は少しもどぎまぎはしなかつた。何故と云ふ事なしにとゞ彼は灰色の縮れ髭のある肩巾の廣い老人に主として話しかけるやうな態度を取つて、又特にその賛成を求め意見を徴するかのやうにした。けれども夫れはネクリウッドの見當違ひであつた。なるほど其老人は頭の恰好も長老めいて看板も悪くなかつた。が、そして餘の者が何か意見を述べたりする時その頭で頷いたり又は少し顔を曇らして打振つたりしたが、併しその老人はネクリウッドの云ふ事を大骨折りでやつと理解してゐるらしく、それも餘の者になほ一度彼等の間のみで特に分り易い言葉をもつて繰返して貰つて飲み込むのらしかつた。

それよりも其老人の隣に腰かけてゐる襦袢はぎをした南京上布を着て、斜に擦り減つた古い長靴を穿いた、髭の殆ど無い隻目の小男が、遙かによくネクリウッドの云ふ事を理解した。その男は後でネクリウッドの聞いた所では陶器職人といふ事であつた。その男は絶えず眉をびりびりと動かし乍ら熱心に聞いて、直ぐ隣席の老人に更にそれを分り易く取次いだ。

それから又髭の白い氣の利いたらしい目を輝かしてゐるが、つしりした中脊の老人も、直ぐ物事の譯が分るらしく、そして機會のある毎に茶化すやうな滑稽るやうな言葉を差し入れて得意がつてゐた。

その他の者の中では、新しい手織の上衣を着て木皮の靴を穿いた鼻の長い髭の薄い脊の高い低音の男が一等眞面目であつた。その男は何でも一切よく理會して、たゞ必要な時だけ自分の考を云ふが、それも極く着實な適切な事のみに限られてゐた。その餘の老人の中には昨日集合の場でネクリウッドの提案に高い聲できつぱりと鋭く反對した齒の無い意地悪の爺も居た。人の良ささうな顔をした丈の高い色の蒼白い跛の男もゐた。右の二人は始終殆ど黙つてばかりゐたが、それでも熱心に耳を傾けてゐた。

ネクリウッドは何よりも先づ土地私有に就ての自分の意見を力説した。

「私の考は斯うです、」と彼は云ひ出した、「土地は賣つたり買つたりすべきものではないのです。何故と云ふに、若し土地を賣買して、事とするならば、金持はいくらでも買占めるだらう、そして土地を持たない者にそれを貸し付けて、其賃としていくらでも思ふだけの金を絞り取る事が出来るだらう。後には人が其土地の上に立つてゐる賃としても金を取る事が出来るわけになる。」とスペンサアの論を擡ぎ出して云つて聞かした。

「其様になりや仕方がねえで、體に翼でもつけるだねえ、しると地面に立たねえでも飛べる  
 でなあ。」と髭の白い爺は目で笑つて云つた。

「違えござえやせん。」と鼻の長い低音の百姓は同意を表した。

「さやうであります。」と兵隊上りの男は隊に居た時のやうな言葉を使つた。

「そんだから、ちつとべえ草を食うた云うて牛を捕まつて押へられちよる女も居やすうだ  
 あ。」と齒の無い意地悪の爺は付け加へた。「手前の畑は五エルストも離れてやすだけんど、近  
 えのを借るちふわけにも行きましねえ。何せえ地代が高うなつたで、手前共の分際では拂ふ  
 事出来ましねえだ。」

「私もお前達と同様に考へてゐる。」とオクリウッドフは云つた。「それだからお前達に私は土  
 地を渡さうと思つてゐるのです。」

「それはまあ可え事てござえやすだなあ。」と髭の縮れた爺は云つたが、ネクリウッドフのさ  
 う云ふのはただ地面を賃貸するに過ぎないのだらうと思つたらしい調子であつた。

「その爲めに私は今度此地に來たのです。もはや私は土地を私有してゐようとは思はない、  
 それだから私は誰に此土地を何うして分けてやればよいか、それをお前達と一緒に篤と考へ  
 なければならぬのです。」

「そんだら百姓に分けて呉んなされ、わけはねえ事だ。」と齒の無い爺は云つた。

さう聞いた瞬間ネクリウッドフははつと思つた、自分が公明正大な心で云つてる事を無雜  
 作に疑はれてゐる事實を感じたのである。けれども直ぐ又心を取り直して、寧ろさう云はれ  
 たのを機會に、自分の云はうと思つてゐた事を尙ほよく説き聞かしてやらうと思つた。

「だから分けてやる事が出来れば私は嬉しいのさ。併し誰にやればいゝんです、どんな方法  
 でやればいゝんです。お前達の部落にはやつてデミンスコエの部落にはやらなくていゝだら  
 うか。」デミンスコエとは隣村の名で、それは極く貧しい土地であつた。

一同口を噤んだ。たゞ歸休兵だけが「その通りであります。」と云つた。

「そこでだ、」とネクリウッドフは云つた、「お前達はたゞ此土地を百姓に分けてやるがよいと  
 云ふが、お前達が受取つて分けるとすればどう分けるのです。」

「何様に分けるかて、そりや、あなた様、人間の數に割つて同じいに分けやすだとも。」と陶  
 器職人は云つて、その眉をびりびりと上げ下げした。

「そりや人間數に割つて分けにやあなんねえだとも。」人の良ささうな跋の百姓はさう念を  
 押した。

一同それに賛成した、それで満足に解決がつくと思つたのである。

「人間數に割り當てるといふと、それは一體どういふ事だらう。」とネクリウッドは尋ねた。「すると雇人も地面を貰ふわけですか。」

「とんでもねえ。」と歸休兵は云つて、さも氣樂さうな暢やかな顔つきを見せた。

丈の高い考へ好きの男はそれには賛成しなかつた、彼は少し考へた後持前の低音で、

「誰にも皆の者に同じ割前をやんねえぢやいけねえ。」と云つた。

「それはいけない。」さういふ反對を豫期してゐたネクリウッドは斯う云つた。「誰にも残らず土地を等分してやる事にすれば、自分で耕したり働いたりしないものまで其割前を取る事になるが、さうなると其連中は自分達の其割前の土地は金持ちに賣るだらう。すると又金持ちが土地を所有する事になる。そして又自分の割前について實際働く者が子を持ち孫を持つやうになつた時に、はや土地は残らず皆に分けられてゐるとすれば何うであらう。さうなれば又もや金持ちの天下になつて、土地の入用な者はその亂暴なやり方にも従はねばならぬやうになるではありませんか。」

「さやうであります。」と兵隊上りは賛成した。

「地面は賣つてはなんねえ事にせにやいけねえ、そしてたゞ働く者許えが貰えますだあ。」と陶器職人はぶりぶりして云つた。

それで又ネクリウッドは、働いてゐる者が果して自分の土地を自分の爲めに耕して働いてゐるか又は他人に賣つて他人に雇はれて働いてゐるか、それを外觀から推して判断し取締るわけには行かない由を云つて聞かした。

すると丈の高い物事に注意深い男は、それでは百姓全體が一個の團體となつて其土地を耕す事にすればよいと提議した。「働く者にや其割前をやるだ、働かねえ野郎にやんねえだ。」と彼は決定的に持前の低音で云つた。

さういふ共産的な考に對してもネクリウッドは既に答辯を準備してゐた。それで彼は、さういふ事にするには誰も皆馬にしる鋤にしる、同じ種類で同じ品質のものを持つてゐなければならぬ事、又共に働くにしても多く働いたり少く働いたりするやうな差異が出来てはいけない事、それとも又家畜も農具も一切其團體の共有物であらねばならないと云ふ筋道を説いた。そしてそんな制度を採用するには先づ皆がさういふ一切の事に賛成しなければならぬ事を云ひ聞かした。

「其様な事に手前共の村が一生かかつた所で心を合はせるもんでねえ。」と意地悪の爺は云つた。

「直き喧嘩おつはじめるだあ。」と目の笑つてゐる髭の白いのは云つた。「そねえな事にした

ら女つちよどもは直き掴み合ひしやすだ、目の球あかき捲りやすだ。」

四六二

「それから又肝腎な事は、土地を分けるには地の性も考へなければならぬ。黒い上等の地

面を取る者もあり、砂地や粘土を取る者もあるといふ風に區々だつたら何うだらう。」

「夫だら地面をうんと微小々々のものに分けて、誰も恨つこねえやうに分けりやえうだ。」と

陶器職人は云つた。

それで又ネクリウッドフは、それでは管此處だけの一部落で分けるのでなく、各地方も一緒にして分けるのであるから、其事をも考へねばならない由を云ひ聞かした。「百姓皆が無代で地面を得られる事になれば、良い地面を取つたり悪いのしか取れなかつたりする者のあつたのを何うして防げよう。そして誰だつて良い所を手に入れ度がるものですからね。」

「さやうであります。」と兵隊上りは賛成した。

餘の一同は何とも云はなかつた。

「だから土地を分けるといふ事は、一寸考へれば何の事もないやうだけれど、實は一通りの事ぢやないんです。」とネクリウッドフは云つた。「で、それは我々許りでなく、他に幾らも其事を考へた者があるんです。亞米利加人のヂョヂと云ふのは夫れを斯う考へたのだが、私はそれに賛成してゐる。」

「やれやれ、お前様が地主様でねえかな、そんたらお前様の御量見でやつて呉んなせえ、其様な面倒臭え……お前様の考え通りでさ。」と意地悪の爺は我鳴つた。

さう言葉の腰を折られてはネクリウッドフも又可なり面喰はざるを得なかつた。併し其餘計な差出口を忌々しがつたのは自分一人でなかつた事を知ると氣持よかつた。

「まあ、待ちな、セミオンの叔父、旦那様の云はしやるのを聞くがえうだ。」と注意深い百姓は抑へつけるやうな低音でたしなめた。

それは尙ほとネクリウッドフに元氣づけた。で彼はヘンリー・ヂョヂによつて自分が目論んでゐる單稅制度の説明にかかつた。

「土地は誰の所有でもない、たゞ神の所有である。」と口を切つた。

「そりや其通りでござえやす。」と賛同する聲が入混つて答へた。

「土地は皆共有のもので、誰も土地を共有する同等の權利を持つてゐるのです、たゞ併し土地には良い土地と悪い土地がある。そして誰も良い土地を欲しがるのは當り前の事であるが、それでは其爲めに起る競争は何うしたら調停が出来るだらうか。と云ふと夫れは、良い土地を所有する者は其土地の値だけの金を土地を全く持たない者に支拂ふといふ事によつて纏りが付く。」とネクリウッドフは自問自答してから、「併し土地所有者は土地を有たない者

の中の誰に支拂へばよいか、それを定める事は困難である、そして一方には共同の利益の爲めに金を集めなければならぬ必要がある、それだから斯うなつて来る、土地を持つて暮して行く者は其地代だけの金を公共の安寧の爲めに支拂はねばならない、と斯ういふわけになるのである。さうなると誰にも公平になるわけである。だからお前達が土地を持たうと思ふなら、良い土地を持つ者は多く支拂ひ、悪い土地を持つ者は少く支拂ひ、土地を少しも取らない者は一文も支拂はなくともよいといふ事になる、そして支拂つた金は土地を持つてゐるお前達の共同の爲めに役立てられる、と斯ういふ譯です。」

「そりや道理至極の事だあ。」と陶器職人は眉を吊り上げて云つた。「良え地面持つ者あ、たんと支拂はねえぢやなりやしねえだ。」

「偉え者だあな、そのジ、オヂャつてえ人はあ。」と髯の縮れた爺は云つた。

「その拂ふ金は手前共に相應してねえといけましねえや。」と註を入れた低音の男は、はや話の要點が何の方面に向つてゐるかを感知してゐるかのやうであつた。

「地代は高過ぎても安過ぎてもいけない。高過ぎると拂へなくなる、すると却つて共同の爲めの損である、又安過ぎると何うしても其處に賣り買ひが起る、掛引きが起る、それは私がお前達の間に起らないやうに希望してゐる事なんです。」

「さうだ、其通りだあ。全くだあ。違えねえ。又六ヶ敷い事でもねえなあ。」と百姓等は口々に云つた。そして事柄の筋合を今はすつかり、會得してネクリウッドフに賛成した。

「偉え人だあな。」と肩巾の廣い髯の縮れた爺は又繰返した。「そのジ、オヂャつて人はさ。巧え事考え出えたでねえかな。」

「それでは何うでせう、私も土地の分配に預り度いと申出るとしますれば？」と管理人は微笑を浮べて尋ねた。

「餘分の地面が出れば、そりや君が貰つていゝんですとも、そして其地面で働くがいゝんです。」とネクリウッドフは答へた。

「お前様に其様な入用は無えぢやねえかな。お前様はもううんと金持つてゐるでねえかな。」と目の笑つた老人は云つた。

それで相談は終りになつた。

ネクリウッドフは尙ほ一度自分の提案を繰返し述べた、そして直ぐ返答を促さなかつた、ただ百姓一同が村に歸つて尙ほ篤と皆の者とも談合を重ねた上で、確とした答へをするやうにと云つた。

百姓一同はそれを受合つて暇を告げた、そして感激したらしい調子で村の方へと歸つて行

つた。途すがら高い聲で頻りに何やら話しつゝ次第に遠ざかつて行くのが、夕方の川の面傳ひに暫くは聞えた。

四六六

翌日は百姓等一同野良には出ないで、地主の提案を相談し合つた。皆は二つの派に分れた。一方はネクリュウドフの云つた事を自分達の爲めになる、決して騙されるなどといふ危険はないと云ひ、他の一方は、さういふ提議の裏には何か狡猾な策略が潜んでゐるだらうと想像し、それを實際どういふ理由でどんな策略が潜んでゐると推定する事は出来なかつたけれども、その出来ないで却て一層氣遣つた。

しかし其翌日百姓一同はネクリュウドフの云ひ出した条件一切を承認する事に一致した、そして其決議を齎らして來た。それは今ネクリュウドフのしてゐる事は一切自分の罪亡ぼしの爲めであるから、其底に悪企みが潜んでゐやうなどと心配するには及ばないと一人の老婆が云つた言葉でさう結着したのであつた。それは又ネクリュウドフが村に行つた時金を三四の女達に呉れたのが利いたのであつた。彼がさうしたのは初めて親しく目前まへに百姓等の赤裸々な貧窮の状を見たからで、一體は施し物などをするのを十分考のある事とは思はないながら

も、つい他所目には見て行けなかつたのであつた。そして恰も彼は此時前年賣り拂つたタスマンスコエの或る森の代金と若干の農具其他の代金とを受取つてゐたのであつた。

彼が乞はれて金を施したといふ噂が傳はると、方々から多勢の者が、取り分け女が、救ひを求めて縋つて來た。彼はそれに對して何うしてよいか分らないので當惑した、誰にどれだけをやればよいか、それを何によつて判断しようもないので困り抜いた。如何にも實際悲惨な生活の爲めに救ひを哀求するのは、何と思つても拒絶するわけには行かなかつた、けれども又さうたゞ偶然に従つて呉れてやるのは全く無意義の事であつた。その當惑を切り抜ける唯一の方法は、たゞ一刻も早く彼等百姓等の現状を改良してやる事より外にはなかつた。

彼はパノオヲ滯留の最後の日に母屋の内に入つて、色々様々な道具などを調べてみた。叔母達が使つてゐた眞鍮の環だの獅子の頭だのが着いたマホガニ材の丈低い古筆筒の下部の抽斗には手紙が幾らも入つてゐたが、その間に挟まつて一枚の寫眞があつた。ソフィア・イワノフナ、カタリイナ・イワノフナの二人の叔母と、大學生時代の彼自身と、嬉しさうに生き生きとした純潔な美しい處女のカテウシヤとが寫つてゐた。

ネクリュウドフはその寫眞と手紙だけを取つて、餘は皆水車をやつてゐる男の自由に委ねた。その男に彼は管理人の世話で家も家具も一切、十分一位の値で賣渡したのであつた。

今又彼はクスミンスコエで財産を失ふのを惜しがつた事を思ひ出した、そして何うして其の時はそんな惜しい氣が出たかを今は怪しみもし驚きもした。今の彼には不斷にたゞ喜悅があつた、自由と向上の爽快があつた、探檢家が新陸地を發見した時のやうな氣持があつた。

10

田舎から歸つて來ると久しく住んでゐた町がネクリュウドフには何となく妙な勝手の違つたものに思はれた。街燈の點つた夕方着いて、停車場から馬車を雇つて彼は自宅に入つた。どの室にもまだナフタリンの匂ひが高かつた。アグラフェエナ・ペトロオフナと下男のコルネエとはぐつたりと疲れて不愉快さうな顔をしながら、諸道具の片付け方に就いて云ひ合ひをしてゐた。そんな道具は皆たゞ取り出して空氣を通したり埃を拂つたり又再びしまひ込んだりする爲めに存在してゐるかのやうであつた。

ネクリュウドフの室はまだ掃除がしてなかつた、そして靴だの箱で場を塞いでゐるので、その間を通るにも骨が折れた。ネクリュウドフが雇人等の豫期より早く歸つたので、折角何やら祕密の進行してゐたのが妨げられたらしい模様であつた。ネクリュウドフは田舎の貧困な生活を親しく見て來た後なので、今そんな無意義な貴族的な生活に觸れるのが不愉快で堪ら

ず、明日になつたら自分だけ何處かの宿屋に引移つて、諸道具の片付などはアグラフェエナ・ペトロオフナに一切委せる事にきめた。姉が來て萬事を決定的に處理するまで、彼女が自分で好いと思ふ通りにやつて呉れ、ば夫れでよいのであつた。

翌朝は早くネクリュウドフは家を出て、監獄の近くに質素な而して可なり粗末な二室を借りた。そして是非要るだけの物を自分が擇んで夫れを家から其宿に運んで貰ひ、自分は直ぐ辯護士のフナアリンを訪ふべく又出て行つた。

寒い朝であつた。霰が落ちたり雨が降つたりした後によくある、春の寒い日が來たのである。身に沁みるやうな風が吹いた。ネクリュウドフは地薄な外套を着てゐたので、ぞくぞくした。暖まるやうにと思つて次第に足を早めた。

今度田舎で初めて見た男女の百姓の若いの子供や老人達の悲惨な姿が、まだ彼の心の目にはちらちらした、そして漫ろに彼は今見る都會のすべてと夫れを比較した。肉屋、魚商、服屋などの店の前を通つて行きながら、彼はそんな物一切を今初めて見るかのやうに愕いた、其處にも彼處にも肉付きの好い脂肪あぶらぎつた番頭や手代てしろなどが服装も小綺麗にして立働いてゐる所は、田舎には決して見られない圖であつた。辻馬車の馭者も、方々の門番も、前垂を掛け、髪を縮らしてゐる女給仕も、殊に馬車の内にふんふん返り返つて威張りながら通行人を物の

數とも思はぬらしく見下してゐる客など、皆よく肉づいて肥え太つてゐた。そんな連中を見るにつけても、彼は漫ろに田舎の百姓等が土地を失つて仕方なしに都に出てゐるのを思ひ浮べざるを得なかつた。そんな破目になつて都に出て來てゐるものは、一部は都會の風潮に巧く掉さして、所謂成功して紳士などといふ者のやうに其生を娛しんでゐるものもあつた。けれどもさうでない者は、田舎に居る時よりも尙ほ一層落れて苦しんでゐるのが多かつた。彼が料理屋の土間の窓下などに仕事してゐるのを見かける靴修理人などは、さうした不運な田舎出の者らしかつた。シャボンの湯氣のむくむくと湧き出てゐる窓の内で、瘦せ腕を削き出して洗濯物の皺などを切りと延ばしたりしてゐる襤褸を着た洗濯女なども、矢張り蒼白い顔をして瘦せ衰へてゐた。前垂をかけ素足に重さうな靴をつつかけ、頭から足まで赤や黒の塗料で汚れながら向うからやつて來た二人のペンキ塗の職人も、ネクリウッドには傷心の種であつた。その二人の職人は袖を臂まで捲り上げ、筋の出た弱さうな日に焼けた其手にベソンの入つた桶をさげて來ながら、何やら絶えず口汚く罵つてゐた。其顔はひどく寒れ疲れて陰氣臭く意地悪さうであつた。顔も埃にまみれて黒くなり乍ら自分の車の上に揺られて來る荷馬車屋なども亦同じ運命の仲間であるらしかつた。通りの角などに立つて通行人に物を貰つたりしてゐる襤褸の男や子を連れた女なども、矢張り寄つた顔つきをしてゐた。ネクリ

ウッドフは或る酒場の窓の前を通ると、その内に居る多くの顔も、同じく寒れ弱つた陰氣なものばかりであつた。塚だの茶道具だのが載つてゐる汚い小さい幾つかの食卓の周りには、利かぬ氣らしい汗の滲み出た赭ら顔の男や女が腰かけてゐて、頻りと、飲んだり喚いたりしてゐた。食卓の間を縫つて白服の男給仕が走り廻つてゐた。窓際に腰かけてゐた一人は、眉をびりびりと吊り上げ齒を削き出して、何か思ひ出さうと努めるかのやうに、見るともなく前の方をたゞちつと見詰めた。

「何の爲めに彼處にはあんな連中が集つてゐるのだらう。」とネクリウッドフは考へながら、颯と面を打つた冷い風に埃を浴びせられると同時に、饒えるやうな脂肪と塗り立てのペンキ臭ひに鼻を襲はれた。

通りの或る曲り角で鐵材を積んだ一臺の荷馬車がネクリウッドフの横を通り抜けようとした際に、舗石の道の凸凹してゐたのに躓いて怖ろしい響きを立てたので、彼は耳も頭もがんと鳴つた。それで足を早めて荷車の先きにならうとすると、其時彼は不圖荷車の鐵材の響きの間に自分の名を呼ぶ聲を聞いた。彼は立止つて聲のした方を見ると、髭をつんと尖らして血色のいゝ冴々しい顔をした一人の士官が、彼のつい少し前の方で馬車を下りながら微笑と共に眞白な齒を見せて手招きをしてゐるのであつた。



「ネクリュウドフぢやないか。」

ネクリュウドフも瞬間は嬉しいやうな感じを覺えた。「やあ、セエンボックだな。」  
併しさう嬉しいやうに感じたのは、決してセエンボックの爲めでなかつたことを直ぐ彼は覺つた。

それは嘗てネクリュウドフの叔母達の許にネクリュウドフと一緒に客となつたあのセエンボックであつた。其後ネクリュウドフは長いこと彼と逢はなかつたが、彼も其後軍隊をやめてゐるとか聞いてゐた、そして借金はしてゐながらどんな方法を講ずるのやら巧く金持社會の間に交際してゐるとも聞いてゐた。今縫つてみて愉快さうな満足らしい顔をしてゐる所を見れば矢張さうに違ひなかつた。

「やあ、君に逢つて好かつた。もう誰も此地には昔の仲間居ないからな。だがね、君も可なり老けたぜ。」彼は馬車から出て来て肩をちよいと揺り乍ら、「歩きつきで直ぐ君と分つたよ。一緒に食事でもしようぢやないか。何處だい、此近所で美味しい物を食はせる處は？」  
「どうもおれは時間がないのでね。」と答へてネクリュウドフは、彼に氣を悪くさせないで早く別れたいものと、たゞ夫れのみを考へた。「どうして此地に來たんだね。」  
「用向でさ、君、後見職の用向さ。おれは今サマノフ家の法定支配人さ、彼家の仕事をやつ

てゐるよ。君も知つてるだらう、あの丸持ちは。五萬四千デッシェティンの地主だからな。」とセエンボックは其五萬四千デッシェティンは自分が作つてでもやつたかのやうに誇りに云つた。「しかし經營はすつかり駄目になつてしまつてゐたのさ、不統一を極めてね、無茶苦茶なものだつたよ、それだけの地面は残らず百姓に貸しつけてあつたがね、彼奴等がちつとも地代を納めないで、その滞納額が八萬ルウブル以上になつてゐたのさ。それでおれは一年の内に全部改革してやつて七割以上支拂はしてやつたんだ。どうだね、おれの手腕は。」

ネクリュウドフも、嘗てセエンボックに就いて聞いてゐた事を思ひ出した。自分の財産を耗つてしまつてから負債が嵩む許りで少しも支拂はなかつた彼は、却つて其爲めに或る百萬長者の財産管理人に擧げられたといふことであつた。それで、今はその職掌で食つてゐるのであつた。

「どうしたらおれは此の男の感情を害さないで別れられるだらうかしら。」上髭を綺麗に磨き上げてゐるセエンボックの脂肪ぎつて肥え太つた光澤のある顔を見やり乍ら、又その打解けた蟠りない調子で財産管理振りの自慢たらたら手柄話だの、何處で一緒に食事をしようなどといふのを聞き乍ら、ネクリュウドフはたゞそれのみを考へてゐた。  
「さ、ね、何處で食べよう？」

「どうもね、今は御相伴出来ないんだ。」と云つてネクリウッドフは時計を見た。

「困つたねえ。ぢやあ、今夜は競馬があるね。君も行くだらう？」

「いや、行かないよ。」

「そんなこと云はないで來給へよ。おれの馬は今もう無いが、おれはグレイシンの馬に賭けてやる積りさ。君も知つてるだらう、あの男は？ いゝ馬を持つてるぞ。だから是非來給へよ。そして後で一緒に夜食をしようぢやないか。」

「いや、おれは夜食にも行けないんだ。」とネクリウッドフは微笑しながら答へた。

「だつて、そりや何うしたわけなんだ。今は君何處へ行くところなのだ。君の都合がよければ一緒に此の馬車に乗らないか、君の行先きまで送らうぢやないか。」

「ある辯護士を訪ねるんだが、すぐ其の角が其家なんだ。」

「だが君は監獄をどうすると云ふんだね。囚人の辯護人になつたのかい。コルチャアギンの家でおれはそんな事聞いたんだが。どういふ具合なんだね。一つ聞かうぢやないか。」

「さうだ、それは違ひないよ。併し往來で話も出来ないぢやないか。」

「む、そりやさうだ。やつぱり君は一風人だつたからな。それはさうと、今夜の競馬には來るだらうね？」

「いや、行けないよ、又行き度くもないんだ、だが斯う云つたからつて氣を悪くしないでゐて呉れ給へ。」

「氣を悪くなんぞするものか。どこだね、君の住ひは？」と尋ねたが、彼の顔は急に變つて眞面目になり、何か見詰めるやうな目をして眉を吊り上げた。それは何か考へ出さうとするらしい様子であつた。ネクリウッドフは其様子に、つい今さき酒場の窓際に見た男がびいと垂れ下つた唇をして眉を吊り上げた時の表情を讀んだ。

「今日は少し寒いやうだね。」

「さうだ。」

「買った品はお前其處に持つてゐるのか。」とセエンボックは馭者を顧みて尋ねてから、「ぢやあ別れよう。本當に嬉しかつたよ、君に逢つて。さよなら。」と云つてネクリウッドフと強く握手を交した。そして馬車に飛び乗つて、其のつやつとした顔に又微笑を浮べ雪のやうに白い齒を露はしながら、同じく白い新しい手袋をはめた手をちよいと舉げた。

「おれも本當にあんな種類の人間だつたのか。」とネクリウッドフは彼と別れて辯護士の家へと歩みながら考へた。「さうだ、すつかりあの通りではなかつたにしても、兎に角あんな人間にならうとしてゐた、そして一生あんな調子で世を渡る積りだつたのだ。」

辯護士はネクリウッドに順番に拘泥せず直ぐ會つて、又直ぐメンショーフの事件に就いて話した。そして告訴に少しも根本的理由のないのを憤慨した。

『これは實にけしからん事件です。』と彼は云ふのであつた。『その家主が保険額を取らうと思つて自分で火を放つた事は、殆ど疑ふ餘地がありません、そしてメンショーフ一家の罪になる證據は少しも擧がつてはゐないんです。だから嫌疑の理由はまるで無いんです。つまりこれは豫審判事が變な力瘤を入れたのと検事の粗漏の結果です。ですから此事件が田舎の裁判所でなく此地で取扱はれる事になるならば、私が無罪放免にしてやります、報酬は戴きません。それから次の事件です。フェドツシア・ピリウコワの爲めの皇帝陛下宛の愁訴状はちやんと書き上げて置きました。ですから彼得斯堡へおいでになりましたら、此書をお待ちになつて、あなた自身でお出しなさい、そして十分さう云つて置かなくてはいけません、でないとなゞ一度の訊問があるだけで直ぐ葬られて終ひます。それから尙ほ請願局に勢力のある高官連をあなた御自身で訪問なさるだけの勞は惜しんではいけませんよ。すると、事件はこれだけでしたね？』

『いえ、御覽なさい。私にこんな手紙が來たんです。』

『はは、あなたは一種の漏斗になりましたね、あなたを通じて監獄内の一切の不平が流れ込むわけですかね。』とフナアリンは笑ひ乍ら云つた。『そりやあんまりですよ、そんなに澤山の事があなたに出来るものですか。』

『いや、これは實にけしからん事件なんです。』と云つてネクリウッドは、手短かに其事柄を話した。

『それを何うしてあなたは怪しむんです？』

『怪しみますとも、なるほど巡查は命令を受けてやつただけの事でせうが、検事がそんな公訴状を受付けるなんて……教育のある人間としてそんな……。』

『それは御量見違ひですよ、検事だの裁判官だのを一般に心の正しい自由な人間として観てゐることは、昔はそれで間違ひでなかつたんですがね、今はすつかり變つてゐますからね。検事等とてもたゞ自分達の月給日の事だけを考へてゐる並の役人に過ぎませんから、月給を貰つた上にも尙ほ、もつともつと貰ひ度いと思ふのは當然の事であり、それが彼等の處世上の主義方針の全部なのです。ですから彼等は氣さへ向けば告發しますよ。裁判しますよ。判決を下しますよ。それで私は彼等に對してはいつも感謝を持たずにはゐられません、だつて

私も貴方も又他の誰彼も監獄にぶち込まれないで斯うしてゐられるのは、たゞ彼等が我々を容赦して呉れてゐるからの事です。彼等が我々を厳めしい文句通りに「一切ノ公權ヲ剝脱シ遠隔ノ地域ニ」放逐したりするのは、そりや何でも無い朝飯前の事ですからね。』

『併しそんなに検事等の氣儘勝手に何事も決するわけならば、抑も何の爲めの裁判なんです？』

辯護士は面白さうに打笑つた。

『そりやあなた、面白い事を仰しやるではありませんか。そりや哲學ですよ。それならそれで、又お話しませう。土曜日に何うぞいらしつて下さい、其時は學者、文士、藝術家などいふ連中が集ります、其場で大に抽象的問題を論じませう。』と彼は特に抽象的問題といふ語に皮肉な感情の高調振りを見せて云つた。『妻とは此の前にお近づきになりましたね。ではどうぞ、お待ちしてゐます。』

『さうですね、一つやつてみようと思ひます。』とネクリュウドフは答へたが、それは心にもない言葉であつた事を直ぐ自分で感付いた。何となれば彼に其時やつてみようと思ふ何事かがあつたとすれば、それはフナアリンの家に集るやうな所謂學者や文士や藝術家などの會合には出席しない口實を何とか考へる事だつたのである。

法律を適用するもしないも一に裁判關係の役人の都合次第であるならば、裁判所の意義は零であるといふネクリュウドフの言葉を辯護士が打笑つた事で見ても、又辯護士が「抽象的問題」だの「哲學」だのと云つた事から推しても、辯護士はじめ其同型らしい友人等とネクリュウドフとの物の見方には、非常な根本的差異のある事が思ひやられた。ネクリュウドフと彼等との間には非常に大きい溝渠が挟まつてゐて、その溝渠は彼と彼の以前の友人たるセエンポックなどとの間のそれよりも、すつと大きいものである事が思ひやられた。彼はセエンポック等に對してすら今は別人種のやうな感じを持つてゐたのである。

## 一一一

監獄まではまだまだ遠くもあり、それにもう早くもなかつたので、ネクリュウドフは馬車を雇つた。正直者らしい顔の大きい中年の馭者は、とある町を通り過ぎる時ネクリュウドフの方へ振り返つて、或る大きな建築中の建物を指して云つた。

『御覽なせえ、何て大かい家でせうなあ。』そして自分がそれをさも自慢とするかのやうであつた。

實際それは大きい家で、又一種特別に風變りな複雑な様式で建てられつゝあつた。建物の

周りには大きい材木を鋸で確と止めた足場が立てられ、それと往來との間には垣を結つてあつた。足場の上には漆喰に汚れた左官が幾人も蟻のやうに働いてゐた、煉瓦を嵌めてゐるのもあれば石を切つてゐるのもあり、重さうな桶や箱を吊り上げてゐるのもあれば、空になつたのを下してゐるのもあつた。

建築技師らしい立派な服装をした大柄の紳士は足場の下に立つて、恐れ入つた恰好で承はつてゐる請負人らしい男に、上を指し乍ら何か話をしてゐた。その二人の前を空車や積んだ車が通つて木戸から出たり入つたりしてゐた。

「働いてゐる者共も働かしてゐる者共も、一體何と心得て仕事に就いてゐるのだらう、自分の女房は家で過度に骨折り、子供等は死を眼前に控へて爺のやうな顔をして凄く笑つたり足をばたばた動かしたりしてゐるのに、どこの馬鹿なやくざ者の爲めか知らないが、あんなつまらない馬鹿々々しい家なんぞを造つてやらねばならないなんて、それでよく平氣で居れる事だ。」とネクリュウドフは其建物を見上げながら思つた。

「何て馬鹿々々しい家だ。」と彼はつい獨語つた。

「どうして馬鹿々々しいんでげす？」と馭者は氣色を悪くして尋ねた。「私は有難えと思つて居りやすなあ、だつてお蔭に皆が仕事にありつけるんだもの。ちつとも馬鹿々々しい家ぢや

ごせえやせんぜ。」

「そりやさうだがね、無用な仕事さ。」

「無用ぢやねえでせう、家が建つからにやあ働く者がなくつちや。」と馭者は云つた。「お蔭で皆が食つて行けるぢやごせえやせんか。」

ネクリュウドフはそれには何とも答へなかつた、車がごとごと揺れて音が八ヶ間しかつた爲めでもあつた。監獄近くになると、馭者は普通の鋪石の道から小さく砕いた石を敷きつめた道に入つた、そして其處の上を行くのは話をするのに都合がよかつたので、馭者は又ネクリュウドフに話しかけた。

「今年は何てまあ大勢の者が町に入り込んで来る事だけせうなあ。」彼は馭者臺の上から身をネクリュウドフの方へ一寸振り向けて向うの方を指し示した。なるほど向うからは田舎から出稼ぎの一團が斧や鋸を持って、毛皮混りの上衣やら袋やらを肩からかけてやつて來るのであつた。

「今年は前年より多いのかね？」

「多いどころぢやがせん。どこの安宿も一べえでさ。弱り抜いてゐやすよ。」  
「どうしてさうなんだね？」

「どうしてつて、そりや殖えやしたからさ、殖え過ぎたんでさあ、だから何處に居りや好えか分んねえんでさ。」

『でもさ、殖えたからつて、何うしてさう都會に出て来るんだね、何故田舎にゐないんだらう？』

『田舎にゐたつて仕事がねえんだもの、地面が足りねえんですからな。』

ネクリユウドフは自ら好んで疵を求めたやうな心持を覺えた。そしてその疵は以前に持つてゐた疵痕の上に得たもののやうであるのに自ら愕いた。けれどもそれは其疵痕の上であるから痛いらしかった、又その疵痕をそれと知るから痛いらしかった。

「何處でもさうなるかしら？」と彼は思つた。で其の馭者が自分の村にどれだけの地面を持つてゐるか、又其村にはどれだけの地面が百姓一般のものとしてあるか、又馭者は何故田舎を捨てて都に出て来たかを彼は尋ねてみた。

『手前共は一人に付き一デッシエティンでござえやすだ。そして手前共は三人となつて居りやするがなあ。』と話し好きの馭者は語り繼いだ。『手前の家ぢやあ親父と弟と居りやすだ、一人の弟は兵隊に行つてやしてな。そんで其二人が今野良の仕事をやつてますがな、ちつとも面白うねえんで弟もモスカウに出る云つてやした。』

『だつて地面を借りるわけには行かないのかい。』

『今日日で旦那様、借りられるもんでげすかな。何處も彼處も、以前の地主様は皆身代を無駄使ひして耗つてしまつてさ、今ぢやあみんな山師の手に入つてしまつてやすだ。山師達からは借りられましねえんでがす、だつて奴等めいめい自分で耕すんですからな。手前共の村ぢやあ今は或る佛蘭西人が地主でござえやすだ。先の地主様から買つたんでがすがな、ちよつぱりだつて貸しやしねんでがすよ、だからそれつきりです。』

『何といふ佛蘭西人かね。』

『デユフアアて云ひやすだ。旦那様御存じかも知れましねえなあ。此地の大けえ芝居所の役者衆の鬘を拵へてた男でな、そりや好え商賣だつたちふ事で、そんで金を蓄めやしたんでさ。そして先の旦那様からすつかり買ひやしてな、今ぢやあ村の大將でさ、手前共も皆もう彼奴の勝手氣儘にされてやすだ。それもな、彼奴當人はまだ好え人間でがすが、露西亞人の女房て奴が、此奴がどうにも仕様のねえ阿女でござえやすだよ。そりや百姓を虐めるつたらありましねえからな、惨めなもんでげす。おつと、もう監獄に來やしただ。何方へ行きやせう？表の正門ですかな。正門からは通さねえだらうと思ひやすだが。』

今日はカテウシヤはどんな態度を見せるだらうといふ妙な氣遣はしさを覚え乍ら、ネクリウドフは正門の鈴を鳴らした。出て来た看守に彼はマスロオワに會ひ度い旨を云ふと、看守はマスロオワなら病院に移されてゐると教へた。それで彼は直ぐ病院の方に行き、出て来た柔和さうな小使に案内されて小兒部に行つた。

石炭酸の匂ひをぶんぶんさせた年若い醫員がネクリウドフのゐる廊下にやつて来て、氣六ヶ敷しさうな嚴格な調子で彼の來意を咎めるかのやうに尋ねた。その醫員は萬事につけて囚人等の肩を持つて其の便宜を計つて呉れてゐる男なので、監獄の役人側の者を嫌ひ、主任醫をすらも好まないものであつた。それで彼は今もネクリウドフに何か規則以外の事を要求されるのではないかと氣遣つて、自分は決して高地位の者などに對してだつて容赦したり例外を計つてやつたりはしないといふ所を豫め示す積りで、それでつんつんした調子を見せたのであつた。

「こゝには女はゐません。こゝは小兒部です。」と彼はけんもほろゝに云つた。

「知つてゐます。併し女囚が一人監獄の方から此處に手傳ひにやられてゐる筈ですが。」

「それは二人ゐます、併しあなたは何の用があるんです。」

「其中の一人のマスロオワといふのに私は近い關係のある者ですが、」とネクリウドフは云つた。「私はマスロオワに面會がしたいのです。その女の事件で彼得斯堡に控訴をしに行くのですが、今日は此品をやらうと思ひまして。なに、これはたゞ寫眞です。」と云つてネクリウドフは衣囊よりその入つた封筒を取り出した。

醫員はもの柔かになつた。「よろしうございます、そりや出來ますとも。」そして醫員は白い胸掛を着けた老年の女を呼んで、マスロオワを連れて來るやうに云ひつけてから、「どうぞです、お掛けになりませんか、それとも面會室に行きますか。」

「いや、有難う、もうそれには及びません。」とネクリウドフは答へた。そして醫員の態度の變つたのを幸ひに、マスロオワが病院内で人々に悦ばれてゐるか否かを尋ねてみた。

「えゝ、なかなか好く働いて呉れます、今迄居たやうな社會の女とは思へない位です。」と醫員は答へた。「あすこから來ました。」

老年の女に續いてマスロオワは來た。縞のある服の上に前掛を當てて、頭にも白い布を着けて髪を隠してゐた。ネクリウドフを一目見ると彼女は顔を眞赤にして、何うしようかと思ふらしく一寸立止つたが、顔を曇らして目を伏せながら足早に彼の方へやつて來た。直ぐ

彼の前に来ると、握手などしようとは思はなかつたのを、いして、尙ほ一層顔を赧めた。ネクリウッドは彼女が此前に餘りに怒つたのを又自分から詫びた時の面會以來、まだ彼女を見なかつたので、今も矢張あの時のやうな態度だらうと豫期してゐた。

併し今日はすつかり變つてゐた。彼女の顔の表情には何だか知れない全く新しい或物が出てゐた。何だか差控へてゐるやうなきまり悪がつてゐるやうな、それであつて妙に意地強く敵意を持つてゐるやうなところがあるとネクリウッドには思はれた。彼は醫員に云つた通り彼得斯堡に行く事を話し、パノオヲから持つて來た寫眞の入つた封筒を渡した。

「パノオヲで探し出したんです。もうすつと昔の寫眞です。あなたが悦ぶかと思つて持つて來ました。」

彼女はそれが何になると問ひ度げに怪しむやうに黒い眉を上げて彼を見たが、稍あつて黙つて受取つて胸の衣囊に納つた。

「あなたの叔母さんに會つて來ました。」とネクリウッドは云つた。

「さう。」と彼女は冷かに云つた。

「此處の方がいゝでせうね。」とネクリウッドは尋ねた。

「えゝ、大變いゝことよ。」

「仕事が辛くはない？」

「いゝえ、そんな事ありませんわ。たゞ、私まだ慣れませんが。」

「それでは私も嬉しい。あすこよりすつと好いでせうね？」

「あすこつて何處でございます？」と彼女は又顔を火のやうにして詰るやうに尋ねた。

「あの監獄の檻房の内さ。」とネクリウッドは口早に云つた。

「どうしてあすこより好いんですの？」

「此處に居る人達があすこのより良いんでせう。此處には彼處に居るやうな者は居ないだらうから。」

「あすこにだつて好い人も居ますわ。」

「メンシヨオフの爲めには一切の手續きをして置きました。無罪放免になるやうに願つてゐます、大抵なるでせう。」

「神様がさうして下さるでせうとも。あんな好いお婆さんだもの。」と彼女も淡い悦びの微笑を見せた。

「そして私は今日彼得斯堡へたちます、あなたの事件は直ぐ再審に附せられる事になつてゐますから、そして何うかあの判決が取消しになるやうに願つてゐます。」



『取消しになるともならないとも、もう今は何方でも同じ事よ。』  
『何故今は同じなんです？』

『何故つて、たゞ同じですわ。』と云つて彼女の軽い視線はちらりと彼を掠めた。

その言葉と其視線とは、彼女の爲めに一切を擲つていつた彼の決心を彼が今も變らず確と持つてゐるか、但しは放棄したか、彼女の謝絶を幸ひに斷念したか、それを彼女が知り度い爲めに云つた言葉であり、投げた視線であるやうにネクリュウドフには思はれた。

『あなたがそれを何うして同じと思ふのか、それは私に分らない。』とネクリュウドフは云つた。『私は併し何方になつても同じです。何うならうとも、私は私の云つた通りの事をするのだから。』決定的な語調でさう云つた。

彼女は頭を擡げ、斜に見る黒い目を彼の顔に向けて直ぐ又外らし、そして嬉しさうに輝かしい顔をした。併し其の口で云ふ事は目で云ふ事とは違つてゐた。

『そんな事仰しやつても駄目ですわ。』

『たゞあなたにさうと承知して貰ふために云つたのです。』

『そんな事はもう何もかも皆あなたは云つておしまひになつたではありませんか、もう何も仰しやる事ありませんわ。』洩れさうな微笑を辛うじて抑へながら彼女はさう云つた。

病室の方に騒々しい物音がして、子供の泣聲が聞えた。

『私を呼んでるのでせう。』さう云つて彼女は心配さうに見返つた。

『それでは、さよなら。』と彼は云つた。

彼女は彼の差延べた手を知らない振りして、握手をしないで彼方へ向き、勝利の感じを辛うじて押し隠しながら、急ぎ足に廊下を向うへ行つた。

『彼女はどうしたのだらう。何と思つてゐるのだらう。どんな氣持なのだらう。おれを試す積りかしら。それとも實際おれを許す事は出来ないのかしら。思ふ事も感ずる事もおれに云ふ事が出来ないのだらうか、それとも云ふのが厭なのだらうか。心が和らいだのかしら、さうでないのかしら。』とネクリュウドフは自分に問うてみたが、何れとも自分に答へを與へる事は出来なかつた。ただ併し彼は、彼女が兎も角も變つてゐる事、彼女の魂に或る切要な變化が起つてゐる事、そしてその變化は自分と彼女とを結びつけるのみならず、又實に或る尊い何物かと結びつけるものである事を知つた、其或者の遍照の下に其變化は起つたのであつた。さう思ふと彼は神聖な喜悅の感激に驅られずにはゐられなかつた。

彼女は子供の寢床の八つある病室に戻ると、ある看護婦に云ひつかつてそれ等の寢臺の一つの床を延べ直した。そしてシイツを餘り長く延べようとしたので彼女はふと跪いて、今少

して倒れようとした。首に繻帯をしてはゐるが最早大分癒くなつた一人の子供は、それを見て笑ひ出した。すると彼女も辛抱が出来なくなつて寢臺の縁に腰かけて頻りと笑つた。その釣込むやうな笑ひに惹きつけられて餘の多くの子供も笑ひ出した。看護婦は腹立たしげに叱りつけた。

「何をお前さん笑ふんです。此處はお前さんの今迄居たところとは違ひますよ、其積りで居て貰はなくちや困るわ。さ、此の食物は彼方へ持つて行つて貰ひませう。」

マスロオワは口を噤んで、云はれた通りに食器を持つて出て行かうとしたが、其際かねて笑ふ事を禁じられてゐた繻帯した子供の目と自分の目とぶつかると、又もや彼女は吹き出した。

其日は彼女は人の居ない折には衣籠より封筒を出して、ちよいちよい中の寫眞を見た。夜になつて仕事を終ると、彼女は今一人の看護婦と二人で寝む事になつてゐる室に自分だけゐる時、其寫眞を封筒からすつかり取り出して緩りとつくづく眺めた。寫つてゐる人々の一人一人の顔形から、服装から、エランダの前の段から、扱ては背景となつてゐる灌木の叢に至るまで、懐しげに貪り見た。見ても見ても飽かなかつた。殊に額の周りに髪を縮らしてゐた自分の幼い時の美しかつた顔を、澤も褪せて黄ばんだ其寫眞の中に彼女は何時迄も見詰めてゐた。

た。同じ部屋の看護婦が入つて來たのも氣付かない位ゐに見詰めてゐた。

「なあに？ それはあの人があなたにくれたの？」と人の好ささうな肥えた看護婦は云つて、其寫眞を覗き込みながら「それがあなたなの？」

「私でなくつて誰でせう。」とマスロオワは微笑んで相手の顔を見た。

「そして其人は誰？ あの人？ それから其方は？ あの人のお母さん？」

「叔母さんなの。あなた私を見間違へて？」とマスロオワは尋ねた。

「分るもんですか。私にや迎も分りやしないわ。だつて丸つきり顔が違つてるんだもの。十年位ゐは屹度過ぎてゐるわねえ、ねえ、さうでせう？」

「年の爲ぢやないわ、たゞ私の生涯が……。」と云つてマスロオワは今迄のいそいそした氣持を急に失つた。その顔は曇つて、眉の間には皺が刻まれた。

「それが何うだつたの？ 呑氣な生涯ぢやありませんか？」

「えゝ、えゝ、呑氣な生涯よ。」とマスロオワは答へた、そして目を瞑つて頭を振つた。「懲役より辛い生涯だつたのよ。」

「だつて、どうしてさ？」

「どうしてだつて、あなた、夜の八時から朝の四時まで……。それも毎日……。」

「だつて、それなら誰もそんな商賣なんか皆すぐやめさうなもんぢやないの？」  
 「やめ度くたつて、さうは行かないわよ。あゝ、もうそんな事云つたつて仕様がなない。」とマ  
 スロオワは氣を苛つて躍り上り、寫眞を卓の抽斗に突き入れるが早いか廊下に出た、抑へて  
 も抑へても涙が湧いて仕方がなかつた。寫眞を見てゐる間彼女はそれに寫つてゐる頃の自分  
 の氣持を覚え、その頃の幸福であつた事、なほ又彼と共に一層幸福になる筈であつた事を、  
 今其時さながらの心に歸つて夢みてゐたのである。それを今の看護婦の言葉は破つたのであ  
 る、彼女をしてつい先頃までの身の上を思ひ出させたのである、忌々しい墮落生活のあらゆる  
 戦慄すべき事を思ひ出させたのである。それまでとても臍ろに幾らかは思はないではなかつたが、はつきりと意識した事はなかつたのである。今は併し彼女は夜々のありとあらゆる  
 浅間しかつた事を思ひ出した、殊に斷肉祭の一夜の事を思ひ出した。酒に汚れた廣く襟のあ  
 いた赤い絹服を着て、酔つ拂ひ乍らぐつたり疲れて髪も振り亂し、夜の二時頃舞踏のあひ間  
 に、胡弓弾きの男と洋琴の伴奏をする瘡痕のあるごつごつした瘦せた女の傍に行つて、自分  
 のつらい稼業を嘆いた事、すると其女もつくづく其身の境涯がいやになつて何とか商賣替へ  
 をしようと思つてゐる由を打開けた事、そこに又同じ賣女仲間のクララが來て加はり、そし  
 て三人共に以後の生涯を變更しようと思ひ合つた事、そんな事がありありと思ひ出され

た。で、三人が愈其處を出て行かうとしたら、丁度其時又俄かに酔つ拂ひの客等が騒ぎ出し  
 たのであつた。胡弓弾きの男がある反覆節を弾き出すと、瘡痕の女はすぐ四人組舞踏の序景  
 に陽氣な露西亞民謡を歌ひながら洋琴の鍵盤に指を走らせた。フロックを着て白ネクタイを  
 飾つた小柄の酔ひどれが彼女(マスロオワ)を捕へ、髭を生やした肥太つた客がクララを抱  
 き、そして又踏つた、舞つた、歌つた、叫んだ、又飲んだ……。さうして一夜が明けて又一夜、  
 一年が暮れて又一年と時は過ぎて、とうとう商賣替へとはならなかつたのである。

それにつけても元を質せばネクリュウドフの故であつた。さう思ふと彼に對して彼女は又  
 もや強い憎惡を覺えた、彼に散々毒づいてやり度くなつた、思ふ存分罵つてやり度くなつた。  
 昔私の肉體を弄んだやうに、今度は私の精神を勝手氣儘に取扱はうとしたつて、誰がさうさ  
 せるものか、さういふ心を私が知らないと思つてゐるだらうけれど、ちやんと知つてゐる、  
 自分の心を立派なものにする爲めの道具に私をしようとしたつて、誰がそんな事をさせるも  
 のか、とさう云つてやり度かつた、さう云へる今日の機會を逸した事が返す返すも口惜しか  
 つた。そして自分を憐はしく思ふ悲しい心と、彼に對する憎惡の何うにも霽しやうのない悶  
 悶しさを忘れ度いと思ふと、彼女は又ブランデエが欲しくなつた。で彼女が今檻房に居る  
 としたら、以後飲まないとの時云つた誓ひなどは直ぐ破つたに相違なかつた、そして存分

飲んだに相違なかつた。併し此處ではそんな事は看護長にでも願はなくしては出来ない事であつて、その看護長は又彼女の尻のみ追ひ廻はし度がつてゐるので、彼女は一方ならず忌み厭つてゐるのであつた。今は彼女は男との關係が忌はしくて仕方がなくなつた。廊下の腰掛に腰かけてそんな悶々しい思を續けながら少し経つて、それから彼女は室に戻つた。そして看護婦が勞はるやうに何やかと尋ねるのには返辭もせず、失はれた自分の生涯を思つて潜々と泣いた。

四九四

一四

彼得斯堡でネクリュウドフがせねばならない用件は四つであつた、マスロオワの事件を元老院に控訴する事、フェドッシア・ピリウコワの件に就いて愁訴状を出す事、エエラ・ポゴドゥ張エエラ・ポゴドゥウコフスカイアが後で手紙で頼んで寄越した事で、監獄に入れられてゐる息子に會ひ度いといふ母親の其願を叶へさせてやる事、それだけを彼はやつてみなければならぬのである。

マスレンニコフを最後に訪問してから以來、殊に、田舎の自分の所有地を巡見してから以

來、ネクリュウドフは自分のそれ迄ゐたやうな社會に對しては心の底からの嫌惡を覺えてゐた。その社會では無数の人間の幸福を犠牲として極く少數の者の便利と快樂とが築かれて居り、其内に居る少數者は多數の苦惱を知る事も出來ず、又隨つて自分達が酷薄な所業を敢てしてゐる事、當に罰せられねばならない事をも感じないでゐるのであつた。今はネクリュウドフはそんな社會に足を踏み入れようとする事を思ふと、激しい不快と自己苛責を感じないではゐられなかつた。併し今迄の生涯より來た多くの習慣と、親戚關係や交際關係と、殊に是非とも此の際必要な自分の計畫の遂行との爲めに、どうしても彼は又其方に接近せねばならなかつた。マスロオワ其他の人々を救つてやらうと思ふ彼は、自分がたゞ尊敬しないのみならず、寧ろ極度に賤しみ憎んでゐるそんな社會の人々の援助と支持とを求めねばならぬのであつた。

彼は彼得斯堡に着いて嘗て、國務大臣をした事のあるチャアルスキ伯爵の夫人で自分の母の妹に當る叔母の許に滯留する事にすると、今は自分と全く別社會だと思つてゐた貴族社會の眞中に身を投じたのであつた不愉快ではあつた、併し仕方がなかつた。普通の旅館にでもつけば勿論いゝのであるが、さうすれば叔母が機嫌を損ずるのは分りきつてゐた。それに叔母は多方面に種々の有利な關係があるので、此際彼に取つては無上に大切な人であつた。

「お前は大人へん變つた事をやつておいでだつてね。」叔母のカタリイナ・イワノフナは彼が着いてから直ぐ自分で珈琲を注いでやり乍らさう云つた。「Vous posez pour un Howard (ハワードの意氣込みですかい。) 大きに囚人の味方をして、監獄に行つたり其筋に交渉したりしておいでなの。(ハワード—英國の博愛主義者で、監獄改良の爲めに) 少からず貢献した人。一七二六年生、一七九〇年死。)」

「いえ、いえ、そんな積りぢやありません。」

「なあに、それも好いぢやないの。だけどそれには面白い艶話があるんだつてね。一つ承はりませうよ。」

ネクリュウドフはカテウシヤ關係の話を残らず有りの儘にして聞かした。

「さう、さう、私聞いてみました。亡くなつたお前のお母さんが、お前がパノオヲの叔母さん達の家に滞留してた時分にそんな事話しました。あの叔母さん達は其の養ひ子をお前の奥さんにしてやらうと思つてゐたらしいつてね。」と云ふカタリイナ・イワノフナは彼の父方の叔母たるパノオヲの二人をいつも賤しんでゐたのである。「その女なの? Elle est encore jolie? (別嬪でもあつて?)」

カタリイナ・イワノフナは年は六十だが丈夫で快活で物事に根氣の強い話好きな叔母であつた。身長も高く肉付きもよく、鼻の下には見える位に髭さへ生えてゐた。ネクリュウド

フは彼女によく懐いて、子供の時から彼女の快活さと根氣強さにはいつも好んで釣込まれてゐた。

「いえ、ma tante (叔母さん)、もう一切濟んだ事なんです。たゞ私はあの女が罪もないのに不當な判決を受けてゐるから、それを救つてやり度いと思ふんです、又その判決には私も責任があるんですから、そしてあの女の悲惨な運命も私の爲ですから。出来るだけの事はあの女の爲めにしなければなりません、それは私の義務なんです。」

「でもお前が其女と結婚したいとか云ふ話は何うした譯なの?」

「え、私もさう思つてゐました、けれども女が厭だと云ふんです。」

伯爵夫人は目を丸くして甥を見詰めた。が又急に顔色を變へて快活な調子になつた。

「ぢやあ其女がお前よりは餘つぽと分別があるわね。だがまあお前は何といふ阿呆ですね。女が厭と云はなければお前は本當に其女と結婚する積りだつたのでせう?」

「さうですとも。」

「そんな過去を持つた女とかい?」

「だから尙更です。私が萬事に悪いんです。」

「何が悪いもんかね。お前は本當にお馬鹿ぢやんだわね。」と叔母は微笑を抑へて云つた。

「ひどいお馬鹿ちゃんだわ。だけど私はそれだから尙ほとお前が可愛いんです。」さう云つて彼女は其言葉が如何にも彼の精神状態を適切に云ひ現はしたと自分乍ら思つて、快感を覺えた。『でも、それぢやあ、何より都合のいゝ事があるわ。アライネといふ女がね、墮落女の爲めに無類な收容所をやつてゐますのさ。私も一度行つて見たがね、そりや厭らしい女ばかりなの。私は歸つてから頭の頂邊から足の爪先まで洗つて洗つて洗ひ淨めたわ。でもアライネ女史は誠心誠意それに従事してゐるから感心さ。だからお前の其女も其處に入れてやりませうよ。其女をよくならせる者は、アライネ女史の以外にはありません。』

『でも其女は懲役の判決を受けてゐるのです。ですから私は、控訴する爲めに此地に來ました。それが私の第一の用件なんです。』

『さう。すると其事件は何處で處理されますか？』

『元老院です。』

『元老院？ ぢやあ私の従兄弟のレヴウシユカさんがゐるわ。尤もあの人は賞勳局だわね。直接其方に勢力ある人は私一人も知らないんだし。何でもゲエとかフェエとかデエとかいふ頭文字のつく獨逸人でなけりや、イワノフだとかセミオノフだとかニキイティンだとか、又は、その變つたイワアネンコだのシモオネンコだのニキイテンコだのいふ連中ばかりなの。』

よ。私どもとは縁もゆかりもない人達ばかりさ、だけど伯爵に私さう云ひませう。伯爵は皆をよく知つておいでですからね。何でも知つてらつしやるのよ。だから、私さう云つてやるわ。そしてお前からもお云ひな、ね、でないとお前は私の云ふ事はお分りにならないんだから。私が何を云つたつて伯爵はいつも分らないとばかり仰しやるのさ、そしてそれ一天張だからね。誰だつて私の云ふ事が分らない者はありやしないんだけれど、伯爵だけは分らないんですとさ。』

その時給仕が銀盆に手紙を一通のせて持つて來た。

『おや、丁度お誂へ向きにアライネ女史の手紙が來ました。お前もキイゼエッタアさんの説教が聞かれてよ。』

『誰です、それは、キイゼエッタアといふのは？』

『お前知らないの？ 今夜家にゐてお前も聞くが、いゝわ、するとどんな人だか分ります。キイゼエッタアさんの説教を聞いたら、どんな悪人だつて跪いて泣かすにはゐられませんからね、悔い改めなくてはゐられませんからね。』

伯爵夫人は不思議な事には其性質とは似てもつかず、基督教の精髓は信仰にありと説く宗派の熱心な歸依者であつた。だから其頃流行の其説教のある集會には、彼女はよく出かけて

行つた、自宅に其信徒を集めて説教をして貰ふ事もあつた。その宗派では一切の宗教的慣例は禁じられて、聖像を飾る事も聖餐式を行ふ事なども出来なかつたが、そこは伯爵夫人は構はない方で、自分の家ではどの室にも、自分の寢室にさへも聖像を掛けてゐた、そして寺院の一切の規定などには何等の矛盾をも感ずる事なしに對してゐた。

「お前の關係した其墮落女だつて、キイゼゾッタアさんの説教を聞いたら、すつかり立派な人間になり變りますよ。だから今夜はお前屹度家（まゐ）にゐて聞いて御覽なさい、そりや本當に違つたお方だからね。」

「私はそんな事には氣が向かないんです。」

「聞けば屹度氣が向きます。だから兎に角是非家にゐなさい。それからまだ何か私に頼む事がおありならお云ひ。Videz votre sac（お前の袋を空けておしまひ。）」

「此地の監獄にまだ用があります。」

「監獄にですつて？　ぢやあいなわ、クリイグスムウト男爵に手紙を上げてもらいなわ。C'est un très brave homme（そりや偉いお方なの。） お前も知つておいでなのだらう、お父さんのお仲間だつたもの。少し降神術の信者なんだけど、そんな事構やしないからね。それに好いお方なの。それでお前は監獄にはどんな用があります。」

「監獄に入れられてる息子に面會したいといふ母親があるんです、それを許して貰ひ度いと思ひまして。併しそれはクリイグスムウド男爵ではいけないつて、チエルワンスキイといふ人の權限だつて私は聞いてますが。」

「チエルワンスキイは私嫌ひさ。だけどマリエッテさんの良人ですから、ぢやあマリエッテさんに頼むといふわ。あの人は私に何でもよくして呉れるんだから。Belle est très gentille（そりや可愛い人よ。）」

「それから今一つ其監獄に入れられてゐる女の爲めに願はなきやなりません。その女はもう數箇月そこに入れられてるさうですが、何の爲めだか薩張り分らないさうです。」

「おやおや、それは其當人にももう分つてるのさ。そんな女にはちゃんと覺えはあるのさ。そんな散切頭の女囚なんぞはそんな目に逢ふのが當然さ。」

「當然の理由でそんな目にあつてるか不當な理由で逢つてるか私は知りません、併し兎に角苦しんでゐるのは事實です。だのに叔母さんは基督教徒として聖書を信じて居りながら、そんなに不人情でゐれるのですか。」

「そりや仕方がないぢやないの、聖書は聖書、嫌ひなものは嫌ひなものさ。若し私が虚無黨の女なんか、殊に散切髪の女なんかに同情を寄せると、自分で思つてでもみたらどう、そ

れこそ尙一屬たまらないわ。とても私あんな女なんか辛抱は出来はしないからね。」

「何故辛抱がお出来にならないんです。」

「何故あんな女どもはそんな事をするんでせう。女らしくはないぢやないの。」

「ではマリエッテさんは何うです。マリエッテさんは色々な公おほやびだつた事に係り合つたりしても、それは叔母さんはいゝと仰しやるのですか。」

「マリエッテさんですつて？ マリエッテさんはマリエッテさんさ、そりや別さ。だけどあんな女なんぞと来ては、お話になりやしないぢやないの、ハルテウシュキナとか云ふ女なんぞは世間を教へるとか云つてるぢやないの。」

「教へるんぢやないでせう、民衆の爲めに盡すと云ふんでせう。」

「そんな女がゐないたつて、誰の爲めに盡せばよいか悪いか、分りきつてゐるつて事さ。」

「でも今民衆は塗炭の苦しみを嘗めてゐますよ。私は丁度田舎を巡検して直ぐ来たんですがね、百姓達は力の限り根限り働いて、そして食物も碌に食べずにあるんです、それなのに我々とは云ふと、贅澤三昧の仕放題をしてゐるぢやありませんか。これが正當と云へませうか。」とネクリウッドは叔母の大まかな心に氣を許して、自分の思ふ事一切を漫ろに云つてしまひ度くなつた。

「それでは何ですかい、私もせつせと働いて何も食べないでゐればいゝとでもお云ひなの？  
「いえ、あなたが何も食べないやうになんて、そんな事私は思やしません。」とネクリウッドは我にもあらず微笑しながら云つた。「たゞ我々みんな働いて、みんな食べるやうにしたいと私は思ふんです。」

叔母は又前のやうに訝るらしく彼を見つめた。

「お前は好い死に目を見ないねえ。」

「何故です。」

その時彼女の良人である丈高い肩巾の廣い以前國務大臣をしたことのあるチャアルスキイ將軍が其處に入つて来た。

「おお、ドゥミトリイさん、御機嫌よう。」と云つて彼はネクリウッドに剃り立ての自分の頬を差し出した。「何時お着きだね？」

そして將軍は黙つて夫人の額にキッスをした。

「いえね、此の人はそりや偉い事を云ひますのよ。」と夫人は良人に云つた。「此の人はね、私に川岸で洗濯物でもして馬鈴薯でも食べて暮して行けつて云ふんですよ。ひどい阿呆ですわ。だけど、お前、その願ひ度の事を願ふがいゝわ。怖ろしいお馬鹿ぢやんだもの。」と云ひ



直した。それから又良人に、『あなたお聞きになつたでせうね、カアメンスカイアさんは大へん落膽して命も氣遣はれるくらゐだつて事ぢやありませんか。あなた見舞にいらつしやるがいいでせう。』

『さうだ、どうもひどい事になつたもんだ。』と將軍は答へた。

『ぢやあいらつしやいな、お前も出て行くんでせう、歩き乍らお話をするがいゝわ。私は手紙を書かなけりやならないから。』

ネクリ、ウッドフが廣間の隣の間に入つたかと思ふ時、夫人は彼に呼びかけた。

『ぢやあ私マリエッテさんに手紙を書きませうね？』

『えゝ、どうぞ。』

『ぢやあ私餘白を残しておくからね、其處にお前その散切髪の女に就いて頼む事を書くがいゝわ。マリエッテさんが直ぐ且那樣にさう云つて呉れるでせう。すると旦那さんが取計つて呉れるだらうからね。私は怒つてるんぢやないんだから、さう思つちやいけませんよ。お前が保護しようてのは皆ひどく厭な者ばかりだもの。でも私そんな女達を虐めるんぢやありませんよ。そんな女達も神様の御心通りになるがいゝわ。ぢやあ、さよなら。だけど今夜は是非家にゐるんですよ、そしてキイゼエッタさんのお説教を聞くんですよ、そして一緒に祈

りませうよ、ね。お前もよく私の云ふ事を聞けば屹度いゝ事があるわ。お前のお母さんもお前も私なんぞも、信心が足りない方だつたのよ、私よく知つてるわ。ぢやあ、さよなら。』

## 一五

伯爵イワン・ミハイロキッチュは前大臣で自信の固い男であつた。その自信は、ずつと年若い頃からのもので、鳥が蟲を啄んで身を養ひ毳毛や羽毛に身を包んで空を飛ぶのが自然であるやうに、自分が給料の高い料理人の調理した高價な食物で身を肥やしたり、最上等の服を着たり、逸物の馬に牽かしたり軽快な馬車で乗り廻したりするのも、同じく自然であり本然的であると思つてゐたのである。なほ又種々の名義で政府から貰ふ金が多くなればなる程、勳章を受けたりする事が多くなればなる程、地位や身分の高い男女の社會に交際が廣くなればなる程、愈々それは自分にとつて名譽な事だと思つてゐたのである。

さういふ根本の信條に比ぶれば、爾餘の一切は一顧の價もないものと彼は又信じてゐた、どうならうとも毫も意とするに足りないものと信じてゐた。さういふ信念を抱いて彼は彼得斯堡に四十年の間生活をし仕事をし、それから大臣の地位を贏ち得たのである。

彼がさうした地位にまで昇れた重要な資格は、第一には彼が諸種の公文書の意味を理解す

る事が出来たり、諸法規の發布の次第を心得てゐたり、拙い乍らも分り易いそんな書類を自分で作成し綴字方を誤らずに書く事が出来たりする事であつた。第二には彼が堂々たる風采の所有者であつて、必要に臨んでは傲岸な、のみならず傍にも寄りつけないやうな厳格な様子を見せる事も出来、さうかと思ふと又必要次第で随分人の足元に匍ひ廻る事も出来る事であつた。又第三には彼が道義上にも政治上にも何等の主義も定見も持つて居らず、都合次第で誰とも妥協も出来れば分離も出来るといふ重寶な性質を具へてゐる事であつた。それで彼は何をするにも、上品な外觀を失はないように、又自家撞着を曝露させないようにと、たゞ夫れのみを心掛けた。其他の事は彼に取つては全く何の値打もなかつた、自分のする事が道義的であらうがなからうが、露西亞の爲めに又は全世界の爲めにならうがなるまいが、そんな事には彼は一切無頓着であつた。

彼が大臣になつた時は、誰も彼を實際偉い政治家だらうと思つた。數に於て少ない彼の味方や近親等のみならず、縁故の無い多勢の者も皆さう思つた。彼自身は素よりのことであつた。けれども少し時が経つて、彼が何の成績も擧げ得ない事になると、又彼同様に風采の好い無主義無定見の、彼同様に公文書を読んだり書いたりする事を心得た官吏連の爲めに、彼は生存競争の法則通りに排し除けられた。そして、彼が決して格別えらい人物でない許り

か、教育の足りない非常に褊狹固陋な自己本位な男である事、彼の意見などは保守派の新聞論説以上に出でないものである事が、誰にもありと分るやうになつた。彼を排除した矢張りつまらない連中に、彼が何の優る所もない事が明白になつた。彼自身もそれを感じざるを得なかつた。けれども毎年國庫より多額の金や勳章などを貰へるといふ彼の信念は、その爲めに何等の動搖をも感じなかつた。

伯爵イワン・ミハイロキッチは甥の話す一伍一什を、以前に官房吏員の報告でも聞く時のやうな恰好で聞いた。そして聞き終ると、それでは二通の紹介状を書いてやらうと云つた。一つは元老院控訴部の議員ユルフに宛てるものであつた。

『ユルフといふのは様々な評判のある男だが、併し兎に角立派な紳士だから。』と彼は云つた。『そして私には少し恩義があるから、出来る事ならやつて呉れるだらう。』

今一通は請願局の或る有力者に宛てるものであつた。フェドッシア・ピリュウコワの件は、ネクリュウドフに聞くと伯爵は大に氣乗りがした。ネクリュウドフがそれに就いては畏き邊りへ上奏文を書き度いと云ふと、伯爵は、此事は實際非常に感動す可き事であるから自分が機會を見て直接内奏してもいゝと云つた。けれども愈々さうしてやると請合ふわけには行かないと云つた。愁訴狀は正式に尋常な手續を経て提出するがよからう、併し機會があれば自分

が直接内奏してやらうと附加へた。

ネクリュウドフは伯爵の書いて呉れた二通の手紙を受取ると、叔母よりマリエッテに宛てたのと一緒に懐中して、直ぐそれぞれの方面へ出かけた。

第一に彼はマリエッテを訪ねた。彼は女を或る貧乏華族の娘として罪のないお轉婆時代に知つてゐた、其後官海游泳術に巧みな良人を持つた事も、その良人が或る甚だよくない事をしたといふ噂も聞いてゐた。自分が尊敬する事の出来ない男に頼み事をしに行くのが、今又彼には辛かつた。こんな場合にいつも彼の例である通り、彼は心に自分といふものが厭になつた、そして迷つた、頼まうか、それともやめてしまはうかと思つた、併し又頼む事に心を取り直した。彼方では此方を同じ仲間と思つてゐるが此方ではさうは微塵も思つてゐない連中に對して頼み事をするへ、まさ加減の外に、彼は又以前の陋習悪俗に逆戻りした感じを覺えないわけには行かなかつた。それははや既に叔母の許で感じた事で、今朝叔母と眞面目な事に就いて話をしてゐながら、叔母に調子を合はす可く巫山戯た口の利き方もしないではなかつた。長い間來なかつた彼得斯堡は、何事につけても彼を物質的に挑り精神的に鈍らさうとした。見る物聞く物一切が綺麗で便利でよく整つてゐて、殊に人間が道義などと云ふ事に頓着しないので陽氣で、都會生活の氣樂さと呑氣さは此の彼得斯堡に於て取分け著しく思はれるのであつた。

身なりも小綺麗に、さつぱりした往來の馬車屋は、客となつた彼を取扱ふのも丁寧なもので、矢張り掃除の行届いたコンクリートの道の上を、同じく小綺麗に、さつぱりした巡查などを兩側に見て、美々しくきちんと飾り立てた家々の前を走つて、マリエッテの家へと彼を運んだ。

家の前には遮眼革を嵌められた英國産の馬が二頭並んでゐて、その牽いてゐる車の馭車臺の上には顔の半分程も頬髯を生やした馭者が、同じく英國風の上等の役服を着込んで得々として鞭を手にして腰かけてゐた。

並外れに綺麗な役服を着た玄關番が戸口をあけると、内には尙一層綺麗な役服を着て立派に櫛を入れた頬髯を貯へてゐる三太夫と、新しい清潔な制服を着た從卒とが控へてゐた。

「將軍閣下は御面會なさりません、奥方も御面會なさりません。」

ネクリュウドフは叔母よりの手紙を三太夫に渡し、名刺を出して横にある小さい臺の前に行き、その上に載せてある訪問者の來意を認める帳簿をあけて、今面會出来ないのが惜しいといふ旨を書かうとした。すると三太夫は奥の階段の方へ飛んで行き、玄關番は外の階段に走り出て「お出まし」と呼び、從卒は直立して兩手の小指をスボンの外部の縫目に沿へて着

け、出て来る中柄のすなりとした貴婦人に注目の禮の姿勢を取つた。女はその位品には幾らか少し不似合な急ぎ足で奥の階段を下りて來た。

マリエッテは羽毛のついた大きい帽をかぶつて、黒い服を着け黒い肩衣をかけ黒い新しい手袋をはめ、顔は面紗に包んでゐた。

ネクリュウドフを見ると面紗を上げて美しい顔を出し、訝しげに目を輝かして昵と見入り、「おや、ネクリュウドフ公爵様ぢやなくつて？」と快活な聲を出した、「まあ、私、本當に……」

「私の名まで覚えてゐて下さつたのですか。」

「覚えてますとも、あなた。私は妹と二人でああなたに惚れてたぢやありませんか。と彼女は佛蘭西語で云つた「だけど、あなた、何てまあお變りになつたでせうねえ。あゝ、私惜しいわねえ、これから出かけなくつちやならないんだもの。それとも、少しの間、お話しませうか？」決しかねてさう云つて立止つたが、壁に掛けてある時計を見て、「いえ、いえ、それは出來ないわ。私これからカアメンスキイのお母さんのお宅にお悼みに参りますの。あのお方そりや落膽していらしつてねえ。」

「カアメンスキイつて誰です？」

「あなた未だ、此の話お聞きにならなくつて？ あのお方の息子さんが決闘でお亡くなりにな

りましたのよ。ポオゼンと云ふ男と決闘してね……。あなた、一人息子なんでせう、……そりや本當にお可哀さうつたらありやしないわ。そりやお母さんのお嘆きと云つたらねえ……。」

「あ、それですか、聞きました。」

「だから私出かけますわ。でも明日いらつしやいな、それとも今夜にでもね、どうぞ。」と云つて彼女は、いそいそと戸口に出た。

「今夜は参れませんか。」と彼は答へて一緒に出て來て、「ですが私すこしあなたにお頼みがあるんです。」さう云つて彼は階段先きに列んでゐる馬を眺めた。

「それはどんな？」

「爰に私の叔母からの手紙があります。」と云つて彼は其處にある先刻三太夫に渡した大きい紋章入りの小形の封筒を彼女にやつて、「これに一切書いてありますから。どうぞ。」

「あの何でせう、私が公務に就いて良人をよく動かすつて、さう叔母様が思つておいでになるのでせう。そりや違つてよ。私何も出來やしないわ、そして私そんなに關係するのは嫌ひですもの。でも叔母様やあなたの爲めならそりや例外よ、そりや勿論ですともねえ。體どんな事なの？」

「監獄に入つてゐる女が一人あるんです、それは病氣なんです、そして罪はないんです。」

「何といふ人？」

「シュストオワ、——リティア・シュストオワと云ひます。手紙に書いてありますから。」

「いゝわ、出来るだけの事はやりますわ。」と云つて彼女は日に輝いてゐる馬車に身輕に打乗り、ふんわりと柔かに脹らましてある褥しとねに腰かけてバラソルを開いた。三太夫も馭者臺の隣に飛乗つて馭者に馬を出せと合圖をした。馬車は動き出した。併し其時彼女はバラソルの縁で馭者の背中を軽く觸つた、すると英國産の美しい駿馬は頸を上げ乍らたちちと止つた。

「屹度いらつしやいな、どうぞね、だけど御自分の用の爲めでなくよ、ね。」さう云つて嬌こゝろと笑つた、その微笑の魅力は彼女自ら確信のあるものであつた、そして芝居の一齣が終つて幕が下りるやうに面紗フェースをおろし、「ぢやあ、いゝよ。」と云つてバラソルの縁で又馭者の背中に合圖をした。

ネクリュウドフは帽を脱いだ。種馬の逸物は鼻息盛んに鋪石を、かつかつ蹄で蹴つた。馬車は凸凹でこぼこのある道を新しい車輪で軽らかに撫で乍らさつと出て行つた。

ネクリュウドフはマリエツテと交へた微笑を思ふと、頭を振つて自分を咎めた。

「さうかも知れないと思ふより早く、おれは又もや引摺り込まれるところなのか。」と思つて彼は心中の分裂を感じた。それは自分が尊敬しない人々に氣に入らねばならないといふ必要から出てゐるものではあつた。

それから今度は何處に行かうか、何處を後にしようかと、二重な道順を取らないやうに考へて、元老院に行つた。元老院では官房に通されると、立派な其處の大廣間に服装のさつぱりと美しい、物事に馬鹿に丁寧な多勢の官吏が集つてゐた。

はやマスロオワの愁訴状は受理されてゐて、官吏等が云ふ通り議員ヲルフの許に廻つてゐるのであつた。ヲルフといふのはネクリュウドフが叔父に貰つた手紙の宛名の其人で、件の愁訴状を審査し報告せねばならない役目の當人であつた。

「今週中に會議が一度ありますが、マスロオワ事件は多分まだ審理にかからないでせう。併し特別に願ひになつてみたら或は此の水曜にやつて貰へさうなものですね。」と官吏の一人は云つた。

ネクリュウドフは其處で尙ほ色々必要な都合など尋ねて其返答を待つてゐる間に、件のカアメンスキイといふ若い男の殺された決闘の話が官吏達がしてゐるのを聞いた。詳しい事は

彼は此處ではじめて聞いたのであるが、話は彼得斯堡一ぱいの人を緊張させてゐるのであつた。それは何家かで數人の士官が牡蠣など食つて例の通り盛んに飲んでゐる時、カアメンスキイ所屬の聯隊を悪口した者があつたので、カアメンスキイは其男に嘘を云ふな、嘘吐き奴と罵つた。すると其男はカアメンスキイを一つ撲つた。と其翌日決闘となつて、カアメンスキイは相手の彈丸に中つて、二時間後に死んだのである。ポオゼンといふ相手の男は介添人と共に捕つて衛兵本部へ送られたが、二週間経てば放免される事になつてゐるのである。

元老院を出てネクリュウドフは請願局に行き、其處に勢力のあるヲロビエフ男爵を請願局構内の壯麗な官邸に訪ねた。玄關番と三太夫は嚴格な口調で、面會日以外は男爵は面會はされないといふ。ネクリュウドフは手紙を渡して其處から議員ヲルフの宅に向つた。

ヲルフは朝の食事を済ました許りのところで、例によつて胃の消化を助ける爲めに葉巻を燻らしながら室内を歩いてゐたが、其まゝ其室でネクリュウドフを迎へた。ウラディミール・ワツリエキッチュヲルフはチャアルスキイ伯爵の云つた通り成るほど實際立派な紳士で、彼自らもそれを何よりの誇りとしてゐた。そしてすべての他の人々をいつも眼下に見てゐた。彼が其の「立派な紳士」といふ事を鼻にかけるのも道理なわけで、彼が以前より絶えず望んでゐた通り芽出度の地位から尙ほ芽出度の地位へと、とんとん拍子に進んで來たのは、全く其の

「立派な紳士」たる資格の資であつた。金持の女と結婚して年々一萬八千ルウブルの收入ある財産を手に入れ、そのお蔭で又今の元老院議員の地位にも攀ち登つたのである。彼は自分を單に「立派な紳士」とらゐるに思つてゐるのみでなく、尙ほ又武士氣質の廉直公正な男子を以て自ら許してゐた。その廉直公正とは彼が個人よりの賄賂を受けないといふ事であつて、旅費だの移轉料だの地代だの其他色々な報酬などを請求するのは、少しも其の廉直公正を傷ける所以ではなかつたのである。又自分に惚れてゐる女房や其妹の身代などを掻き上げるのも、彼は少しも恥づべき事とは思はなかつた、むしろそれは一家を惻々整理する所だと思つてゐた。

彼の一家は彼の云ひなり次第になる女房と、その妹と、これの財産も彼の手中のもので、彼はその所有地を賣拂つて其金は自分の名義で銀行に預けてゐるのである、それから甚い醜い小心の娘と、それだけであつた。その娘は寂しい陰氣な日を送つて、たゞせめてもの慰めにアライネ女史や又はカタリイナ・イワノフナ伯爵夫人の許で催されるお説教に近頃は行くだけであつた。

ヲルフの男の子は人物の良い若者であつたが、十五歳の頃から口髭が生えて、酒も飲めば女も買ふといふ方で、二十歳までそんな放縱生活をして家にゐた揚句、何處の學校に入つて

も課程を卒へる事は出来ず、悪い社會に落ち込んで、借金はする、親父に迷惑はかける、といふ有様なので、とうとう追ひ出されてしまつたのである。親父は一度は息子の借金二百三十ルウブルを拂ひ、これが最後だから若し今後も行ひを改めないなら勘當すると云ひ渡した。併し息子は改めなかつた、そして又千ルウブルの負債を拵へた、そして家にゐると煩さくても子でもないと親父に向つて云ひ放つた。そんなら何處へなりとも勝手に出て行け、以後は綺麗に諦めた、家族の誰彼も最早その男の子の事を敢て口にする者はなかつた。それでヲルフは一家を立派に整理したと十分に信じてゐるのであつた。

ヲルフは室内往復の運動を一寸中止して、親切さうな併し物事を輕々しく視るやうな微笑を浮べてネクリュウドフに挨拶した。その微笑は彼が漫ろに自己の優秀を意識する時にいつも見せる表情であつた。チャアルスキイ將軍よりの手紙を読み終つて、ネクリュウドフに向ひ、

「さ、どうぞ、お掛け下さい。そして私は歩き乍らお相手する方が勝手がいいんですから、この儘で失禮します。」と云つて彼は兩手を後ろに廻はして腰の上のせ、雄大嚴正な様式にしつらへてある其室の一隅から他隅へと行つたり來たりした。「あなたと知合ひになれて私

も嬉しく思ひます、無論イワン・ミハイロキッチ・伯には私も何事なりともして悦んで貰ひ度いといつも思つてゐます。」

さう云つて彼は青い煙を吐きながら、灰の落ちないやうに用心して葉巻を口から取つた。「私はたゞ事件を出来るだけ早く審理して戴き度いと思ひまして、それをお願いしたいのです、と云ふのは被告が西比利亞にやられる事にでもなれば、一刻も早くやられる方がましなんですから。」

「さやう、さやう、ニシュニイノヴゴロッドの一番船で行くんですな。」とヲルフは、ぞんざいな軽い微笑を見せて云つた。彼は人に何か云ひかけられると、いつもそれを豫めちやんと知つてゐるのであつた。「被告は何と云ふ名でしたつねね？」

「マスロオワです。」

ヲルフは卓の方へ行つて、公書類を澤山挟んである紙挟みの中の一枚の紙を見た。

「さやう、マスロオワですな、その通りです。よろしうございます、同僚にさう云つて此の水曜に審理するやうに計らひませう。」

「すると私は辯護士に其事を電報打ちませうか？」

「辯護士をお頼みになつてゐるんですか。それが何の役に立ちませう。併し、それはお呼び

になるともならないとも、あなたのお勝手ですよ。』

『控訴の理由が少し薄弱かとも思ふものですから。』とネクリュウドフは云つた。『併し私はあの判決が誤解に基いて成立してゐる事は、書類を見れば明かに分ると思ふのです。』

『成る程、成る程、さうかも知れませんが、だが併し元老院は事件を根本的に細かく點検はしませんよ。』とラルフは屹とした顔つきをして云つて、葉卷の灰を用心深く見守つた。『たゞ元老院は法の適用と解釋が正しく行つてゐるかどうかを検するだけなんです。』

『此の事件は併し例外だらうと思ひますが。』

『如何にも、如何にも。一切の事件が例外なのです。我々はたゞ我々のせねばならない事だけをするので、それが一切です。』葉卷の灰はまだ落ちなかつた、併し割れ目が出来て危なさうになつた。『あなたは此地には滅多においでにならないのですか。』さう云つてラルフは葉卷を灰の落ちないやうに持つた、併し灰は愈危くなつたので、彼は用心してそつと灰皿の上を持つて行つて落した。

『カアメンスキイの一件は何といふ悲痛な事せう。』と彼は云つた。『あつたら立派な若者でしたのに、それに一人息子だつたのですよ。殊に母親の身になつてみたら。』と其地で其時誰もが云つてゐたあらゆる文句を繰返した。それから彼は伯爵夫人の話をしたり、その新し

い信仰熱に云ひ及ぼしたりした、けれどもそれを非難したり賛成したりする事は「立派な紳士」としての資格には不要だと思はれたので何とも云はなかつた。そして鈴ベルを押した。

ネクリュウドフは暇を告げた。

『御都合がよかつたら、いつか食事に来ませんか。』とラルフはネクリュウドフに握手を求めながら云つた。『この水曜にでもどうです。するときは、つばりした事をお答へ出来ようと思ひますが。』

それで其日はもう遅おそかつたので、ネクリュウドフはすぐ叔母の家に歸つた。

## 一七

叔母の家の夜食は七時半で、その夜食の方法はネクリュウドフはまだ知らなかつた。給仕人は食物を卓の上に置くのと直ぐ出て行つて、あとは食べる人に一切任せるのであつた。男等は強者として女等の餘計な骨折を省いてやるべく、女達にも自分にも食物を取つてやつたり酒を注いでやつたり一切の世話をした。そして初めの分が平らげられて終ふと、伯爵夫人は電鈴ベルを押した。給仕人達は直ぐ靜かに入つて来て後あとを片付け、ナイフやフォークを取り替へて次の料理を運んだ。食物も酒も上等の品ばかりであつた。明るい大きい料理場には佛蘭西



人のコック頭が、白い服を着た二人の助手を使つて働いてゐた。食事に就いてゐる方は六人で、伯爵夫婦に、卓に肘を突いてゐる陰気な顔の近衛士官たる息子、それからネクリュウドフ、佛蘭西人の朗讀の女教師、それに田舎から出て来た伯爵家所有地の管理人であつた。此處でも話は又決闘の事になつた。軍服の名譽を傷けなかつたとの理由から誰もポオゼンには鋭い非難の聲を放たなかつた。伯爵夫人だけはそんな事には頓着しない平素の調子でそれに反對した。

「皆が仲よく集つて飲んでるかと思ふと、直ぐ立派な若者が殺される事になるなんて、私は何處迄も反對だわ。」

「それは私には分らない。」と伯爵は云つた。

「あなたは私の云ふ事なら、いつもお分りにならないぢやありませんか。」と云つて夫人はネクリュウドフに向ひ、「誰にも私の云ふ事は分るんだけど、伯爵にだけは分らないのよ。私はね、カアメンスキイのお母さんがお可哀さうでね。そして殺した方は勝つたといふので得意になつてゐるなんて、私そんな事大嫌ひさ。」

すると其時まで黙つてゐた息子はポオゼンの肩をもつて、激しく母を攻撃した、士官として外にやり方があるもんぢやない、決闘に應じなからうもんなら砲隊の名譽裁判で追ひ出さ

れてしまふに定つてゐると云つた。

ネクリュウドフは論争に加入らないで聞いたが、自分も嘗て士官だつた経験から、彼の今云ふ事に賛意こそ表さないが其理由を諒とした。がネクリュウドフはポオゼンといふ其士官と、自分が監獄で見た、喧嘩の相手を殺したために懲役の宣告を下されたといふ若い美男とを心で比較してみないではゐられなかつた。

でネクリュウドフは其話をした。すると叔母ははじめの中は甥の意見に賛成したが、間もなく餘の者と同様に口を噤んでしまつた。ネクリュウドフは何か皆の機嫌を悪くするやうな事を云つたんだなと自分で感じた。

大廣間には、何か演説でもあるかのやうに、彫物をした高い凭れのある椅子が澤山列べられ、大きい卓の前に臂掛椅子が一脚と、水壘を載せた小さい卓が一つと説教者の爲めに配置されてゐた。食事が済むと直ぐキイゼエッタアの説教を聞くべく多勢の客はやつて来た。家の前には立派な馬車が幾臺も列んだ。美々しく飾りつけられた大廣間には、絹や天鵝絨や笹縁の服の、腰には襷のあるのや無いのを着て髪を巧みに縮らした女達が先づ席に着き、文武官の紳士達が其間に腰かけ、なほ後ろの方には身分の低い男が五人許り控へた、それは玄關番や小賣商人や三太夫や馭者であつた。

はや髪には霜の置き初めた併し丈夫さうなキイゼエッタアは英語で喋つた、そして鼻眼鏡をかけた瘦せぎすな若い娘がそれをすらすらと巧みに通譯した。

我々の罪は非常に重く随つて其罰は又非常に大きいから、我々は其積りで生きて行くより外はない、とキイゼエッタアは云ふのであつた。

『親愛なる我が兄弟姉妹の皆さん、我々はたゞ我々自身の事を考へてみるだけでも、我々は何を爲しつゝあるか、如何にして生活しつゝあるか、如何に我々は最愛の神を怒らしつゝあるか、如何に基督の苦惱の基をなしつゝあるか、それを考へてみるだけでも、我々が赦さる可きものでない事、我々には何等の遁路もない事、何等の救助も有り得ない事、我々が破滅の淵に臨んでゐる事が分るであります。破滅とは怖ろしい事ではありませんか。永劫の苦患が我々を待つてゐるのです。』と彼は聲を震はして泣くやうに云つた。『我々は救はれるでせうか。皆さん、我々は此の怖る可き境涯より脱出する事が出来るではありませんか。焔は既に我々の棲む家を包んで居るのであります、そして遁る可き一條の路もありません。』彼は口を噤んだ。本當の涙が彼の頬を傳つて流れた。

八年以來彼は自分の大好きな説教の其個所に来る毎に、必ず鼻が塞り喉が慄へるのを覺えた、そして必ず涙が流れるのであつた、そしてさう流れる涙に彼は尙一層自ら感激するので

あつた。室内には啜り泣きの聲が彼方此方に始まつた。剪嵌細工の卓の傍に腰かけてゐた伯爵夫人は、兩手で頭を支へて肩をびくびく震はした。馭者は愕いて説教者の顔を見やつた、それは自分が馬車の轅で彼に衝突して、彼がそれを避けようとしなかつた場合のやうであつた。他の多くの者も伯爵夫人のやうな恰好をした。父によく似たラルフの娘も、飾しこんで來てゐたが、跪いて顔を兩手で蔽うた。

急に説教者は顔を上げて、本當らしい微笑を見せた、それは役者が舞臺の上で嬉しさを出さうとする時の微笑にそつくりであつた、そして媚びるやうな甘つたるい聲で、又喋り出した。

『けれども併したゞ一つの救済があるのです。それは安らかな悦ばしいものであります。即ちその救済は我々の爲めに流された所の神の一人子其人の血であります、神の一人子たる其人は我々に代つて身を苦みに委ねたのであります。我が兄弟姉妹たる皆さん、その惱みと其の血とが我々を救ふのであります。』そして又涙に喉をつまらせながら、『我々は神が我々に其一人子を下し給ひて人類の救済をなし給ふ事に感謝を捧げるのであります。その神聖な血たるや……。』

ネタリ、ウドフはもはや我慢がしきれなくなり、そつと立つて顰めながら其室を出て自分

の室へ行つた。

五二四

一八

翌日ネクリュウドフは着物を着更へて出かけようとしてゐると、三太夫がモスカウの辯護士ファナアリンの名刺を取次いで來た。ファナアリンは自分の用で上京したのであるが、マスロオワ事件が直ぐ元老院で取扱はれるやうならそれにも出席しないと思つたのであつた。ネクリュウドフの打つた電報は行違ひになつたのである。彼はネクリュウドフからマスロオワ事件再審の日とそれを取扱ふ議官の名を聞くと、微笑を浮べて、

「元老院の三幅對が揃つたわけだな。ユルフは彼得斯堡式の役人で、スコヲロドニコフは學究肌の法律家、それからベエ、これが實際向きの法官で隨つて他の者よりも一等働きのある男です。」と云つた。「このベエが一等見込があります。それから請願局にはどうしましたか？」  
「これからヲロビエフ男爵を訪ねに出かけるところです、昨日は會へませんでした。」  
「よろしうございます。一緒に出かけませう、其家までお送りませう。」

そして二人は玄關まで來ると、三太夫は又マリエツテより次の通り全部佛蘭西語で書いた手紙をネクリュウドフに渡した。

「私はあなたのお氣に入るやうにと思つてね、自分の主義とは違ふのですけれど、あなたのお最負の人を放免してやるやうにと良人に頼みましたわ。直ぐ其人は放免される事になるんですつて。良人が其處の長官に手紙を書いてやりましたの。いらつしやいな、御自分の用の爲めでなくよ、ね。私待つてよ。Mより。」

「其家までお送りませう。」と辯護士は出口の段の上に来てから又さう云つた。辯護士の乗つて來た大へん綺麗な貸馬車は直ぐ玄關先きに横付けになつた。

辯護士は馭者に行先きを告げると、威勢のいゝ馬は直ぐ逸散に走り出して、間もなくヲロビエフ男爵の家に着いた。幸ひ男爵も在宅であつた。取付の部室には首の著しく長い咽喉佛のぼたごの高い制服姿の年若い役人が一人と貴婦人が二人ゐた。

「誰方様で？」と其役人は貴婦人の傍より離れて輕快に丁寧にネクリュウドフの前に進んで來て尋ねた。

ネクリュウドフは自分の名を告げた。

「それでは男爵はあなた様のお噂をしておいでになりました。直ぐお會ひでございませう。」すると其奥の室から秘書官が、喪服を着けた今一人の貴婦人を連れて出て來た。その婦人は甚く泣いたらしい様子で、涙を隠す爲めに面纱メシカを急いで下した。

「さ、どうぞ此方へ。」と云つて年若い役人はネクリウッドフを請じ、軽く軟かな歩き方で事務室の入口に行き、扉を開けて自分は其横に立止つた。

ネクリウッドフは其室に入ると、直ぐ頑丈さうな中年の男が目についた。フロックを着た髪を短かく刈込んだ其男は大きい卓の前に臂掛椅子にかゝつて、何やら満足さうな顔つきをして見るともなしにたゞ前方を見てゐたが、その白い頬鬚と口髭との間の赤い顔色が著しく人の目についた。その正直さうな顔にはネクリウッドフが入つて来ると直ぐ親切さうな微笑が出た。

「あなたにお目にかゝつて、私大へん嬉しいんです。私はあなたのお母様の昔の友達でございます。あなたにも、あなたが極く小さい頃、それから士官でのおいでの際お目にかゝりましたな。さ、おかけなさい。さ、お話承りませう、何かお役に立つ事なら一つやつてみませう。」そしてネクリウッドフがフドッシアの話をする間にも、さうです、さうです。」と頻りに打領きながら、「承りませう、承りませう。何もかもよく分りました。さうです、さうです、それは實際氣の毒な話です。それで愁訴状はお出しになつたのですか？」

「書いて來ました。」と云つてネクリウッドフは衣籠から愁訴状を取り出し、「ですが私はあなたに第一にお願い致し度いと思ひます事は、どうか此事件には特別に注意を拂つて戴き度い

と思ふんです。」

「よろしうございます。私が自身で直接に捧呈致しませう。」さうは云ふが其の陽氣な顔には同情らしい影は見えなかつた。「實にそれは氣の毒千萬ですな。勿論女の方はまだ子供でせうし、それに男が少し手荒に取扱つたのですな、だから女がそれを拒絶きつぱつけたのも無理はありませんよ、それでも其後二人睦なごじくなつた時ときもあつたんですね。よろしうございます、これに就いては一つさう申上げる事にします。」

「ミハイロキッチ伯爵も自分が内奏してやらうかとも云つて……。」

ネクリウッドフがさう云ひかけると、男爵の顔色は見る間に變つた。

「それぢやあ其愁訴状は矢つ張り役所にお出しなさい、すると私は私の方で出来るだけの事はしますから。」

その時件の年若い役人は、其自慢らしい軽い歩き方をして又入つて来て、

「あの婦人の方が今少しお話し度いと云つてゐられますが。」

「ぢやあ呼んで來給へ。何て斯うも泣き付かれる事だらう。たゞあの涙だけでも乾かしてやれるといふんだが。出来るだけの事はしてゐるんだが。」

その女は入つて來た。

「あの男が娘を追ひ出しませんやうに、どうぞそんな事お許しなさらなさいで下さいますし、それをお願ひし度いのでございます、でないと……。」

「それもあなたにさう云つたぢやありませんか、許さない事にしますよ、しますとも。」

「男爵様、どうぞ此の母をお助け下さると思召して……。」

女は男爵の手を取つて接吻をしようとした。

「え、え、さうします、何でもして上げますよ。」

女が出て行くと、ネクリュウドフも暇を告げた。

「出来るだけの事はします。司法大臣に渡りをつけませう、そして大臣の返事が来てから此方では出来るだけの事をやりませう。」

ネクリュウドフは其處を出て役所の方へ行つた。

## 一九

彼得斯堡監獄の囚徒の運命を掌中に握つてゐるのは獨逸出の男爵たる老將軍で、髪の白くなるのも厭はず長い間奉公してゐる。併し早や子供のやうになつたと云はれてゐる多くの勳章の所有者であつた。併しそんな多くの勳章の中で彼は平素はたゞ白十字章だけを胸の鈕の

穴につけて佩用してゐた。その勳章を得たのは高加索で勤めた功勞によるもので、それから彼は尙ほ波蘭其他に於ける勤務を經、最後に今の地位に達して多額の俸給を受け立派な邸に住ひ大きな榮譽を荷つてゐるのである。彼はいつも「お上」の規則を守る事が嚴で、それを自ら私かに誇りとしてゐた。さう云ふ諸規則は非常に重大なものであつて、此世の他の一切の事物は變改されるとも、そんな諸規則だけは微動だもしないと云ふのは彼の信念であつた。

ネクリュウドフの馬車が其將軍邸の前に來かゝると、其家の塔の上の精巧な鳴物仕掛の時計は「神にわれ誓ひまつる」の譜を奏した、そして二時を報じた。

老將軍は自分の下役の者の弟たる若い術士と二人、薄暗い廣間の切嵌細工の小さい卓に向合つて腰かけ、紙の上に一枚の皿を廻はしてゐた。術士の濕々した華奢な指は老將軍の皺だらけなごつごつした指と組み合つて、一切の字母を刷つてある紙の上に伏せた皿と一緒に引き廻はした。人間の魂は死後にはどんな風にして相知る事が出来るかといふ老將軍の間に皿は今答へるところであつた。「魂は相互に知り合ふ事が出来る」とは、皿が今ジャンダルクの魂を藉りて紙上の字母によつて答へた事で、それは既に書き留めてあるのであつた。

給仕がネクリュウドフの名刺を持つて入つて來た時は、皿はその上に來て、次にA、それからSに行つて止り、何方へ動くともなくさ迷つた。それは將軍の考と術士の考とが違つた

からで、將軍はLに行かねばならないと思つたのである、それは「魂は相互に知り合ふ事が出来る、併したゞそれは地上の一切の汚れより脱出した後に於てのみ出来る」とか、又は夫れと同じ意味の事をジャンダルクが答へさうなものといふ考だつたのである。それにはLが來なければならぬので、Lが來ればPoteで「後」となるのである。併し衛士は次の字母はWでなければならぬと思つた、それは、人間の魂はエエテルが形を具へたやうな或物より放射する光によつて(Downward)相互に知り合ふものであるといふ考であつた。將軍は陰氣さうに眉を寄せて屹と手のさを眺め、皿が自らLの方へ動いてゐると信しながら、知らず識らず自分で其字母の方へ引いてゐた。併し薄い髪を耳の後ろへ撫でつけた血の氣の少い若い衛士は、弱々しい目で室の暗い一隅を見やりながら唇を慄はしつゝ皿をWの方へ寄せようとした。

將軍は中止せねばならなくなつたのを苦々しく思ひながら、少しの間黙つゐて、それから名刺を取り、鼻眼鏡をかけ、腰の痛みを訴へつゝ立上り、硬くなつてゐた指を揉み擦りして節節を延ばした。

「事務室に通すがよい。」と給仕に云つた。

「閣下、私一人で先きは致しませう。」と衛士は自分も立上つて云つた。「私は今靈の現はれ

を感じてゐますから。」

「よろしい、さをなさるがよい。」と云つて將軍は軍隊式の歩調を取り、様子にも威嚴を保つて事務室へ行つた。

「これは、これは、ようお目にかゝれましたぢや。」と將軍は粗野な聲を出してネクリュウドフに云ひかけ、卓の傍の椅子に掛けるやうに勧めた。「彼得斯堡に來なすつてから長くなりまするかな？」

ネクリュウドフはつい一兩日前に來た許りであると答へた。

「公爵夫人は御壯健でおいでなさりまするかな、御母堂は？」

「母は亡くなりました。」とネクリュウドフは答へた。

「あゝ、さうでしたかな。それはどうも惜しい事ぢや。拙者の悴はあんたを知つちると云つて居りましたぞ。」

將軍の息子は父と同じやうな仕途を辿つて、その身に附せられてゐる職責を得々として誇りとしてゐた。

「拙者(わし)はあんたの御親父様と一緒に役を勤めて居りましたぢや。二人は同輩で親友でな。時にあんたは？ 勤めてござるかな？」

「いえ、私は仕官はしません。」

將軍は不賛成らしく頭を振つた。

「閣下、私はあなたにお願いがあるのです。」

「お、それは何なりと仰しやるがよい。」

「若し私の願が不當なものでしたらお赦し下さい。けれども、これは何うしてもあなたに申上げずにはゐられないのです。」

「どんな事ですか。」

「グウルケキッチュといふ男が此地の監獄に入つてゐるのです。そして其母親が面會をし度い、少くとも書籍を差入れたいと云つてゐるのです。」

將軍は賛成とも反對とも云はず、たゞ眉を寄せ頭を傾けて物を考へるやうな恰好をした。併し彼はたゞ規則に適ふやうにさへ返答すればよいと思つてゐるので、ネクリュウドフの願ひに就いて何も考へるでもなければ、又それに興味を覺えるでもなかつた。たゞ何も考へないで氣を休めようとしてゐるだけであつた。

「それはな、拙者のやることぢやござらんで。」と將軍はやつと口を開いた。囚徒の面會に就いては「お上」と「お下」の規定がありますので、それで許されとることだけはよいんです。書

籍のことはな、圖書部を設けてあつて、囚人共の讀んでよろしい本は備へてやつてありますぞ。」

「それはさうでせう。併し其男は勉強の爲めに其方面の本が要るんださうです、研究したがつてゐるのです。」

「それを本當と思ひなさるな。」と云つてから將軍は少し黙つた。それから又、「研究の爲めではござらんど。それは騒動を起す爲めぢや。」

「併し囚徒だつて、不幸な破目になつて、何か事をして時を潰さうと思ふのは當り前ぢやありませんまいか。」

「いつも何のかのと不平ばかり申立てまするぢや、拙者はよく知つて居りまするて。」

彼は囚人の話をするのに、人間ではない者の話をするやうな口調であつた。

「拙者の方の監獄ではな、何から何まで囚人どもの便利を計つてやつて居りまするぢや、斯ういふ監獄の取扱ひは他所には滅多にござるまい。」と云つて、彼は尙ほくたくだしく、所謂囚人に與へられてゐる各種の便利や好遇を一々細かに述べ立てて證明する如く、さういふ設備萬端の主要目的は、畢竟囚人一同に愉快な俱樂部でも提供してゐるかのやうな所にあるらしく語りつゞけた。

「以前は成程こちらも些と粗暴でしたがな、今ぢやあ立派になつて居りまするぢや。食事にも三皿つきまするぞ、いつも屹度肉の料理が一品はある、獨逸ビフテキか、さもないとカツレツ、又日曜には四皿ぢや、美味い物を食はせて居りまする。神のお蔭でござりまするわい、露西亞人は誰も皆美味い物を食べられまするからなあ。」

多くの老人の例に洩れず、將軍も自分の意見はいつも確と一定してゐるものとして、同じ事を幾度も幾度も繰返して述べ、囚人等のみがいつも我儘勝手で不心得で感謝といふ事を知らないと、證據でも擧げるかのやうに云つた。

「宗教上の書籍も彼等には當てがつてありまするぢや、古い雑誌もやつてありまするぢや、兎に角に相當な書籍を集めて圖書部を設けてやつて居りまするぢや。だが彼等は滅多に讀みませんでな。初めの中は幾らか氣が向くらしうもござるがな、すぐと何ぢやて、新しい本は頁を切りもせず、古いのは手も觸れないで投げ出して居りましたな。拙者共もな、」と將軍は妙に一種の微笑を洩すかのやうな顔をして、『よく試しに紙の切れを挾んで置いた事もありませんが、後で見ても矢張り其儘挾まつて居りまするぢやて。書くことだつて禁じられては居りませんぞ。』と將軍は尙ほ云ひ續けるのであつた。『石盤や石筆も當てがはれて居りまするし、それに書き物などして氣を慰めてもよいのぢやがな。そして消しては又書き又書き

すればよいのぢやが、それもしませぬて。いや、彼等の飽き易い事は早いものでな、はじめのうだけ物珍らしさうにしまするが、直ぐともう飽き飽きして抛り出して見向きもしませんぢや。』

ネクリュウドフは將軍の老耄れた腹れ聲を聞きながら、その骨張つた指の節だの光澤の失せた目だの、白くなつた眉だの、すべすべに刺つた尖つた顎の制服の襟に載つてゐるのだの、白十字章だのを見やりながら、さう喋り立ててゐる言葉に一々相手をして是非を明かにしてやる事の無駄なのを思つた。けれども尙ほ一度別な事で當つてみようと思つて、彼はシュストオワの事を尋ねてみた、それは既に放免の命令が出たといふ報知を彼は今日得てゐるのであつた。

「シュストオワとな？ シュストオワと仰しやるかな？ どうも彼等を一々名まで覚えて居る事は出来ませんぢや。多勢の事だ。」と將軍は、覺えきれない位に囚人の多いのを腹立たしがらうな調子で云つた。そして鈴を鳴らして書記を呼んだ。

書記が来るまでの間に彼はネクリュウドフに仕官をするやうにと勧めた、そして身分のある者は、特に國家の要職に參與せねばならないと云つた。

「拙者を御覽なされ、此の年で御奉公して居りまするぢや、力のある限り勤めまするぢや。」



入つて来た書記は目に落着きのない瘦せた弱々しい男で、シュストオワといふ女は一人居るが、其女に關する何の沙汰の書附けもまだ来てゐないと答へた。

『命令書が下りますれば直ぐ其日にも出してやりまするぢや。止めはしませんわい。彼等が居て呉れると云うて何の拙者共の仕合せでござらう。』さう云つて將軍は又微笑を浮べようとしたが、その皺だらけな顔はたゞ妙に拙く引歪んだのみであつた。

『さよなら。』と云つて將軍は尙ほ又續けた。『よう訪ねて下さつた。今後も又来て下され。だが拙者はあんたの爲めを思ふから云ふのぢやが、監獄なんぞに入つてゐる奴等に係り合つては宜しくありませんぞ。罪の無い奴は居りませんぢや、皆が皆やくざ極まる奴等許りぢや、拙者はよく知つて居りますでな——』それは疑ふ可く寸分の餘地もないといふやうな調子であつた。『そして、何よりも先づ官途にお就きなされ。皇帝陛下は立派な人材が御入用で居らせられまするぢや、國家の爲めにもな。考へて御覽なされ、若し拙者だのあんたのやうな人だのが皆仕官を欲しないとしたら何うぢやらう、さうしたら何うなりまする事ぢや。皆がたゞ現状を非難する許りで、政府に何の力も添へて呉れなかつたら何うぢやらう?』

ネクリュウドフは深い溜息を洩して謙遜な態度で腰を屈めて禮をし、將軍の差し出した骨張つた頑丈な手に握手をして其室を出た。

將軍は不満さうに頭を振り脊伸びをしてから、又前の薄暗い廣間へ行つた。はや術士は、ジャンダルクの魂より受けた答を紙に書き留めて將軍を待受けてゐた。將軍は鼻眼鏡をかけて讀んだ、『人間の魂は相互に知り合ふ事が出来る、それはエエテルが形を具へたやうな或物より放射する光によつて。』

『ああ、さうか。』と云つて將軍は満足さうに云つて目を閉ぢた。『しかし其光が誰の場合にも同様なものであつたら、何うして相知る事が出来る?』さう云つて彼は再び卓について腰をかけ、自分の指と術士の指とを組合せた。

\*

\*

\*

\*

ネクリュウドフの馬車は彼を乗せて直ぐ通りに出た。

『旦那、あすこは何うも退屈でやりきれねえ處でござえましたな。』と馭者は云つた。『手前は旦那を残して行つちまはうかと思つた位でござへしたぜ。』

『さうだ、退屈だつたよ。』とネクリュウドフも賛同した。そして深い溜息を洩しながらやつと氣が安らいだといふやうな具合に、空を流れる淡い雲や、ネワ河を行く汽船や短艇の後に引く波の輝きを眺めたりした。

愈々翌日マスロオワの事件は再審に附せられる事になった。ネクリュウドフは馬車を元老院へ走らせた。元老院の建物の宏壯な玄關先きで彼は辯護士フナアリンと一緒に立つた。其處には既に二三の馬車が止つてゐた。二人は壯麗な階段を上つて二階に行くと、其處の建物の事をよく知つてゐるフナアリンは左手の戸口の方をちよいと顎で指示した、其扉には新しい裁判制度採用の年數を表はしてあつた。取付きの長い堂で外套を脱ぎながら、議官がはや皆揃つたといふ事、其最後に後れた人もほんの今來たといふ事を受付に聞いてから、フロックを着て白い胸の上部に白いネクタイを飾つたフナアリンは、輕快な場慣れた調子で突當りの控室に入つた。その控室の内には右手に大きい衣類室と卓とが置いてあり、左手には螺旋形の階段があつて、丁度その時派手な假の制服を着たハイカラな役人が書類挟みを小脇にかいこんで下りて來た。

其室で一番目に著くのは、平常着の上衣に鼠色のズボンと穿いた、髪は長く白い長老めいた風采の老人で、其前には二人の廷丁が其老人を非常に敬ひ尊ぶらしい恰好をして立つてゐた。白髪の老人は衣類室の前に行つたかと思ふと、直ぐ其中へはひつた。その時フナアリ

ンは同じくフロックを着て白ネクタイをつけた同僚の一人を見つけて、早速何か頻りと話を交へた。その間にネクリュウドフは其室に居る他の人々をしげしげと打見たが、總計で十五人許りで、中には貴婦人も二人ゐた。その一人は鼻眼鏡をかけた若い女で今一人は婆さんであつた。新聞紙によつてなされた或る誹毀事件の審理があるといふので、普通よりも聴衆が多く、殊に新聞事業界の者が多かつた。

派手な制服を着て書類挟みを小脇に抱へた頬の非常に赤い美男の法廷取締はフナアリンの前に進んで來て、フナアリンの臨席する事件を尋ねた。そしてそれはマスロオワ事件だと聞くと、其旨を何かに控へて向うへ行つた。その時衣類室の扉があいて、さつきの長老めいた老人が出て來たが、今はもはや前の服装とは違つて、金びかの制服を着けてゐる所は何かの鳥のやうな恰好に見えた。

その制服は着てゐる當の老人にも妙な不快を與へるらしく、入口と向合つた戸口の方へ平常より早い歩調で行つてしまつた。

「あの人がベエですよ、仲々えらい立派な男です。」とフナアリンはネクリュウドフに教へた、そして仲間の其辯護士をネクリュウドフに紹介してから、これから審理の始まらうとする事件は自分は非常に面白いものだと思ふと云つて其話をした。

審理は直ぐと始まつた。ネクリュウドフは聴衆と共に審理のある廣間に行つた、と云ふのは誰も皆、フナアリンも同じく、聴衆の爲めに柵で仕切つてある聴衆席に行つたのである。彼得斯堡の辯護士だけは柵の彼方の卓へすんすん入つて行つた。

元老院の法廷は區裁判所の、それよりも狭く、設備も簡單で、たゞ元老院議官の着く卓に綠色のクロスでなく、金で縁取つた赤の天鵝絨が掛けてある事が異つてゐるのみであつた。附けたり物や事は何處の法廷に於いても同じであつた。聖像があり、鏡があつた。同じく仰山に勿體振つて法廷取締は「開廷！」を宣し、同じく一同は起立し、同じく議員連は制服姿で入つて來、同じく彫物した凭れの高い椅子にかゝり、同じく肘を卓に突いて平靜無拘泥の様子を見せようとするのであつた。

元老院の議官は四人で、すべすべに剃つた細面に灰色の目をしてゐるニキイティンが裁判長であつた。肩を一文字に堅く引結んだラルフは其白い細い手で書類を閱つてゐた。それからスコフロドニコフといふのは、どつぷりと太つた痘痕顔の法學者であり、最後に入つて來た四人目があの長老然たるベエであつた。議官連と同時に書記長と検事が入つて來た。瘦形の小柄な検事は色の黒い顔を綺麗に剃つて憂鬱さうな黒い目をしてゐた。ネクリュウドフは其の目慣れない異つた服装をしても居り、又數年來逢ひもしなかつたのであるが、それが大學

時代の親友の一人であつた事を直ぐ見て取つた。

「あの検事はセリョオニンと云ふ名ではありませんか。」彼はフナアリンに尋ねた。

「さうです。それが何うしたんです。」

「私はあの男なら知つてゐます。すぐれた立派な男ですよ。」

「そして又立派な検事です、職務には極く忠實でしてね。ぢやああの男に頼んでおけばよかれましたね。」

「いづれあの男なら、良心の命するまゝに處理するでせう。」さう云つてネクリュウドフはセリョオニンと嘗て親しい間柄であつた事、セリョオニンの清潔好きな、律義な、禮儀厚い愛すべき人物であつた事などを思ひ出した。

「そりやさうでせう。そしてもう間には合はない。」とフナアリンは低聲に云つて、はや始まつた控訴事件の報告書朗讀に耳を傾けた。

それは或る區裁判所に於ける判決を、其儘何の變更なく採用した上級裁判所の裁判を審理するのであつた。

ネクリュウドフも耳を傾けて事件の真相を知らうと努めたが、區裁判所に於けると同様、此處でも肝腎な主要事件に就いては少しも言及されないので、枝葉問題のみが煩さく議論され

た。事柄は或る新聞が或る株式會社の社長の誹欺を惡罵したといふ事件なので、果して其社長が株主一同を瞞着したか、又さういふ事を匡正する爲めには新聞はそんな記事の書き方をする方が良いのか悪いのか、といふやうな點が重要であらうと思はれるのであつた。併しそんな事に就いては誰も何とも云ふ者がなかつた。たゞさういふ記事を掲載する權利が法規に照らしてみても新聞發行者に有るとか無いとか、又それを掲載した事によつて發行者は何の犯罪に該當してゐるか居ないか、誹毀か名譽毀損か、誹毀には名譽毀損が含まれてゐるか、名譽毀損の中には誹毀が籠つてゐるか、といふやうな事を八ヶ間しく述べ立てるのであつた。尙又一般人には分らない法律第何章だの第何條だの、何部の何の判決だのといふ事が矢鱈に引張り出された。

唯一つネクリュウドフに分つた事は、元老院では事件の内容を細かく點檢はしないと昨日あれほど瞭然と云つたラルフが、今は現在の判決の破棄に著しく肩を持つて力を入れてゐる事と、セリョオニンが其控へ目勝ちな平常にも似ず烈しくラルフに反對してゐる事であつた。そんなにネクリュウドフを愕かしてゐるセリョオニンの激昂は、彼がその株式會社の社長を金銭にかけて非常に汚い人物であると知つてゐるのと、なほ又ラルフが數日前に其社長に招かれて非常な御馳走を受けたといふ事を偶然にも耳にしたからであつた。それでラルフが用心

に用心を加へてではあれ、著しく片寄つた意見を述べると、セリョオニンは過度に激しくそれを攻撃した。それは非常にラルフの癢に觸る所らしく、ネクタイを弄りながら顔を赤くして憤然として黙つた。そしてつんとして他の議員連と共に相談室に退いた。

「あなたの御臨席の事件は何ですか。」議員連が行つてしまふと直ぐ、法廷取締は又ファナアリンに尋ねた。

「さつき云つたぢやありませんか、マスロオワ事件ですよ。」

「よろしうございます。その事件も今日再審になるでせう。併し……。」

「何ですつて？」

「いえね、其事件は被告原告の双方の關係者は一人も加へないで審理に附せられる事になつてゐたのです、ですから今の判決が済めば議員の方達は此の室には來ないのでせう……しかし……兎に角さう云ひませう……。」

「何ですと？」

「いえ、さう云ひませう、云ひますよ。」と云つて法廷取締は何か又書きつけた。

實際議員連は今の誹毀事件を片付けてしまへば、マスロオワ事件其他は皆相談室で茶でも飲み卷苺でも吹かしながら極めてしまふ積りであつた、で再び此廣間には來ない積りであつ

たのである。

二一

議官連一同が相談室に入つて卓に就くと、ヲルフは盛んに判決破毀の理由を述べ立てた。裁判長のニキイティンは平常が意地悪い男であるのに、今日は又特別に機嫌を悪くしてゐた。彼は法廷で報告書朗讀を聴いてゐる時に既に自分の意見を組立てゝゐたが、今は全く其考に熱中してヲルフの云ふ事などは耳に入らなかつた。その考といふのは彼が昨日自分の日記に書き留めた事の思出で、それは彼が長い間望んでゐた或る高地位をエリヤアノフといふ男に横取りされたに就いての意見であつた。ニキイティンは自分の長い間の官歴に於て接觸して來た最高二級の各官吏に對し、自分が其日記に於て下した人物評が後世必ず重要な歴史的好資料となると確信した。彼は夫等の官吏中の若干名に鋭い非難の筆鋒を向けておいた、それは實は自分の給料を多くして貰へないからであつたが、さうは自ら認める事は出來ないので、露西亞帝國の衰滅を救はうとする自分を妨げられるからと云ふ意味を書いておいた。そして、今に見るがよい、こんな現在の社會状態では自分の觀察が後世の歴史家に取つて必ず或る完全な光明となるのである、と思つて其處に先見の明を誇る得意の愉快を味ふのであつた。

つた。

『さうですとも、勿論。』と彼はヲルフに何とか問をかけられたが、少しも耳に入れてはゐなかつたので、たゞ機械的にさう答へた。

ベエは併し自分の前にある紙に花環の形を描き乍ら、ヲルフの言葉を撃め面して聞いた。六十年代に行はれた自由説を大切に奉持してゐる純正な自由主義者たる彼は、若し彼の嚴格な不偏不黨の立場から一步でも傍へ外れる事がありとすれば、それはただ彼の自由主義に傾く場合のみに限られてゐた。それで今吟味してゐる新聞の誹毀事件に對しても、彼は誹毀罪にしようとする原告側には味方しなかつた、それは原告たる其株式會社の社長が實際不徳な人物であつたから許りでなく、そんな誹毀罪を成立させる事は言論の自由を束縛する所以だつたからである。ヲルフの言葉が終ると彼は花環を描くのを中止して、そんな分りきつた事を云はねばならない餘儀なさに眉を寄せながら、柔かに穩かな聲で極く簡潔に、さういふ告訴の成立しない理由を云つた。それから彼はその白髪頭を俯向けて又花環の形を描き續けた。

ヲルフに向き合つて腰かけてゐたスコヲロドニコフは、絶えずその頬鬚や口髭の端を太つた指で口に入れ入れしてゐたが、ベエの言葉が濟むと直ぐ髯を弄るのを止して、自分も假ひ

其會社の社長が實際不徳漢であらうとも、破棄の法律的理由が存在してゐるなら破棄に賛成するが、それが存在しないからには、ベエ氏の意見に従ふのだと、稍高い強い聲で述べた。そしてそれでラルフに一本参らしてやつたといふ愉快をも味はつた。すると裁判長もスココロドニコフに賛成した。それで事件は破棄しない事にきまつたのである。

ラルフは大に機嫌が悪かつた、殊に自分が不正の側に加擔した罪跡を擧げられたやうな氣持がして腹立たしかつた。しかし平氣な顔つきを装ひながら切りとマスロオワの一件書類を葉繰つた。一同は鈴を鳴らして茶を持つて來させ、カアメンスキイの決闘と共に其頃彼得斯堡全體の話題となつてゐた或る事件を話し合つた。

法廷取締が入つて來て、マスロオワ事件の再審にフナアリンとネクリュウドフとが出席し度いといふ希望を傳へた。

『それが此の事件ですよ。まるで小説みたいな事です。』とラルフは云つて、それからネクリュウドフとマスロオワの關係に就いて自分の知つてゐる事を話した。

一同は茶を飲み煙草を吹かし、さうした雑談を一通り終ると、又そこを出て法廷に出た。そして今先きの誹毀事件の決定を告げてから、直ぐマスロオワの事件にかゝつた。

ラルフは細い聲を絞り上げてマスロオワ事件の判決の破棄について述べた、そして今度も

全く不偏不黨ではなく、陪審裁判の下した判決を破棄し度い希望をあり、ありと見せた。

『あなたは何か云ひ足し度い事がありますか。』と裁判長はフナアリンに尋ねた。

フナアリンは立上つて、その白い胸を張り、びしびしと急所を突くやうな而して巧妙な云ひ廻はしをして件の裁判が法律の精神を無視してゐる六ヶ條を擧げ、それから簡單にはあるが事件の本質にも言及し、斯様な判決は明かに不正であるといふ意味を述べた。それから今此處に臨席して居られる元老院議員諸賢は勿論自分よりも、遙かに鋭い洞察力と法律的知識とを持つて居られる筈であるから、随つて此事件は自分の云ふよりも尙一層より良く觀取され理解される筈であるから、自分が斯く云ふのは如何にも出過ぎた事のやうであるけれども、自分の盡す可き義務によつて敢て諸賢の顔を侵す所以で、それは何分諒として貰ひ度いと云ひ添へて言葉を結んだ。そして勝利者のやうな微笑を浮べて椅子にかゝつた。元老院がマスロオワの判決を破棄しなければならぬ事は、その辯論によつて最早毫末の疑も挾む可き餘地は無いかのやうに思はれた。

ネクリュウドフも最早これで勝訴だと思つた。併し勝利者のやうな笑を浮べてゐるのはフナアリンばかりで、議員連一同も檢事も微笑の影だに見せないのみか、むしろ退屈してゐるらしい様子であつた。「もうそんな事は澤山だ、そんな事が何になるんだ。」とでも云ひさう

な様子であつた。フナアリンがやつと云ひ終つたので、たゞ其事だけを一同はほつと息づいて悦んだらしかつた。裁判長は直ぐ検事の意見を徴した。今述べられただけでは破棄の理由として不十分であるから破棄するわけには行かないと、検事セリ・オニンは簡單明瞭に云つてのけた。

それから議官一同は立上つて相談室に行つた。そこでは意見が二つに分れて、ヨルフは破棄を主張した。ベエも事件の實際を觀取して破棄に賛し、陪審員等の手落ちの廉を一同に云つて聞かせ、破棄の正當なる所以を熱心に説いて聞かせた。いつも嚴より酷に近いニキイティンは夫れに反對した。あとはスコヲロドニコフ一人で、その意見次第で何れかに決する事になつた。

そしてスコヲロドニコフは破棄に反對した、それは主としてネクリュウドフがそんな女と結婚して、道義感の満足を得たいと思つてゐる心を、彼は又なく嫌悪す可きものとしてゐるからであつた。彼は物質主義者でありダルキン教徒であつて、抽象的な道義の念だの宗教心の侮辱だとさへ思つてゐたのである。そんな墮落女の爲めに斯様にありとあらゆる手数をかけ、有名な第一流の辯護士が其女の辯護人となつて出かけて來、公府たるネクリュウドフが出

席し、しかも神聖な此の元老院で其事件が取扱はれるのか、と思ふと彼は堪らないのであつた。彼は再び髯の端を噛んで、苦蟲を噛み潰したやうな顔をした、しかし又平靜を装ふ事を努め、自分は破棄の理由不十分といふ事以外何も知らないかのやうな顔つきをして、そして裁判長に賛成してそんな控訴は成立せしめる事は出来ないと言つた。

さうしてマスロオワ事件の上告は棄却されたのである。

### 三三

『ひどい。』ネクリュウドフは辯護士フナアリンと共に玄關へ歩いて來ながらさう云つた。フナアリンは其處で自分の書類挾を一寸整理した。ネクリュウドフは又『分りきつた事件ではないか、それを形式一點張で棄却する、何といふひどいやり方だ。』

『この事件は彼地の裁判所だからが既にはやへまになつてたんですからね。』とフナアリンは云つた。『セリ・オニンも棄却にしたんですよ。』

『實にひどいやり方だ、怖ろしいやり方だ。』とネクリュウドフは繰返した。『今は何うすればいゝんですか？』

『かうなつたからには陛下に上奏するんですね。あなた御自身で愁訴狀をお出しなさい、そ

れ迄は居なくちやいけませんよ。私が文章は作りませう。』

その時星章の附いた制服を着た小柄のヨルフは玄關に出て来てネクリュウドフの方に進み寄り、『どうも仕様がなかつたんですよ、何しろ理由が薄弱だもんですからね。』と云つて其狭い肩を一寸揺り、目を一寸つぶつた。そして又すたすと通り抜けて行つた。ヨルフに次いでセリョオニンが出て来た、彼は舊友のネクリュウドフが来てゐると議官連に聞いたのであつた。

『實に意外だ、君にこんな處で逢はうなんて。』と云つて笑ひ乍らネクリュウドフの前に寄つて行つた。其目は憂鬱な表情を帯びてゐた。『君が此地に来て居ようとはおれは少しも知らなかつた。』

『おれも君が検事長なんかしてゐようとは思はなかつた。』

『検事長ぢやないよ、副長さ。』とセリョオニンは訂正して、『どうして君は元老院なんか来たんだね。』と其の憂鬱な目でネクリュウドフを見ながら尋ねた。『どんな用でね？』

『此處にかい。罪が無くて有罪の判決を受けた女を救ひ度いと思つて、正當な事をして貰ひ度ひと思つてさ。』

『女といふと？』

『今さき決定した事件の女さ。』

『おや、マスロオワの事件か。あれは君、控訴の理由が不十分だつたからね。』

『控訴が問題ぢやない、生きた人間が問題なのさ、あれは君無罪だよ、それが罰を受けねばならないといふぢやないか。』

セリョオニンは溜息をついた。『さやう、どうにか成らない事もなかつたんだが、併し……』

『どうにかもあるものか、全く無罪なんぢやないか。』

『どうして君はそれを知つてるんだね。』

『知つてるとも、おれは陪審員だつたからね。どんな手落ちを我々がしたか、ちやんとおれは知つてゐるよ。』

セリョオニンは考へた。

『では其陪審裁判の席でさう云へばよかつたのになあ。』

『云ひました。』

『ぢやあ其事が調書に書いてなけりやならなかつたんだ。それが書いてあるんだと破棄にはされたんだが……。』

いつも専門の研究と職務の裡にのみ生きて来て實際社會の事を知らなかつたセリョオニン



は、ネクリュウドフのロオマンに就ても何事も聞かずにゐた。さうと見たネクリュウドフは亦自分のカテウシヤ關係を彼に云ひ聞かせる必要を感じなかつた。

『けれどもあの判決が無茶な事は云ふ迄もなかつたんだ。』

『しかし元老院はそれを云ふ権利はないよ。若し元老院がそんな判決を内部に迄立入つて個人的に不正と認めて破棄するやうな事をした日には、元老院は自分の基礎を毀すばかりでなく、正當といふ事を保持するよりも破る事になるんだからね。』とセリ・オニンは又前裁判を思出しながら云つた。『そして又陪審員連の評決を無意義にして終ふわけだからね。』

『そんな事はおれは知らないが、たゞあの女が全然無罪な事は知つてゐるんだ。そして其不當な罰より救ひ出してやらうと思つた最後の希望は絶たれたんだ。最高の裁判所が不法極まる處置を認定したんだね。』

『そんな事はしないさ、事件の内容に立入つたのではないからね、又立入る事は出来ないからね。』とセリ・オニンは目を小さくしながら云つた。それから話頭を轉じようと思つて、『君は叔母さんの家に居るかい。君が此地に來たといふ事は昨日聞いたがね。叔母さんからおれにも案内狀が來たよ、君も來てゐるからキイゼエッタアの説教を聴きに來るやうにつてね。』そして唇の邊りだけにでも微笑を浮べた。

『おれも聴かされたんだ、併しおれは直ぐ厭になつたから出てしまつた。』彼はセリ・オニンが話題を轉じようとするのを苦々しく思つた。

『どうして厭になつたんだね。褊狹や誇張はあるやうだが、兎に角あれでも宗教心の發露だよ。』

『糞馬鹿の骨頂さ。』

『いや、どうぢやない。どうも我々露國人が我々露國の宗教を知らないのは不思議なもんだ、我々の固有な根本的教義を何か全く新規な説のやうに思つてゐるなんて。』とセリ・オニンは自分の舊友の蒙を啓いてやらうとでも思ふかのやうに云つた。

ネクリュウドフは訝つて彼をぢつと見た。がセリ・オニンは目を落しもせず、その目には今はたゞ憂鬱のみならず、不快と非難の色をさへ浮べた。

『ぢやあ其話はあとでしょう。』と云つてセリ・オニンは、其時恭しく自分の方へやつて來た法廷取締に『今直ぐ行くよ。』と云つてから、又ネクリュウドフに向つて溜息を洩しながら、『君には叔母さんの家で會へるだらうね。おれは七時頃いつも食事をやるから、何卒その頃やつて來て呉れ給へ。ナアヂェシユヂンスカイヤ街七十六號だ。もうあれ以來ネワの河水は何れだけ流れて過ぎたらうねえ。』そして又唇の邊りだけに微笑を浮べて彼方へ向いた。

「行かれたら行くよ。」とネクリュウドフは云つた。そして以前は親友だつたセリ・オニンが今では敵意は持つてゐないまでも氣心も分らない、主義も思想も感情も遠く相離れた別人になつてゐる事を、短い會話の間にも直ぐと感ぜないわけには行かなかつた。

五五四

二三

ネクリュウドフが知つてゐた學生時代のセリ・オニンは、人に抜けた立派な息子であり友誼に厚い友達であつて、年の割にはよく物事の分つた氣轉の利いた男であつた。服装もいつも小綺麗にしてゐた。信義があつて又大の理想家であつた。格別の勉強はしなかつたが學問も好く出來た、そしてそれを鼻にかけるやうな事もなかつた。論文を書いて金の賞牌を貰つた事もあつた。

そして口先き許りでなく、實際に於て人類の爲めに盡すといふ事を彼は生涯の目的としてゐた。そしてそれを行ふには彼の考では官途に就いて行ふより優れた道はなかつた。それで大學を卒へると彼は直ぐ自分の力を注ぎ得べき官界のあらゆる地位を物色してみた。そして最後に皇帝陛下直隸の第二部即ち法律制定の事を司る高等法院が、最も自分の才能を揮ひ得べき所だと思はれたので、直ぐ其處に入る事にした。

けれども彼は其處で自分の擔任の一切を最も忠實に最も精細にやつてみても、なほ一層有益な事をしたといふ自分の希望を満足させる事は其處では出來なかつた、それで彼は自分が當に斯く／＼しなければならぬと思ふ事を確に其通りやつてゐるといふ意識には到達する事が出來なかつた。さういふ不満は又極く小心な名譽心の強い上役との衝突によつて一層募り、とうとう其處を出てしまつた、そして元老院に移つたのである。元老院は幾らかよかつた、併し同様な不満は爰でもあつた。彼が斯く／＼であらう、さうあらねばならないと思ふ事が、何でもかでも一切さうでないといふ感じを、彼は絶えず味はつた。元老院奉職中に彼の親戚は彼に侍從職を兼ねさせる事にした、彼は金びかの制服を着けて各種の顯官の宅に禮廻りに馬車を驅らねばならなかつた。さうなつて來ると、彼はそんな事を意義あるものとは思へない心が尙一層強くなつた、けれども彼は其職を辭する事は出來なかつた、それは彼にさういふ役目を授けてやつてそれで彼を非常に悦ばしたと思つてゐる先輩や親戚等に、怒られ度くなかつたからでもあり、又自分の淺い心には一寸した愉快をも感ずるからでもあつた、即ち金びかの服を着た自分の姿を鏡に映して見るのも、まんざら悪い氣はせず、多くの人に敬はれるのも嬉しくない事はなかつたのである。

そんな種類の好都合は彼の結婚に就いてもあつた。世間的に云へば立派な配偶を彼は周旋

して貰つた、そしてそれと夫婦になつたのは主として女や其世話人を拒絶によつて辱しめ度くない怒らしたくないとの心からであつた。女も世話人も乗氣になつてゐたのである。それから又、若い美しい身分ある娘と結婚の出来るといふ事は彼の自負心をも悦ばせない事はなかつた。

けれども其結婚が、元老院の勤務や侍従職よりも尙一層無意義なものであつた事は又直ぐ分つた。子供が一人生れると妻は其後はもはや子供を持つまいと思つた、そして贅澤な俗悪な生活の渦中に没入した、良人たるセリ・オニンは又厭でも應でもそれに引摺られて行かねばならなかつた。妻はそれによつて良人の生活を滅茶々にし、自分も過勞と倦怠の外何一つ得る事はなかつたが、それでもそんな生活を變更しようとは思はなかつた。それを變更させようとした彼の一切の試みは妻の考に當れば岩壁に當つたやうに粉碎されたのであつた、妻の親戚の者等も妻と同じ意見で妻の主張に力を添へた。

長い金髪を持つた娘の子は、父の氣象には似てもつかない者に育つた、それは主として彼が自分の思ふやうに育てる事が出来ないからであつた。夫婦の間には、屢意見の衝突があつた、理解し合はうと思ふ事も無くなつた、世間の手前體裁を思つて隠してこそ居れ陰險な争鬭も始まつた。セリ・オニンは最早家の中が不愉快で仕方なくなつた。それで家庭生活も、

もはやセリ・オニンには元老院の勤めや侍従職のそれに劣らぬ無意義なものになつてしまつた。

それで彼はいつも憂鬱な目付をしてゐるのであつた。彼がネクリ・ウドフと同窓であつた頃は、彼はまだそんな社會的虚偽の俘虜ではなかつたのである、それで今ネクリ・ウドフに逢つてみると、當時の自分の事が、まざまざと思ひ出された。すると自分の今の生活の一切の無意義さが尙一層切に感じられた、そして云ひ難い悲哀に襲はれたのである。それをネクリ・ウドフも再會の最初の瞬間の悦びの後すぐ感じたのである。

二人が約束は交しながら、ネクリ・ウドフの滞在中とうとう訪ひも訪はれもしなかつたのは、矢張り又その爲めであつた。

## 二四

ネクリ・ウドフは辯護士フ・ナアリンと連れ立つて元老院を出で、鋪石の道を並んで歩いた。フ・ナアリンは馬車を後より従いて來させながら、或る高官の情婦が相場場で云々の事をして數百萬の金を儲けた事、ある有名な地位の高い某が自分の妻を他人に賣つた事、其他上流社會の各方面に出来したそんな事件を話した。そしてさうした悖德漢等は一人として監獄

に入れられてゐるでなく、皆それぞれ上流階級の各方面に重要な地位を占めてゐるといふのであつた。さういふ話を幾つもいくつも無盡蔵に聞き込んで蓄へてゐるといふ事が、辯護士には如何にも満足さうであつた、と云ふのは自分が金を儲ける爲めに取る方法は、そんな上流連中が同じ目的でやる方法に比ぶれば、全然法律に適つた立派な所業だとなるからであつた。であるから辯護士は、ネクリュウドフが最後の話を終りまで聞かないで急にさよならと云つて馬車を備つて自分の家路へ乗つて行つた時は、少からず愕いた。

罪の無いマスロオワに對する無茶苦茶な慘忍を元老院の決定が認定したといふ事、随つて彼女と運命を共にしようと思つてゐる自分の固い決心の遂行を尙一層困難なものにした事を思つて、ネクリュウドフの心は悲みに壓倒された。又辯護士が得々として話したそんな勝誇つた悪黨輩の怖る可き所業を思ひやり、なほ嘗ては愛す可き腹藏なき信義厚い男であつたセリ・オニンの今日の冷かな白々しい目付を思ひ出して、一層彼の心は結ばれた。

ネクリュウドフが叔母の家に歸ると、玄關番は何か物事を軽く粗略にあしらふやうな顔付をして、或る一人の女が玄關番の室で認めたといふ手紙を渡した。それはシュストオワの母の書いたものであつた。その文句は、私は娘を救つて下さつた恩人のあなた様にお禮を述べに上りました、それから又私と娘をお訪ね下さつてお會ひ下さいますよう幾重にもお願い致

します、私の家はワッシリイ・オストロフ區第五街の何番地であります。お目にかゝつてお話をすれば屹度エエラ・エフレモフナさんの爲めにもなる大切な事があります。八ヶ間しく冗々しくお禮を申上げて煩いと思召すやうな事は致しません、たゞお目にかゝつて悦び度いと思ひますから、何卒お訪ね下さいまし、お訪ね下さいますなら明日早くお願ひしたうございます、といふのであつた。

彼得斯堡に来てついで此の一兩日以内に遭遇した色々な経験で、ネクリュウドフはすつかり力を落した、何か目的を達するといふやうな事は迎も出来ないと思つた。モスカウで彼様にも此様にもと計畫して來た事は、今は子供の空想のやうに思はれた、その子供が大きくなつて實際社會に踏み出してみると、事毎に當てが外れてしまふやうに、自分も今丁度それと同じ経験をしてゐるのかと思はれた。けれども一旦彼得斯堡に來た以上、仕掛けた仕事を運ぶのは自分の義務だとは彼も素より思ふのであつた。

彼は書類挟みより書類を出して讀んでゐると、伯爵夫人附の給仕が扉にこつこつとノックして、茶を飲みに来るやうにとの伯爵夫人の旨を傳へた。

ネクリュウドフは間もなく書類を書類挟みに納めて叔母の室に行つた。行き際にふと窓越しにマリエッテの見事な馬車馬の止つてゐるのが彼の目についた。すると彼は急に軽く愉快

な氣持になつた。

五六〇

マリエツテは伯爵夫人の傍に腰かけ、今日は黒服でなく種々の色の雑つた明るい服を着て帽を被り、茶碗を手に持つて、美しい目に笑みを湛へてにこにこしてゐた。ネクリュウドフが入つて来た時は彼女は何か滑稽な而も尾籠な話をしたところらしく、——それはネクリュウドフには其の笑ひ方で分つた——叔母は腹を抱へて笑ひこけてゐた。マリエツテは口を引歪め諛けた顔付をして面白さうに小首を傾けながら伯爵夫人をぢつと見た。

『まあ、あなたは、こんなに人を笑はしちやあ、私たまらないわ。』と伯爵夫人はさも可笑しさに堪へられないといふ様子であつた。

ネクリュウドフは二人に挨拶して自分も其處に腰かけた。そして彼女の浮々した心を彼が苦々しく思ひかけると、その佛頂面を直ぐ見て取つた彼女は又直ぐ自分の顔付を變へた、彼に氣に入られ度いと思ふ彼女はたゞ顔付のみならず心をも變へた。心が自らさうなつたのである。彼女は急に眞面目になり、自分の生活の不愉快を感じ、何か知らない或物を追はうとする憧れを覺えた。それは偽りではなく、言葉でこそ何と云ひ現はす可きかを知らなかつたが、ネクリュウドフの其時の心持と同じ心持に彼女はなつたのである。彼女は彼の事件が何うなつたかを尋ねた。彼は元老院で控訴棄却になつた由を話し、なほセリョオニンと邂逅した事を話した。

『あゝ、あの心の立派なお方ねえ。まつたくですわ、un chevalier sans peur et sans reproche (非の打ち所のない勇敢な騎士の方だわ。) 全く心の立派なお方よ。』と彼得斯堡でセリョオニンが博してゐるさういふ稱呼を二人の女は繰返して褒めそやした。

『あの妻君はどんな人です。』ネクリュウドフは尋ねた。

『あの奥様？ それはね、私あの奥様の事悪く云ひ度かありませんの、でもね、セリョオニンさんを理解してはいらつしやらないわねえ。それはさうと、あのセリョオニンさんも實際その控訴を棄却になさいましたんですつて？』とマリエツテは心から同情を寄せた。そして溜息をついて、『まあ、なんてひどい事だらう。だつて餘りぢやありませんか。』

ネクリュウドフは顔を曇らしたが、話題を轉すべく、彼女の盡力によつて放免になつたジュストオワの話をした。そして彼女が良人に云つて呉れた好意に禮を述べ、それから其の無罪なジュストオワや其家族がたゞ誰も外部から氣付く者がなかつたといふ爲め許りにそんな苦しい目に逢はされてゐた怖ろしさを話さうとすると、マリエツテは彼に云はせず自分がそれを云つて切りに監獄のやり方を憤つた。

伯爵夫人は自分の甥にマリエツテが媚びてゐるのを見て面白がつた。

「あのね、」と伯爵夫人は二人が言葉を途切らしたので、「お前明晩はアライネ女史の所へ行くがいゝわ、キイゼエッタアさんが説教に行くのだから。」と甥に云つて、それからマリエツテに、「あなたもいらつしやいな、ね。」

「Il vous a remarqué (あの前方ちやんとお前をそれと見てらしつたわ。)」と伯爵夫人は又もや甥に、「あのお方が私に仰しやるにはね、お前の云つた事は何でもね、——そりや私からあのお方に話したのさ——するとそれはいゝ兆しほしですつて、お前は間違ひなく立派な基督信者になれるんですつて。だから明晩は是非行かなくちやいけませんよ。マリエツテさん、あなたからもさう云つて下さいな、ね、そしてあなたもいらつしやいな。」

「だつて私、何事にしても公爵にお勧めなど出来るわけがありませんわ。」と云つてマリエツテはネクリュウドフを見た。その様子は自分とネクリュウドフとの間には伯爵夫人の言葉に就いても又聖書の事に就いても、意見が全く相一致してゐるといふ事を告げ知らし度いやうな表情であつた。——「それから又、あんな事……私あまり好きぢやないんですもの……。」

「さうねえ、あなたはいつても風變りだからね。流儀違ひだものね。」

「どうして流儀違ひなの。私だつて信仰はあつてよ、無學な普通の女ですもの。」とマリエツテは笑ひ乍ら、「それに又明日は佛蘭西劇を観に行くのですから。」

「あ、さうね。お前あの女優見て？」と伯爵夫人は甥に尋ねてからマリエツテに、「何とかいふ名でしたつつけね、あの女優は……？」

マリエツテは其有名な佛蘭西女優の名を云つた。

「そりやお前観に行くがいゝわ、是非ともね。そりや巧うまいいのよ。」

「ぢやあ、叔母さん、一體どちらを先きにすればいゝんです、女優を先きに見ませうか、それとも説教の方ですか。」とネクリュウドフは笑ひ乍ら尋ねた。

「さうお前、挙げ足を取らなくつてもいゝわ。」

「私が思ふには、説教を先きにして、それから劇にするんですね。でないと後で説教を聞くとすれば、目も耳も肥えてゐるから其氣になれないだらうと思ひますよ。」

「いゝえ、佛蘭西劇を先きになさるがいゝわ、その後で懺悔をなさるが順ですもの。」とマリエツテは云つた。

「そんなに私を二人して弄いぢめるものぢやありません。お説教はお説教、芝居は芝居でせう。靈魂を救ふには、何も顔を長くして泣いて許りゐなくたつて好いわ。信心さへして居れば、それで愉快になれますとも。」

「叔母さん、牧師達よりもあなたの方が餘程説教は巧うまいぢやありませんか。」

『それでね、』とマリエツテは一寸何か考へてからネクリュウドフに、『明日私の機敷にいらつしやいな、ね。』

『どうも行けなささうです……。』

給仕が入つて來たので會話は一寸途切れた。訪問客があつたのである。それは伯爵夫人を會長にしてゐる或る慈善會の書記が會長に面會に來たのである。

『ぢやあね、ひどく愚圖の男ですから、私次の室で會つて來ますわ、直ぐ戻つて來てよ。マリエツテさん、此人に茶を注いでやつて下さい。』と云つて伯爵夫人は品のある早い歩調おしどりで出て行つた。

マリエツテが手袋を脱ると、肉の緊つた稍平たい手の左の無名指には指環が一つならず光つてゐた。

『召上つて?』と云つてマリエツテは酒精ランプの上の急須を握つた。その時小指は妙に可愛らしく他の指から少し離れた。

彼女は顔を曇らして云つた。

『私は自分の尊敬してゐる方達かたから、私が今のやうな境遇に居るために、その爲めに輕蔑されてゐるの思ひますと、いつも私は悲しくつて悲しくつて、そりや辛いつらいんですございますの。』

後の言葉を云ふ時は彼女は殆ど泣出しさうであつた。そして其言葉は慎重に考へてみれば決してさう深い意義を持つてゐるのではなく、たゞ漠然たるものであつたが、ネクリュウドフには非常に深い心の奥の聲のやうに思はれた、正しい立派な善良な内部の表はれのやうに思はれた、そしてさう云つて彼を見た此の若く美しい上品な貴婦人の輝いた目付は亦其言葉と共に、同じく強く彼を引き付けた。

ネクリュウドフは黙つて彼女を見つめた、彼女の顔より目を放す事は出来なかつた。

『あの、私はあなたがどんな心になつていらつしやるか、それが分らないで居るとでも思召して? あなたのなさいました事はすつかり分つてゐますのよ。誰だつて知つてゐますわ。私は嬉しくつて嬉しくつて堪りませんの、すつかり私賛成してゐますのよ。』

『さう嬉しがつて戴く理由はありません。まだ何一つしてゐないのも同然なのです。』

『そんな事は何方どこにしても同じぢやありませんか。私はあなたのさうなさる心を知つてますわ、よく私に分りますの。いゝわ、いゝわ、も共事は云ひませんわ。』と彼女は彼の顔に出た不快の色を讀むと自分から語を切つたが、でも私、監獄の内うちでひどい目にあつてゐる人達を見てやつて下さるやうな方は、冷酷な社會かたがたにゐてひどく苦しんで居る者をも救つて下さる事と思つてますわ。そんな事の爲めには命を投げ出してかゝつてもいゝと思ひますの。私だつ

て其位の事出来やうと思ふんですけれど……。でも誰も皆自分の運命に辛抱して行かないやなりませんし……。』彼女は彼が尊重し専心してゐる一切の事を女性の鋭い本能によつて観取し、それを云つて彼を自分に引付け可き事と關聯させ度かつたのである。そして切に彼を引付けようとするのであつた。

『あなたはあなたの運命に満足してはゐないんですか。』

『私が？』と彼女はさう問はれた意外に面喰つたかのやうな調子で、『私、満足してゐなければならぬんですの。——ですから満足してゐますのよ。でもね、時々心は心の底に、抑へても抑へても抑へきれない切なさか湧きましてね……。』

『それを抑へてはいけませんでせう、人間はその内部の聲に耳を假さなくてははいけませんよ。』とネクリュウドフはすつかり彼女の假托に囚はれた。

さういふ會話をしてゐる中には、ネクリュウドフも幾度となく心私かに其會話を羞ぢた。彼女の言葉が悪くはないが、何となく自分の氣を迎へる爲めのやうにのみ云はれるのを思つた。又監獄内の残忍な取扱ひ振りや田舎の農民の困憊の狀を聞いて、さも同情を寄するらしく感動するらしい彼女の様子にも、何となく餘りに調子を強めるやうな偽善らしいものもある事をも思つた。

伯爵夫人が戻つて來た時は、二人はたゞ昔からの友達であるのみならず極く仲のよい間柄のやうな調子で話してゐた、理解して呉れない群衆の間にあつてたゞ二人のみは互に深く理解し合つてゐるかのやうな調子であつた。

二人は權勢家の横暴、不幸な者の苦惱、農民の窮乏を熱心に話し合つた。——併し實際に於ては二人の目は互に見交はしながら、絶えずたゞ「あなたは私を愛して呉れて？」「え、愛してますとも。」と語り合つてゐるに過ぎなかつた。そしてたゞ全く不意に虹のやうな壯麗な色を與へた肉慾の感が、二人を強く引付けてゐた。

マリエツテは歸り際に彼に、力の及ぶ限り何なりとも何時でも盡力しますから何卒御遠慮なくと云ひ、尙ほ又明晩は是非とも劇場へ來て下さい、ほんの一寸でもよい、ある大切な事をお話し度いからと云ひ、

『あゝ、それにしても又何日お目にかゝれる事やら。』と溜息を洩した。そして指環の多い手に慎ましやかに手袋を嵌め、『では來て下さるでせう、ね、明晩、ね？』

ネクリュウドフは行くと約束した。

其夜ネクリュウドフは自分の室に一人になつてから寢臺に就いて燈を消したが、長い間睡れなかつた。マスロオワの事、元老院の判決の事、彼女と共に西比利亞に行くといふ自分の



決心の事、扱ては土地の所有權を放棄する事など、次から次と考へてゐるとそれ等の答として突然マリエッテの顔、その「いつ又お目にかゝれる事やら。」と云つた時の目つきや溜息や扱自身微笑を隠しえなかつた位に、それ程鮮明に浮び出た。

「おれは西比利亚へ行くのがいゝかしら？ おれはおれの富を他に呉れてやるのは誤りぢやないかしら？」と彼は自分に問うてみた。

窓掛越しに流れ入る彼得斯堡の白夜の微光の裡で、さういふ間に對する答は曖昧であつた。彼の頭の内に一切のものは紛糾し昏亂した。彼は努めて自分の少し前の爽快だつた氣分を呼び返さうとした、今迄自分を導き來つた理想を再び頭の中に置いてみた、併しさういふものも今の彼には以前のやうな威力を持たなかつた。

「して見れば一切はおれの空想の影法師であつたのか、おれは所詮そんな事をしたつて金無しには生きては行けないのではないか。良いと思つてした事を、おれは悔いねばならない事になつたのか？」と彼は自分に問うた、併し何とも答へる事は出来なかつた、そして長い間感じなかつた強い悲哀と絶望に襲はれた。やつと最後に彼は重苦しい睡りに入つた、昔カルタで負けた後などに往々あつたやうに。

翌日ネクリウッドが目を覺ました時の最初の感じは、前夜何かしら悪い事をしたやうな氣持であつた。彼は考へてみた、けれども何も悪い事をしてはゐなかつた、悪い行ひをしてはゐなかつた。——けれども心で何事かを考へてゐた、よくない考を抱いてゐた、カテウシヤと結婚する事、土地を百姓に分配してやる事、そんな事は皆無意味な空想で、實行す可からざる不自然な事である、自分は矢張り今迄通りに生活して行かなければならない、とさういふ考を抱いたのであつた。

悪い行ひはしなかつた、けれども悪い一つの行ひよりも尙一層悪いのはさういふ考であつた、あらゆる悪い行ひを生む可きさういふ考が彼の頭に萌したのであつた。悪い行ひだけならば、それを悔い改めてそれより遠ざかる事も出来る、併し悪い考はあらゆる悪い行ひを持來すのである。

さういふ事を思ひながらネクリウッドは前夜の考を心の中に繰返してみつゝ、一寸の間とは云へ何うしてそんな考を抱く事が出来たのかと自ら愕いた。斯く斯くしようと心をきめてゐる事が如何に新たに不案内にあらうとも、如何に困難で苦痛であらうとも、今はそれを

する事のみが自分に取つての唯一の生命である事を彼は知つてゐた。昔の生活に立戻るといふ事が又どのやうに氣樂で便利で好都合であらうとも、どのやうに容易で無雜作で安穩であらうとも、それは今は彼に取つては精神的の死である事を彼は知つてゐた。前夜よからぬ考に傾いた事を思ふと、彼はそれを漫ろに誰も往々する事のある朝の怠眠に比べてみた、目は今覺めて又眠らうとするのではないが、起きねばならない時と知りつゝ、又大切な悦ばしい用事が自分を待つてゐると知りつゝ、つい姑息な適意の若干時間を温かい寢床の裡により多く偷むのが、恰も昨夜の心の態度とよく似通つてゐたのである。

彼得斯堡滞在の最終日たる其日の朝ネクリウッドはワッシリイ・オストロフ區にシュストオワを訪ねた。その住ひは三階であつた。入口の番人に教へられた通りに行くと、ネクリウッドはつい險しい裏階段の上に来た、其處は直ぐ其時丁度食物の匂ひのしてゐる暗い臺所へ通じてゐた。前垂を着けて眼鏡をかけた可なり年の女が一人、竈の前に袖口を捲き上げて何やら湯氣の立つフライ鍋を掻きまぜてゐた。

「あなた何の御用です？」と其女は幾らか不愛想に尋ねて、眼鏡越しに彼の方を見た。しかしネクリウッドがまだ自分の名を云ふか云はない内に、女の顔は驚喜の色に充ち輝いた。

「おや、公爵様ではありませんか。」前掛で手を拭き拭き女は云つた、「どうして裏階段からおいでになりましたのです。あなた様は私どもの恩人ですわ。私は彼女の母でございます。」さう云つて彼女はネクリウッドの手を取つて接吻をしようとした。「昨日は私お宅に参りました、私の妹が是非々々参るやうにつて私に申しましたのですよ。妹は此處に居りますの。さ、どうぞお入り下さいまし、此方へどうぞ。」と云つて狭い戸口を抜け薄暗い廊下を通つてネクリウッドを案内して行きながら、途中で頻りに衣紋をつくろつたり髪を描へたりした。「妹はコルニコオワと申します、どうかするとお耳に入つてゐるかとも思ひますが？」と小聲になつて、戸口の外に立止りながら、「妹も矢張りあの事に熱心に關係して居りましたね、……氣の利いた女でございますの。」

女は扉をあけてネクリウッドを狭い室に通した。其處には、卓の前のソファに縞更紗の服を着た肥えた小柄の娘が腰かけてゐたが、母親に似たその丸顔は縮れた金髪の間を青ざめてゐた。娘に向き合つた椅子には襟に繡ひの入つた露西亞上衣を着た一人の青年が、黒い髭を生やして前屈みに腰かけてゐた。二人は餘程話に熱心になつてゐたらしく、ネクリウッドが入つて來たので其時やつと彼の方を見返つた。

「リディヤ、ネクリウッド公爵様だよ。そら、あの、お前を放免にして下さつた……あの

……」

五七二

顔の青白い娘は痙攣けるやうに跳り上つて、髪を耳の後ろへ掻きやり乍ら、大きい鼠色の目を睜つてネクリウッドフを見た。

「するとあなたが、あの、エエラ・エフレモフナさんが私に頼んだ注意人物なんですか。」とネクリウッドフは微笑しつゝ握手を求めた。

「えゝ、私がそれなんです。とリディヤは綺麗な齒並を見せて笑ひ乍ら云つた。

「叔母が大變あなたにお目にかゝり度いと申して居りましたの。叔母さん。」とリディヤは優しい柔かい聲で隣の室の戸口の方へ向つて呼んだ。

「エエラさんはあなたが拘留されたのを大へん心配しておましたよ。」とネクリウッドフは云つた。

「さ、どうぞ此方におかけ下さいまし、それとも此方の方へ。」さう云つてリディヤは青年が立上つて譲つた弾條入りの破れ椅子をすゝめた。そしてネクリウッドフが其青年を誰だらうと思つて見てゐるのに氣付くと、「この人は私の従兄弟のザハロフと云ふのでございます。」

ザハロフもリディヤのやうに、こゝこゝして挨拶し、ネクリウッドフが椅子にかゝると、自分も室の一隅にあつた椅子を持つて来てネクリウッドフと並んで腰かけた。隣の室からは年恰

好十六位の金髪の中學生が入つて来て、黙つて窓際の椅子に腰かけた。

「エエラさんは私の叔母とは大へん仲よしでございますの、けれども私はまだ全く知らないも同然位でございます。」とリディヤは云つた。

その時隣の室から、白い服に革帯をしめた氣の利いたらしい人好きする顔立の女が入つて来た。

「まあ、好うこそお訪ね下さいました、本當に有難うございますわ。」と其女はリディヤのソファに並んで腰かけると直ぐさう話しかけた。「どんな様子でございますの？ リディヤさんは？ あなたお會ひになりました？ どんな様子で苦痛に堪へていらつしやいますか？」

「エエラさんは苦痛を訴へはしませんでした。」とネクリウッドフは答へた。「自分は、大へん愉快だとさう云つておりました。」

「まあ、本當にあのエロチュカさんの事ですからね。さうでせうと私思ひますわ。」とリディヤの叔母たる其人は笑みを湛へて頭を振り乍ら、「本當にあの人はそんな方ですもの、立派な人ですわ。何でも他人の爲めばかり、御自分の爲めにはちつとも何もしないで。」

「さうです、あの人は自分の爲めには何も望んでおませんでした、たゞ姪御さんの事ばかり氣にかけて心配しておりました。姪御さんの拘禁されたのは全く何の罪もない事でさうなつた

のだと云つて、それを大へん残念がつて居りました。」

「さうですわ。」と叔母は云つた。「怖ろしい事でございます。姪は私の爲めに甚い苦しい目に逢つたのでございますの。」

「叔母さん、さうではないことよ」とリディアは云つた。「叔母さんに頼まれないでも私あの書類を藏つといたのかも知れないわ。」

「何でもいゝわ、私に委してお置き、私がお前より何でも譯をよく知つてゐますから。」と云つてから叔母はネクリュウドフに、「あのね、斯うなのでございます、ある人が私に少しの間ある書類を藏つといつて呉れと頼みましたのですよ、それを私が自分の住ひと云つてはないものですからリディアの許にやつて置きましたの。ところが其夜リディアの家が家宅搜索を受けましてね、その書類を見付されたのでございますの、そしてリディアも拘留されましたの、そして今迄留め置かれまして、誰から其書類を預かつたのだ、それを云へと責められたの、ございます。」

「私云やしなかつたわ。」とリディアは叫んだ、そして邪魔にもならない髪を苛々しげに又後ろへ掻きやつた。

「それをお前が云つたとは私云やしないぢやありませんか。」と叔母は云つた。

「ミイティンさんが拘禁されたのは決して私の爲ぢやないことよ。」とリディアは云つて、顔を赤くしながら邊りを見廻はした。

「もうそんな事お云ひでないよ。」と母親は止めた。

「だつて何故？ 私は云ひ度いわ。」とリディアは云つて、もはや笑ひはせず、たゞ顔を赤くして纏れた髪を指に巻きつけながら、絶えずあたりを見廻はした。

「何故つて、お前、昨日もそれを云ひ出したからあんなに気が昂つてしまつたぢやないの。」  
 「今日があんなにならないわ、云はして下さい、ね、叔母さん。それで、私責められても云やしませんでしたわ、たゞ黙つてゐましたわ。叔母さんとミイティンさんに就いて二度私審問を受けたのですけれど、私何とも云ひませんでしたの、そしてたゞさう云つてやりましたの、私もう返事をしませんつて。するとあのベトロフとかいふ刑事が私を説き伏せようと思つて、「私だけに云つておしまひなさい、何をあなたが云つても、誰の迷惑にも災難にもなりません、却つて無實の罪に落ちてゐる者を放免させる事になりますから。」とさう云ひましたの。でも私は、決して何も云ひませんとさう云つてやりましたわ。すると其刑事は「よろしい、では何にも云はなくつてもよろしい。その代りに私が擧げる名をあなたは打消す事も出来ないわけだ、よろしい。」とさう云つてね、いろいろな人の名を擧げましたわ、その中には

ミイティンさんの名も挙げましたわ。』  
『もうおよしよ。』と叔母が又制した。

『叔母さん、云はして下さい。』そして絶えず髪の毛を指に巻きつけて縛らしながら、『するとどうでせう、出し抜けに其翌日、ミイティンさんが拘禁されたつて誰だか戸口をこつこつ叩いて私に知らせた者があるぢやありませんか。で私、ミイティンさんは私の様子でてつきり刑事が感づいたに違ひないと思ひましたの、さう思ふと私悲しくつて悲しくつて、もうもう氣が違つてしまひさうでございましたわ。』

『お前のせむであの人が拘禁されたんぢやないことは、直ぐ分つたぢやないの。』と叔母は慰めた。

『それは私知らなかつたんですもの。私は自分のせむと許り思へて仕方がなかつたんですもの。私は室の内を行つたり來たりして、その事許り考へてよ。私のせむだわ、とさう思つたわ。私は寝てもね、夜着の中に潜り込んでね、その事許りが頭に來るんですもの。』お前のせむだよ。』お前の爲めにミイティンさんは拘禁されたのよ。』といふ聲が絶間なく耳に響くんですもの。』それは幻覺だわ。』と私さう思つてはゐるんですけれどね、それでもさういふ聲がするんですもの。眠らうと思ふんですけれど、眠れもしないんですわ。考へまい、思ふま

いと努めるんですけれど、すぐ又考へるんですもの。あゝ、本當に怖いわ。』リディアは益々昂奮して、髪を縛らしたり解したりしてさう云ふのであつた。

『リドオチュカ、もういゝ、もういゝ、もう氣を落着けてお呉れ、ね、いゝ子だから、ね。』と母は娘の肩を撫でてやり乍ら繰返し繰返しさう云つて慰めた。

けれどもリディアはもはや自分を制する事は出来なかつた。

『あゝ、怖いわ、あんな……』と云つて娘は尙ほさきを云はうとしたが、堪へかねて、わつと泣き出した、そしてソファから跳び上つて隣の室へ走り込んだ。母親も後を追つて行つたが、直ぐ戻つて來て、娘は大へん昂奮してゐるから其處には戻つて來ないと傳へた。

『あの可愛い娘の若い生涯を蹂躪つて。』と叔母の心も破れてゐた。『ついた事から私が事の起りになつてゐますので、尙ほ更私は悲しうございます。』

『田舎の新鮮な空氣を吸つて、今に直ぐ癒くなつて呉れるでせうよ、神様が癒くして下さるに違ひありません。』と母親は云つた。『父親の許へ遣る事にして居るのでございます。』

『あなたが救つて下さらなかつたなら、乾度あの娘は死んでゐるに違ひありませんわ。』と叔母はネクリウッドに云つた。『お禮を申しますわ。それから、私あなたにお目にかゝり度いと思ひました第一の用事は、どうかエエラさんに手紙を一通お届け下さいますようお願い

五七八  
したいと思ひまして。』と云つて衣囊より手紙を取り出し、『この手紙は封はして置きませんでございました。お読みになつても宜しうございます。そしてお考次第でお渡し下さるとも破つてお捨て下さるとも、何れとも良きやうにして下さいまし。尤も機密な事を洩らしてやるやうな事は些とも書いてありませんから。』

ネクリウッドは手紙を受取つて、『屹度届けてやると約束した、それから暇を告げて通りに出た。』

彼は手紙を読みはしないで封をして、宛名の人に届けてやる事にきめた。

## 二六

ネクリウッドは其夜マリエッテを劇場に訪ふ約束をしてゐなかつたら、彼得斯堡を發つ筈であつた。實は訪ふのを止す方が優しであるとは彼も思つてゐたが、一旦約束をしたのだからそれを履行しなければならぬといふやうな氣であつたのである。併し今一度マリエッテを見ようと思ふ心の外にも、嘗て自分に親しみの深かつた而して今は全く疎くなつてしまつてゐる社會に今一度ちよつと身を置いてみたいといふ心もあつた。

「あんな誘惑におれは勝てないだらうか。最後の試みをやつてみようや。」と思つた。それは

素より極く立派な心からではなかつた。

彼はフロックを着けると、直ぐ馬車を走らして『椿姫』の第二幕目の場に行つた。噂の外國女優は或る肺病女の死ぬる場面を新しい演出法で見せてゐるゝころであつた。

劇場は大入であつたが、マリエッテを訪ねて来るやうな身分高い人は特に丁寧に案内される事とて、すぐ彼はその棧敷を教へられた。

廊下に立つたゐた役服の劇場員は、知つてる人にもするやうに慣々しげにネクリウッドフにべこべこ頭を下げて、入口の扉をあけてやつた。

其處から見える棧敷々々には立つてゐる者、腰かけてゐる者、平土間には髪の毛白くなつたの、白くなりかけたの、禿げたの、禿げかゝつたの、扱ては髮油に光澤を出したの、縮れ髪にしたのなど、満場の観客は一心に舞臺の方を眺めてゐた。舞臺では笹縁のある絹や天鵝絨の服を着た一人の女優が、不自然な聲をあげて何やら獨白をしてゐるところであつた。棧敷の扉が開くと、誰やらシツと云ふ者があつた、ネクリウッドは温い冷い内と外との二様の風を顔に浴びた。

その棧敷にはマリエッテの外に今一人知らない婦人が赤い肩衣をかけ大きい仰山な縮れ髪をして腰かけて居り、尙又二人の紳士が來てゐた。其一人はマリエッテの良人たる將軍で、鈎

鼻のある氣六ヶ敷げな顔をした脊の高い押出しの好い其風采は、又胸部に填物をし硬布を入れた制服の爲めに尙ほ堂々たるものに見えた。今一人は金髪の殆ど禿げ盡した紳士で、顎はず、すべに剃つて双頬に儀式向きの長髯を蓄へた男であつた。上品にハイカラに綺麗に化粧し込んだマリエツテは、胸をすつと廣く開けた服を着け、肉付きのいゝむつちりと丸みを持つた肩の滑りも艶に、首の元にある小さい黒子さへ見せながら、直ぐネクリュウドフの方に振り向いて扇で自分の傍の空席を指し示し、感謝と親密の色を浮べて意味ありげに（さうネクリュウドフには思はれた）につと微笑んだ。良人たる將軍は落着いた調子で彼を見て、何事にも必ず見せる威儀を今も矢張り失はないやうに容體振つて頭を軽く下げた。さうした將軍の一體の様子にも、又夫人と交した視線にも、自分は此の美人の所有者であり司配者であると云つてるやうな得意が籠つてゐた。

舞臺の獨白が終ると、拍手の響きは劇場を揺がす許りであつた。マリエツテは立上つて、さらさらと鳴る絹服の裾を持ちながら棧敷の後部に行き、良人とネクリュウドフを引合はした。將軍は絶えず目に微笑を含みながら、お目にかゝつて嬉しいといふ意味を靜かに云つた、それから固い沈黙に入つた。

「私は今日此地を發つ積りでしたが、あなたと約束してゐたものですから。」

「私なんかには逢つて下さる譯はなくなつたつて、あの巧い女優だけは御覽になつてもいいわ。」とマリエツテは彼の言葉の意味を考へながら云つた。そして良人に向つて、「ねえ、あなた、今の幕のあの女優のやり方は本當に好かつたわねえ。」

將軍は頷いた。

「私は感動しません。」とネクリュウドフは云つた。「私は今日は實際の甚い不幸を見て來たのです。それは實に……。」

「ぢやあ、お掛けなさいな。そして話して聞かして下さいませ。」

將軍も聞いた、そして其目には次第に譏笑的な色が強く出た。

「私は今日あの女を訪ねたのです、長い間監禁されて今度やつと放免になつた娘の母を訪ねたのです。訪ねてみると其娘は色々な苦しい目を見た爲めに、頭も腦も滅茶々になつてゐるのです。」

「それがあの娘ですわ、あなたにお願いしたあの。」とマリエツテは良人に云つた。

「あゝ、さうかい、放免にされたので私も大へん嬉しい。」と靜かに云つて將軍は頷いた。その態度は今も疑ひもなく髭の下では譏り笑つてゐるのらしくネクリュウドフには思はれた。「私は良を吸ひに行つて來る。」

ネクリュウドフはマリエツテが昨日云つた通りに、何か大切な用件を云ふのだらうと思つてかけて待つた。けれども彼女はたゞ、陽氣に芝居の話をする許りであつた、そしてそれをネクリュウドフも感心するに違ひないと思ふのであつた。

ネクリュウドフは自分に彼女が云はねばならない用件など決して無い事を観て取つた、ただ其のむつちりした肩つきや一體の化粧の美と艶とを見せ度い爲めである事を知つた。それは彼には心地よくもあつた、併し又同時に厭でもあつた。

前にはすべてに附いてゐた婀娜つばい彼女の表面の魅力は、今とてもネクリュウドフに取つては無くなつてゐるではなかつたが、併し今は彼は其表面の下に潜んでゐる或物を見た。彼はマリエツテを見ると氣持がよかつた、併し彼女の心を擬ひ物だと思はないわけには行かなかつた、彼女が巧みに官海を游泳する良人と共に贅澤な暮しをしてゐる事を思はざるを得なかつた。昨日云つた彼女の言葉はすべて偽善らしく思はれた、彼女はたゞ彼を引付ける爲めに、自分に惚れさせる爲めに、たゞ其爲めに彼を誘惑する積りらしかつた、——さうして何うしようといふ考なのだらうか、と思ふとそれはネクリュウドフには分らなかつた、彼女自身にも分つてゐないらしかつた。それが彼には誘惑でもあり嫌悪でもあつた。彼は幾度も出て行かうと思つて幾度も帽子を取つた、併し又思ひ直しては席に着き着きした。が彼女の

良人が髭の邊りに眞の匂ひを漂はして棧敷に戻つて来て、彼を尻目にかけるやうな冷笑を浮かべながら見つゝ、彼を彼とも思はないやうな態度をすると、ネクリュウドフは其扉のまだ閉まらない前に廊下に抜け出た、そして外套を取るなり直ぐ劇場を出た。

彼はネフスキイ大通りをすたすた歩きながら家へ行つてゐると、自分の前を脊の高い肉付きの好いハイカラな服装をした女が一人矢張り向うへ行くのが目に付いた。向うから來る人も此方から追ひ越す人も皆其女を見るので、ネクリュウドフも急ぎ足に追ひ越して何氣なく其顔を見た。粧し込んでゐるらしい其顔は如何にも美しかつた、そして目元に媚を湛へてネクリュウドフに微笑みかけた。すると妙な事には彼は直ぐマリエツテを思出した、劇場でマリエツテに對して受けた誘惑と嫌悪が、今又その女に對しても感じられるのであつた。自分を叱るやうな氣持で彼は尙ほ急いで通り抜け、モルスカイヤ通りに折れて、それから河岸通りに出た。そして巡查の怪むのも構はず、ネワ河の河岸縁を幾度も行つたり來たりした。

「さうだ、あの女も棧敷におれが入つて行つた時同じ笑ひ方をした。」ネクリュウドフは考へた。「あの女も今の往來の女も其笑ひの底には同一の意味を籠めてゐるのだ。違ふ所は今の女は單純で大つびらに振舞ふのだが、あの女は決して野卑な事など考へないかのやうな、優美で高尚な感情に左右されてゐるかのやうな、そんな偽善をしてゐるだけなんだ。根本は同一



だ。加之今の女は正直であるだけでもいい、あの女は偽つてゐるではないか。」  
ネクリュウドフは前に自分が田舎貴族の妻と關係した事を思ひ出した、それを思ふと恥しくて堪らなくなつた。

「人間の身内に潜んでゐる動物慾といふものは厭なものだ。」と彼は考へた。「けれどもそれを大つびらに曝け出すと、誰もそれを自分の精神的生活の高い所から見下ろして輕蔑するから、まあいい。そして動物慾の俘になつた者も、矢張り其時までと同じ人間である。けれども自分の動物慾を似而非美的は似而非詩的な衣に包んで、それで自分は尊敬される可き者だと思ふならば、それはもはや度す可からざる者で、そんな動物慾崇拜の人間は善惡の別を知らない者である。さうなる事は怖ろしい事である、戦慄すべき事である。」

そして明るい其の夏の夜には安息と休養を與へるやうな暗が地上になく、寧ろ元の分らない陰氣な不自然な光が立罩めてゐるやうに、ネクリュウドフの心の奥にも今は安息を惠んで呉れる無知の闇がなかつた。一切が明らかであつた。此世で重大であり立派であり善であり美であるとされてゐる事が實は皆無意義な若しくは忌々しい事なのであつた。世間のあらゆる華麗と贅澤とは誰も知つてゐる昔からの罪惡を包んでゐるのであつて、その罪惡は皆に罪せられない許りか寧ろ揚々として勝ち誇り、人間の知識の考へ出し得る限りの粉飾を纏うて

ゐるのであつた。

ネクリュウドフは忘れようと思つた、そんな世相を見度くないと思つた、併し自づと見える物は仕方がなかつた。彼は自分にそんな世相の一切を見せて呉れる心の光を知らなかつた、それは丁度彼得斯堡の夜を包んでゐる朦朧した光の元が分らとでないやうに分らなかつた、そして其心の光も矢張同じく陰氣な不愉快な不自然なものではあつた、併しそれでも其光の照らし出す一切は見えないわけには行かなかつた。そして、見てゐると彼の心は嬉しくもなり不安にもなつた。

二七

ネクリュウドフはモスカウに歸ると、先づ第一に馬車を監獄の病院へ走らせた。元老院が前裁判所の判決を認定したといふ悲しむ可き報知をマスロオワに傳へて、愈々西比利亞行き

の準備をさせようと思つたのである。  
辯護士が書いて呉れた皇帝宛の愁訴状をも、彼は尙ほマスロオワの署名をさせる爲めに持つて來たのであるが、それには彼は殆ど希望を繋げなかつた。そして不思議な事には今もはや其の好結果を些とも願はなかつた。西比利亞行きの彼の決心はもはや十分に熟してゐる

のであつた、彼は愈々徒刑の囚徒等と一緒に生活すべく心の用意が出来てゐるのであつた。萬一彼女が放免になる場合には彼女の生活を、又自分の生活を何うして行かうかと、そんな事は彼は今は殆ど考へる事が出来なかつた。

ネクリュウドフをよく見覺えてゐた病院の小使は、直ぐカテウシヤが最早病院にゐない由を知らせた。

「では何處にゐるんです？」

「又監獄に戻りましたよ。」

「どうして戻されたんです？」

「どうもね、あんな女は仕方のない者でございますよ。」と小使は女を賤しむやうに微笑しつつ、「看護長とくつき付き合つたのでござりましてね、それで醫員長様が監獄へ突き戻したのでございますよ。」

ネクリュウドフはマスロオワに關する、殊に其心に關する、一切の事が深く自分の氣に掛からうとは思つてゐなかつた。然るに今さういふ事を聞いてみると、彼の心は烈しい痛みを覺えずにはゐられなかつた。彼の感じは丁度不意に何かの大きな不幸に遭遇した者の感じであつた。彼はがっかりした。はじめは彼は腹も立ち恥かしくもあり、彼女が心を入れ替へて

立派な人間になつてゐると許り思つて悦んでゐた、自分の考が滑稽に思はれて仕方がなかつた。彼女が云つた一切の言葉も、彼の犠牲を拒絶した事も、悔いも嘆きも恨みも涙も、今になつて考へてみれば、皆たゞ自分より捲き上げられるだけ捲き上げてやらうための墮落女の狡猾な術であつたのだなと思はれた。さう思ふと彼は此の前に會つた時に何だかそんな所が女に見えたやうに思ふのであつた、それが今、果して事實によつて證明されたのだなと思つた。彼は機械的に帽子を被つて病院を出て行き乍ら、さうした思を稻妻のやうに迅く頭に閃めかせた。

「さうなつたからには、おれは何うすれば可いのだ？」と彼は自分に問うた。「おれは尙だ彼女に盡すべき義務があるだらうか？ おれはそんな女のやり方によつて最早解放されてゐるではなからうか？」

けれども彼はさう自分に問うてみるや否や、自分は解放されて氣樂になり彼女は今後罰を受けて苦しい目に逢ふのだといふ勝利の感よりも、寧ろ自分が振り捨てられたのだ罰を受けただといふ敗北感に襲はれた。それは彼には非常に辛かつた。

「いや、其出来事はおれの決心を翻す事は出来ない、むしろ一層固くする。彼女がそんな事をしたのは、あれの心がさうなつてゐたからであらう、それではさうするがよいではない

か、看護長と戀に落ちたならそれもよからう、それは彼女だけの事だ。おれには何の関係もありません。おれの良心は其處に干渉を要求はしません。」と彼は自分に云つた。「おれの良心の要求するのは、おれの當然爲す可き事をなすにある、おれの罪を償ふためにおれの自由を捨てる事である。よしんば表面だけの結婚でも仕方がない、おれは彼女と結婚をする、その決心は何物によつても動かされる事はない。そして彼女が何處へやられやうとも、おれは必ず従いて行く。」

そして彼は急ぎ足に監獄の入口の方へ行つた。

その入口に見張をしてゐる看守に、彼はマスロオワに面會したい旨を典獄に傳へて呉れと頼んだ。彼を見覚えてゐた其看守は、監獄に重要な異動があつたと云つて、舊典獄が辭め嚴格な新任が代つた由を親しげに話した。

「今は嚴格になりましたよ。どうも困つてますよ。」と看守は云つた。「典獄は今丁度此處に居られます。直ぐ私さうお傳へませう。」

實際その通りで、新任の典獄は直ぐ向うからやつて來た。丈の高い頬骨の出た陰氣な顔をした瘦せぎすの男で、その舉動はひどく鈍かつた。

「面會は面會室で所定の面會日だけにしか出來ません。」と新典獄はネクリュウドフの顔を見

はしないで云つた。

「しかし私は皇帝陛下への或る愁訴狀に署名をさせなければならぬのですが。」

「では私にお渡しなさればいい。」

「私が直接に其囚人に話さなければならぬのです。以前は私許されてゐたのです。」

「それは以前の事です。」と典獄はネクリュウドフにちらりと一瞥を投げてさう云つた。

「私は知事の認可書を持つてゐます。」とネクリュウドフは猶ほも執念く云つて、懐中手帖の間に挟んでゐたそれを出した。

「では拜見ませう。」と典獄は矢張り彼の顔を見はせずに云つて、ネクリュウドフの差出した認可書を、白い長い骨張つた指で受取り、緩りと細かに讀んだ。その食指には指環が一つ嵌まつてゐた。

「ではどうか事務室にいらつしやう。」

今度は事務室には別に誰も居なかつた。

典獄は卓に就いて椅子にかゝり、その上に置いてあつた書類を頻りに繰つた、その様子は自分が面會の場に臨んで居ようとする目的らしかつた。ネクリュウドフが國事犯の女囚ボゴド、ウコフスカイヤに面會出來ようかと尋ねると、典獄は出來ないと言下に答へた。そして

又書類を頻りと繰った。ネクリュウドフはボゴドゥウコフスカイヤ宛の手紙を一通衣囊かぶさに持つてゐるので、さう云はれると何だか計畫が露顯あれて失敗した者が罪に服した場合のやうな氣持を覺えた。

カテウシヤが入つて來ると、典獄は頭を上げはしながらも彼女をもネクリュウドフをも見はしないで、『お話しなさるがよい。』と云つた。そして自分は矢張り書類を繰った。

マスロオワは前の通り白い服を着て胸當てを嵌めてゐた。彼女はネクリュウドフの方へつかつかと歩んで來て、彼の怒つたらしい冷かな顔を見ると、顔を眞赤にして上衣の端を弄いぢり乍ら目を落した。そのどぎまぎした様子はネクリュウドフには、病院で小使に聞いた話が果して事實であつたといふ證據のやうに思はれた。

ネクリュウドフは今度も彼女に前回と同じ態度で會はうと思つた、けれども彼女に握手を求む可く自分の手を差出す事は出來なかつた。それ程今は彼は彼女を忌々しがつてゐるのであつた。

「私はあなたに不首尾な知らせを持つて來たのです。」とネクリュウドフは彼女を見もせず又握手を求めもせず、機械的な調子で云つた。「元老院で控訴は棄却になりました。」

「私さうでせうと思つてましたわ。」と彼女は、息を切らしたやうな一種異様な聲で云つた。

以前だつたらネクリュウドフは、何故そんな事を云ふんです、さうだらうと思つてゐたなんて何うして云ふんです、と云ふところであつた。が今は彼はたゞ一寸其時彼女を見た許りであつた。彼女の目には涙が一ぱい溜つてゐた。けれどもそれは彼の心を少しも和らげはしなかつた、寧ろ却つて一層彼を激させるのであつた。

典獄は立上つた、そして室内を彼方此方へと歩き出した。

マスロオワに對して嫌惡の情は湧くとは云へ、元老院での敗訴を遺憾に思ふ自分の心は知らせ度いと彼は思つた。

「だがまだ失望しないがいゝでせう。」と彼は云つた。「皇帝陛下に差上げる愁訴狀で或は目的を達するかも知れませんが、達するやうに私も希望してゐます……………」

「そんな事は私にや何うなつてもいゝんですの。」と云つて彼女は濕うるんだ目で彼を見た。

「ではどんな事が大切なんです？」  
「あなたは病院にいらしつて、私の噂をお聞きになつたのですわね……………峠度さうでせう……………」

「聞きました。併しそれは私の關知つた事ぢやありません。」とネクリュウドフは不愉快さうに冷かに云つた。面目を潰された口惜しさが幾らか折角薄らいでゐたのに、病院といふ言葉